

## 紀行文編（二）

### フランス

#### 南仏とギリシャ（ロンドン便り 六）

三月二十八日から四月五日まで、南仏とギリシャに旅行した。本質的には旅行が好きでないのか、どうもオツクウだし、一週間もロンドンのアパートを離れていると、別に待っていてくれる人がいるわけでもないのに、早く帰りたい、と言う気持になるのが自分でも理解できず、何とも面白かった。太陽の輝くギリシャから帰ってみればたった三時間飛行機に乗っただけと言うのに、ロンドンには相変わらず厚い雲が低く垂れ込め、みぞれの降る寒い天気だった。

#### 一・ニースとカンヌ

三月二十八日から三十一日までイースターの休みなので事務所の独身者二人で二入行きグループ・ツアーに参加することにした。二十八日の朝のロンドンには雪。この冬一番の雪だったろう。屋外駐車場の車も真っ白に埋まってしまっていた。ところが、二時間足らずでニースに着いてみると、まるで別世界。太陽の光の強さが違う。ニース・コートダジュール空港自体がフェニックスに囲まれ、まるで熱帯の雰囲気である。空は澄んでいるし海の色も紺碧と言う表現がピッタリ。流石にコート・ダジュール（紺碧海岸）である。

この地中海の海岸沿いにカンヌ、ニース、サントロペ、サンレモなどの町が並んでいるわけだが、ここはやはりヨーロッパの高級避暑地である。金の心配なしに、ここで一週間でも遊べれば天国だろう。この地の人たちもそれを当て込んで、物は高いし店も高級品店ばかり。まだシーズンには少し早かったが、シーズンともなると大変だそうだ。一日に三度も四度もお召し換えをして、海岸通りを犬でも連れてシャナリシャナリ歩き、高級レストランで食事して夜はナイトクラブでシャンペン、と言うのがここへ来る女性

の望みだとのこと。男性も夏のファッションを競うという。

こちらの人は本当に休暇を大切にしている。どんなに大事な仕事をしていても、自分は明日から休暇だ、とサツと休んでしまう。会社としても、本件は担当の誰々が休みだから彼が出てくるまでお預け、と平気で割り切ってしまう。でも、ロンドンを含めた北部ヨーロッパと南ヨーロッパの気候を比べてみると、これも判るような気がする。休暇には、太陽を求めて、一年間溜めた金を持って南へ南へ下るのだろう。でも最近ではコート・ダジュールは高級と言うか高価になりすぎて、一般の人は安いスペインやギリシャに行くのだそうである。

プロバンス地方の古い街巡りをする。岩山に貼り付いて城壁に囲まれた村がある。中に入ると狭い道の両側は、家の上に家を重ねたような造り。勿論、庭を作る余裕なんてないし、町の中には緑もない。外敵から身を守った昔の名残りなのだろう。便利さや住み心地より安全を選んだのだと思う。「日本人とユダヤ人」の中に安全の代償について触れられていたところがあったが、この辺を見ると良く判る。日本と言う国は何だかん

だ言いながら恵まれた国なのだと思う。それにしても閉鎖的な村である。これだけガツチリ出来上がってしまつては、この社会から出て行くのが大変だろうと思う。こう言う社会からは天下国家を論ずる思想は出て来ないのではないかと思つた。又、氣候が良いだけにその生活に安住する感じになるかも知れないと思つたことだつた。

二一スにも公営の賭博場がある。出かけて行ってルーレットをやつてみた。誕生日の二六を中心に張つていたら大当たり、四〇〇フラン（三万円足らず）程儲けたので、一緒に行つた二人をナイト・クラブでおごつたが、一人当たり六〇〇〇円ぐらいの見当で、まだお釣りが来た。フランスのショーは流石に良い。パリのリドから来たと言つていたが洗練されている。スツカリ楽しんだ。

## 二・モンテ・カルロ

モナコと言つる国はバチカンの次に小さな国で、モンテ・カルロを含め三つの都市から出来ている。人口三万人だがモナコ人は三〇〇〇人とのこと。江戸っ子と同じで、とに

かく三代住まないとモナコ人になれない。その代わりモナコ人は税金を一銭も払わなくて良い由。レーニエ三世やグレース王妃の住む王宮の維持や七〇人の兵隊さんの給料はカジノの上がりで購入のだそうだ。

ということ、一晩モンテ・カルロのカジノを見物に行った。流石に世界一のカジノである。カジノの要素は単なる賭博場だけでなく、ナイト・クラブと劇場がシッカリしていることだ、とのこと。だから、まず建物が立派。辺りはロールスロイスやベンツなど世界の高級車で一杯。ダーク・スーツにネクタイでないとう入場できない。パスポートを見せ、身元がシッカリしている要がある。賭博場が二つあり、手前のは少し安いところ、最低一〇フラン（七〇〇円）からバクチが出来るところである。こちらの方は大衆的で混んでいる。更に入場料を払うと、奥の高級なところに入ることが出来る。後学のために一寸入ってみたが、遊んでいる人たちの質が違う、と言つ気がする。最低五〇フランのルーレット台が並び、正装の紳士、淑女が遊んでいる。一〇〇フラン、一〇〇〇フランが飛び交う。一度に二〇〇〇フラン（十四万円）位賭ける人はザラ。どういふ訳

かあまり勝つ人がいない。いつか書いたと思うが、バクチというのは分に応じて楽しむものだと思う。貧乏人は一〇〇円勝った、負けたでスリルと喜びを感じることが出来るが、金持ちは何十万の金を動かさないと面白くないだろう。分を心得た大人ばかりの社会だったら、美濃部さんみたいに、ヒステリックにバクチ禁止何て言わなくても良いのではないかと思う。少しやってみたが、最終的には負ける。バクチは引き際が大事だと思う。その日の波に乗ったところを知ることが出来、そこで止める精神力があれば負けないと思う。これだけ勝ったら止めよう、と言う上限を決めておくのも良い。又、その日の予算を決めておき、それだけ負けたら潔く辞めることも絶対必要。この二つが守ればバクチと言うのは危なくもないし、結構楽しいゲームだと思う。

### 三・ギリシャ

休みの最終日の三月三十一日午前三時。東京からの国際電話でたたき起こされ、急遽アテネに行くことになった。ある程度予想していたことで、書類も持って行っていたの

で良かった。まず金の算段をし、切符の手配から宿の確保。休みを一日犠牲にして、グループ・ツアーと別れ、一人ローマ経由アテネに向かった。

ここはもう夏の感じ。南仏よりももっと太陽光線がきつく海の色がきれい。もう暑いくらいである。太陽光線のせい、土質のせい、周りの山は淋しい。青々とした感じがない。岩肌のところどころに緑が貼り付いている感じ。大体黄褐色。これが夏になると緑が褪せて黄ばんでしまう、と言う。いかにも乾いてパサパサの印象だった。

前半は待ち時間の多い仕事だったので、結構良く歩いた。ホテルで貰った小さな地図を片手に自分の足で歩くのが一番良い。街の真ん中の憲法広場にあるホテルに泊まったので、どこへ行くにも便利。古代博物館も歩いて行く。途中、商店街あり、大学あり、図書館あり、歴史博物館あり、これらが古い感じの建物なので見るだけでも面白い。古代博物館はギリシャの政治家の登竜門、ポリテクニークの隣にある。三十分ほどで中を駆け歩いたが、やはりゼウスの銅像が一番印象に残った。日本が埴輪なんて土の美術品を作っているのがせいぜい紀元五世紀ごろだったと思うが、ここではそれより一〇〇〇

年も前に青銅や大理石でこれだけのものを作っている。イタリア同様、昔のギリシヤ人は偉かった。

アクロポリスも歩いてみることにする。地図には坂の具合が書いていないので、簡単に行けると思つて歩き始めたが、思わず山登りをさせられ大変だった。アテネの市の中心、小高い丘の上にあるが、トルコの占領時代に要塞になつていたため砲撃で破壊されたり、英国のエルギン卿という人が建物に彫刻してあつた裝飾物を全部剥ぎ取つて大英博物館に持つて行つたりしたので、今は廢墟だがこれもまた大変なもの。圧巻はやはりパルテノン神殿だが高さ一〇メートル以上の石の柱に囲まれた大神殿はアテネ帝国の力を世界に示すのに格好の大建築だつたに違いない。

イタリアと同じように、ギリシヤも船を除けばやはり昔に頼っている国。海運と観光で持っているのだから、三千年昔の人の努力が、今のギリシヤ人の半分を食わせている計算になる。

ギリシヤ人と言うのは、人懐っこく陽気で親切、と言う感じがした。でも根っからの

商人である。店でも正札通り買い物すると、バカだ、と言われる。正札の三割から四割負けさせるのが常識と言う。おみやげの壺は、土地の人に一緒に行ってもらったが、旅行案内書には七十五ドラクマと書いてあるのを四十五まで値切らせて面白かった。小さい時からこんなことをやっている、身についてしまうのだろう。日本へ来てデパートでこれをやった人がいた。日本のデパートでは絶対に駄目だ、と言うのに、やってみるだけだ、とやってみて、どういふ訳か成功してしまい、大いに威張られたことがある。こんな感覚だから商売相手にしたら大変。値切るのが当たり前という感覚を持っている上に、駆け引きが上手いから弱みに廻るとヒイヒイ言わされる。決して儲けさせてくれないし、自分の利益だけを強行に主張するので他の仕事にも影響して、ウツカリするとヒドイ目に遭わされる。ギリシャ船主と言うのは数が多いが、我々の商売ではどちらかと言えば限界船主の範疇に入れており、出来ることなら相手にしたくないところだが、こう不景気では贅沢を言っていられない。大分挨拶に歩き回る。具体的商売なしに話していれば愛想は良いし気軽に話に乗ってくれるだが、一度利害が絡むと実にタフ

になるのだからいやになってしまつ、と言つより感心してしまつ。

(昭和五十年四月十三日)

## フランス人の悪口

昨年末の欧州行きはフランスの客との商談が中心で、時間待ちの間にアチコチ廻り、結局四週間近くあの辺をウロウロしていたのでしたが、パリには四回出入りしました。悪口を書こうというのは、別に商売が上手く行かなくて逆恨みしている訳ではありません。今追つかけている商談は時間のかかる話で、今回ではとても結論が出ず、翌年への持ち越しになったのですが、色々と希望をつなぐような工作が出来て、出張自体は成功だったと言えるのではないのでしょうか。

フランス人の悪口は、昔、ロンドン便りの頃にもどこかに書いたみたいなきがします。最初の付き合ひ(四十一年のマルセーユ行き)から印象が悪く、それがどうしても抜けないのか、何時まで経っても好きになれないのです。フランス人の客の方も、こちらが

いくら営業スマイルを作ってみても、心の底がどこかに見えて反発して来るのかも知れません。

まず、大時代的なところが気に入りません。考えるスケールは大きいのです。ベルサイユの宮殿、凱旋門やエッフェル塔、そこら中の建物や広場の見事さ・壮大さは他の国では見られないものです。最近でも、現在作りつつある新副都心のスケールの大きなこと、建てられつつある建物の見事なこと、新しい駅の立派なこと。駅なんか三〇年・五〇年先を考えてあるのでしよう、広々と場所が取られ、ゆったりしていて、日本の所謂後追いスタイルとは大違いです。最初ミミツチク作って、三年も経つと手狭で不自由になる日本の都市計画のオソマツさは一寸極端ですが、遠い将来を考えて金を惜しまずに使うと言うフランス人の精神は見上げたものです。ところが使い易さとか経済性とかを考えたらどうなのか。例えば、この副都心に行くと、プロの運転手が悲鳴を上げます。迷路みたいな地下道に入ってしまったって、目指すビルがどこにあるのか判らない仕掛けになっています。帰りにタクシーを拾おうと思っても、これは諦めた方が早い。誰かに頼

んで呼んで貰う他ありません。建物も見た目は美しいけど、どう見ても経済性や使い易さよりも、見た目を重要視しているとか見えない。見た目の美しさとかカッコの良さの方が優先され、偉大さを誇示しよう、人を驚かそうとしているように思えるのです。

カッコ良さ、見た目を気にするやり方も気に障ることの一つ。大体フランス人と言うのは、お洒落で素敵と言うのが定説になっています。確かに街を歩いている人たちの格好の良いこと、特に女性は派手ではないけれどセンスが良いと言う感じの人が多くて、流石と思います。こんな言い方をすると奥さま方の輦轡を買うかもしれないませんが、女性のお洒落は良い。日本のご婦人方もお化粧にはタップリ時間を掛けられるし、出かける前に、今日は何を着て出かけようか、と鏡の前で一生懸命に考えている娘の姿なんて、可愛くて良いものです。女性は見た目も美しい方が良いでしょう。それがフランスでは、野郎どもまで何かお洒落に気を使いきているように感じるのはこちらの劣等感でしょうか。洋服のシワより脳みそのシワのことを考えろ、と言いたくなるのです。フランスで見ていて、カッコ良いな、と思うのは、若い女性とお爺さん。女性も流石に婆さんはパツと

しません。いかにも年輪の入った良い皺の顔の渋いお爺さんが、地味なセーターと厚手の上着を着て、一寸洒落たスカーフに往時のダンディ振りを偲ばせて、散歩したり、キヤフェでゆっくりコーヒーを飲んでいる姿なんてのは中々サマになります。

ですから、格好の良さを売るものは良い。ショーなんて素晴らしいと思います。リド、ムーラン・ルージュなんか、アイデア・構成・出し物・ダンサー（これは男女とも）どれを取っても世界の特一級品です。意味なんか判らなくても、ショーになるとあのフランス語の響きが快くて吸い込まれる感じ。フランス語と言うのはショーのための言葉ではないか、と思うほどです。ファッション・ショーなんて行ったことはありませんが、美しさ、格好の良さを見せるショーですから、さぞ素晴らしいものだろうと容易に想像できます。昔から優れた芸術家を輩出していますが、この事実と格好良さ、見かけの良さを好む事実を結びつけて考えるのは乱暴に過ぎるでしょうか。

ゆつたりした大国なんて言いますが、言ってみればグズなのだと思います。何かお喋りがやたらと多いのです。フランス語そのものが饒舌に聞こえる言葉なのかも知れませ

んし、それをこちらが丸きり判らないから、殊更そう感じるのかも知れませんが、やたらとペチャクチャ喋っていることが多いように思います。大の男が公衆電話なんかで長々とペチャペチャやっているのを見ると、何をやっていやがるんだ、と言つゝ気になります。

立派なド・ゴール空港で設備は整っている筈なのに、飛行機が着いた後、荷物が出て来るに時間のかかること。これは見かけの割りに機能が伴っていない、と言つ話にも戻りますが、この設備を使う人間が遅いのではないかと思えます。出発カウンターでのチェック・インも遅い。発券作業は総てコンピューター化され、立派な機械の前には小粋なパリジェンヌが座っているのですが、すぐに行列が出来るし、進みも遅いのです。同じエア・フランスでもフランス人のスタッフがやるのと日本人のスタッフがやるのとでは、行列の進み具合のスピードが格段に違うので良い比較が出来ます。エア・フランスの機内で、サービスについてのモニターに選ばれたので、立派な設備があるのだからもっと早いサービスが出来る筈だ、と苦言を呈しておきました。

ホテルの出入りの手続きも一体に遅い。食事のサービスも遅い。一般的にパリより田舎の方にこの傾向が強いように思います。フランス人から見ると日本人とは何とセツカチなのか、ということになるのでしょうか、いずれにしてもあまり能率的な人たちとは言えないみたいです。

余所者を受け付けない排他的の大国意識も鼻につきます。どうやらこの国の人はフランス語の判らぬ人間は野蛮人ということ、頭から相手にしないみたいな、そんな感じすらします。(これも僻みかも知れませんが)こちらが外国語の英語で一生懸命を通じようと努力しても、平気でフランス語で返事をして来る。船の商売の世界では英語が万国共通語みたいになっていて、どこへ行っても大抵英語で間に合つのですが、この世界で英語が不自由な人が一番多いのはフランス人ではないかと思えます。フランス人の英語も判り難い。発音が違うせいもあるのでしょうか、一般的にあまり上手い方ではありません。これは、自分たちはフランス語さえ出来れば良い、自分たちと付き合いたければフランス語を習って来い、と言う大国意識があるからではないでしょうか。パリなん

て、あれだけ観光地なのに、英語の道路標識はない。地下鉄にも英語の案内はありません。地下鉄の駅で案内所があったので、ものを尋ねに行ったら係員が英語全くダメ。せめて案内人位外国語の判る人を置けばよいのに、と思います。もっとも日本もこうしたサービスには欠ける国ですから、外から見ると同じように不自由な国と見られているのかも知れませんが・・・。

商売もやり難い面があります。所謂バイ・フランス政策。今は多かれ少なかれ世界中どこでもこの傾向にあります。自国産業保護主義の強い大国はアメリカとフランス。先頃話題になったビデオ通関の子供じみた嫌がらせ、この辺も自分さえ良ければ、と言う大国主義の表れではないかと思うのです。

建物、並木、公園、広場といったものは立派できれいなのですが、足元の汚いのはフランス共通のように思います。あの立派なベルサイユ宮殿にトイレがなかった、と言うのは有名な話です。昔は、朝、街を歩くときは余程気をつけて道の中央を歩かないと、頭から汚物を掛けられる恐れがあったと言う事を何かで読んだことがあります。各家庭

にはトイレがなく、夜の間にバケツに溜まった家中の排泄物を、朝窓から路に捨てたのだそうです。今、困るのは犬のウンチ。ペットが好きなのは良いけれど、後始末は得意でないみたいです。ウツカリ建物なんかに見とれて歩いていたりすると、グチャリとやります。今回も用心はしていたのですが、着いた早朝、ホテルに入る前の短い間に早くも一つ踏んづけました。着いたばかりで少々ボンヤリしていたせいもありますが、一流ホテルの前ですらそうですから後は推して知るべし。これでウンが付いて良い仕事になるのか、ウンの尽きでダメなのか、と同行の人と笑ったことでしたが、気持の良いものではありません。食べかす、ゴミは平気で道路に捨てるとし、折角のきれいな街なのだからもつと大切にすれば良いのに、と思います。そこへ行くと日本の街はきれいですね。悪口の締めくくりが尾籠な話になって申し訳ありません。(昭和五十九年三月十一日)

## フランスへの修学旅行

長崎東高八回卒在京同期会では二年に一度の割で海外旅行をやっていきますが、今年の

行き先はフランスでした。数えてみると私は、過去フランスには（ロンドン駐在中を含めて）二十二回出入りし、四十二泊しています。今更フランスでもないし、どうしようかな、と思ったのですが、フランスに行ったと言っても仕事上の出張ばかりで観光地には殆ど行っていないので、修学旅行の積りで参加することにしました。参加者が四十五人でしたが、この内純然たる同期生は二十一人、後は奥さんとかその友達と言う女性優位の団体でした。このグループも拡大の一途ですが、団体旅行としてはこの辺が限度なので、何か考えねば、と言うのが幹事団を含めての嬉しい悩みです。十月七日から足掛け十二日間、添乗員や幹事団の陰のアシスタント役も勤め、楽しい旅行でした。

### 一・世界遺産を巡る旅

今回の旅はまずニースに入り、アルル、アビニオンなどプロバンス地方を見ながら地中海沿岸を西に進み、ピレネー山脈の東側を北東に走って大西洋岸（ビスケー湾）のポルドーに出、更に北上してトゥールからブルターニュ地方のモン・サン・ミッシェルま

で突き抜け、最後にパリに一日泊すると言う、全コース、バスで移動の旅でした。走行距離は二四〇〇キロ程度になったそうです。ユネスコが認定する世界遺産、と言うものがありますが、今回はこの世界遺産を意識した旅を作ってくれたようです。帰ってから調べてみたらフランスには二十七ヶ所の世界遺産がありますが、今回はこの内、八ヶ所を観たことが判りました。

まず、アルル(Arles)の「ローマ遺跡とロマネスク様式建造物」。ローマのコロッセオを一回り小さくしたような大きな闘技場があります。往時は二万人を収容出来たそうですが、今でも一万二千人程度の行事はここで出来るとのこと。古代ローマ人がこんなところまで来ていたことを改めて感じました。プロバンス地方にはこの種ローマの遺跡が沢山残っています。

次いで「アヴィニオン(Avignon)歴史地区」。可愛いミニ電車でこの地区を案内してくれます。十二世紀に出来たのに、その後洪水で半分が流されてしまって、半分残ったままになっていることで有名になっているサン・ベネーゼ橋もこの地区に入ります。

シュレ ポン ダ ヴィニオン と学生時代に大野木兄が唄ってくれた橋です。

アルルとアヴィニオンの間にある「ポン・デュ・ガール」(これは別項でご紹介します)。

「歴史的城壁都市カルカソンヌ(Carcassonne)」。この地は砦のロケーションとして理想的な地形だったとのことで、五世紀のゴート人に始まり、サラセン人、フランク王国と主が代わる度に補強されて行ったと言う巨大なお城の跡です。ここでは二班に分かれて案内人の説明を受けたのですが、片方の班の案内人の通訳を勤めました。フランス人に似合わない、とても判り易い英語を喋る案内人でしたので、皆もそのまま理解しているのではないかと若干気恥ずかしく感じながらやったのですが、英語が理解できる人は多くなかったようで好評でした。

ボルドー近くのブドウ畑「サンテミリオン(Sainte-Emilion)地域」。ワインのシャトーが散在する広大なブドウ畑です。凄いいとは思いましたが、こんなものが世界遺産に

なるのかな、と言う気もしました。そう言えば、旅行中、昼夜毎食時ワインが出て、ワイン攻め。お蔭で体重がニキロほど増えてしまいました。

海上に浮かぶ岩山の上に建てられた修道院「モン・サン・ミッシェル (Le Mont St-Michel) とその湾」。これは見事。一見の価値があります。

パリに入って「ヴェルサイユ (Versaille) の宮殿と庭園」はルイ十四世とブルボン王朝の栄華の跡。民衆の存在を忘れてこんなことやっていた王様は革命で首を切られちゃっても仕方がないな、と思いました。そこへ行くと日本の殿様は質素なもの。フランスの王様に比較すれば、まだ民・百姓のことを考えてくれた方ではないでしょうか。最後が「パリのセーヌ川岸」、で合計八ヶ所。これも奇麗ではあるけれど、こんなものが世界遺産と言えるのかしら、と思いました。

## 二・ポン・デュ・ガール (Pont du Gard)

ポン・デュ・ガールと言うのは、ローマ時代、キリストが生れる少し前に作られた巨

大な水道橋のこと。諸兄弟もどこかで写真位はご覧になってご存知とは思いますが、フランス・プロバンス地方のアヴィニオンとアルルの間にあります。この水道橋はローヌ河の支流ガール河を渡っている橋なので、名前がガール河の橋、Pont du Gard' です。残っている部分が二七五メートルで完全に河を渡っています。石造りのアーチが三層に重なり、高さが四九メートルと言つ立派なものです。アーチの頂上が水道路になつていて、近くのユールとか言つ泉の良質の水を、当時大都市だったニームと言つ街に延々二五キロに亘つて運んでいたと言つ水道の一部なのです。一キロ当たり三四センチの勾配をつけて水をユックリ流す工夫がなされていたとか。こんな建造物を実際に目にする  
と当時のローマの建築の精緻さにも驚かされます。塩野七生の「ローマ人の物語」を読んでいます。特に第十巻なんかを読むと、当時のローマ人の道路や橋、水道などのインフラに対する力の入れ方が良く判ります。これらインフラはローマが支配した欧州全域、英国島、アフリカ北部、中央アジアにも及んでいるのです。ニームに行つてみると、  
当時は大変な大都市だったことが伺えます。アルルと並んで大きな闘技場があります。

いわゆる遺跡ではありませんが、ローマのコロッセオよりも保存状態は良くて、今でも毎週末に一万人程度の人を入れて闘牛などをやっているとか。作られた当時は二万五千人位は収容出来たそうです。二〇〇〇年前に作られた闘技場が今もって使われていると言ふことにも驚かされました。ニームという街は当時の大都市だったには違いありませんが、何と言つてもここはローマ本国ではありません。植民地かせいぜい属州だった筈。ハンニバルを始めとするカルタゴの軍勢を食い止めるための城塞都市の一つだったのではないでしょう。この地方にこれだけの大工事が必要だったのか。この僻地の山の中の大建造物には驚かされました。ところがニームの町を見ると運河なんかがあつて、別に水に不自由する土地ではないようなのです。普通の飲料水に事欠かなかつたとすれば、これはユールの質の良い泉の水を提供する目的だけのためになされた大工事と言ふことになります。このスケールの大きさに二度三度ビックリさせられました。

### 三・ブイヤベーズ

何処で仕入れた知識だったか忘れてしまいましたが、パエリヤの本場はスペインのバレンシア、ブイヤベーズの本場はフランスのマルセーユ、と言うのが私の頭の中に刷り込まれた固定観念になっていました。

パエリヤについてはロンドンにいた頃、年末の休みにグループ・ツアーでスペイン観光をした時、南スペインのマラガでロンドンに帰る一行と別れて一人で汽車に乗ってスペインの地中海沿岸を走り、バレンシアに一泊してバルセロナに行き、ここで一泊してロンドンに帰った事があります。バレンシアはパエリヤのために来たみたいなものですから、ホテルに入ってまずレストランの席を予約し、シャワーで汗を流してからダーク・スーツに着換えて、一寸緊張して食堂に向かったときのことを思い出します。お正月の時期だったのでお客は殆ど私一人で、三・四人のウエイターが付きっ切りで面倒を見てくれたような記憶があります。

本場のブイヤベーズを食べたのは、私の最初の欧州出張のとき。出張の目的地がマルセーユでした。一九七一年の七月、丁度私の誕生日直後に羽田を飛び出したのですが、

飛行機の接続がどこかで狂って上手く行かず、三〇時間以上も掛かってヘトヘトでマルセーユに着いたら荷物が行方不明になってしまって、出て来るまでに二・三日掛かるなんて経験をして、フランスに対する印象を一辺に悪くする旅になりました。マルセーユに行ったらブイヤベーズ、と決めていましたので、最初の晩だか次の晩だか、仲間を誘って適当なレストランへ行きオーダーしました。見た目には日本で出て来るものとさして変わらないのですが、いわゆる魚臭さ、生臭さが鼻に付きました。長崎に育って新しい魚に慣れている私には一寸抵抗があつて、最初は古い魚を使っているのかな、と思いつつ食べたのですが、その後何処で食べても同じような味なので、本物のブイヤベーズというものはこんなものか、と思つようになり、それはそれで美味しく頂けるようになりました。魚料理屋で出て来るFish soup と言う、魚を碎いて作ったようなポタージュ・スープがあつて、これも同じように生臭くて最初はビックリしたのですが、これも慣れれば味があつて美味しいので、自ら好んで注文するほどになりました。

今回の旅行参加者の主体は長崎育ちの人。魚にはうるさい連中ばかりです。でも、コ

ート・ダジュール、プロバンス地方といえはブイヤベースの本場。必ず登場するだろうし、これが揉める原因になるのではないかと心配していました。第一日の二ースでの夕食に出てきたのがこのフィッシュ・スープでした。案の定、腐った魚を使っている、と言う声がアチコチから上がって、一口でスプーンを置く人が続出しました。その後、ブイヤベースと称して茹でたエビ、貝、鯛、ホウボウなどが出て来て、このスープを掛けて頂くスタイルだったのですが、皆相当苦戦していたようで、付け合せのジャガイモだけで夕食を済ませた人が大勢いました。私は、本物のブイヤベースはこんなものなんだ、日本で出てくるのは日本人向けにアレンジしてあるものなんだ、これはブイヤベースとしては上等の方だ、と説明しながら食べて見せたのですが、評判を回復せしめるに至らず、第一日目の夕食は不評でした。幹事としては土地の名物を食べさせよう、と考えたのですが、こんな結果になり少々気の毒でした。でも、そのクレームが幹事に向けられないのがこのグループの良いところ。楽しい修学旅行の始まりになりました。

#### 四・ルーブル美術館

最初にご紹介したように、今回の行程はフランスの縁を巡る、変わったコースでした。フランスと言えば誰もが行きたいのが何と言ってもパリ。ところが計画書では、そのパリでの宿泊が夜遅く到着後の一泊のみ、翌日はパリ観光の後、深夜に空港発帰国、と言う予定でした。事前に、「初めてフランスに行く人も多いのだから、パリは一泊にしたらどうか」と提言をしたのですが、予算の関係か何かで容れられませんでした。パリへ行けば、市内観光、ベルサイユ見物、ルーブルやオルセーなど美術館見物、それにご婦人お目当ての買い物、とやることは沢山あります。オプション・ツアーとして、午前と午後、この内の一つずつを取り上げたツアーを作っては貰いましたが、これを何とか三つに出来ないか。ルーブルは何としても見せて上げたい、と出発前から機会を狙っていました。午前中ベルサイユへ行って、午後、簡単な市内観光の後、二・三時間買い物時間を取ると言うので、「買い物ギブ・アップ出来る人には、私が一時間でルーブルを案内します」と言う提案をして希望者を募りました。午後、バスでの市内観光の終

わりにルーブル前で降ろしてもらい、一時間でルーブルを見て、地下鉄で集合場所まで帰す、と言う約束です。希望者が六人でしたが、これは大変上手く行って喜ばれました。足の弱い人もいましたが、余裕の一時間でのご案内。こんなに上手く行くことが判っていたら、最初からこれ売り込んで計画の中に入れておくのだった、と思ったほどでした。ルーブル見物は本当に難しいので、今後、ルーブルへ行く諸兄弟姉へのご参考のために、ルートを書いてみます。若し、実際に行かれる方は詳しくご教示しますので、事前にご相談ください。

ルーブル美術館には、リシュリユー、シュリー、デノンと三つのウイングがあります。が、まず、デノン翼に入り「サモトラケのニケの像」から二階に上がって「モナ・リサ」へ向かいます。途中イタリア絵画がありますが、前半の宗教画の部分は飛ばして、後半のルネッサンス以降の絵画、ラファエロ、ダ・ビンチなどの絵の前を通過するので、これらはチラッと見る程度。「モナ・リサ」を観た後、帰りにフランス絵画の大作の部屋を通過して、「カナの婚宴」「ナポレオンの戴冠」「民衆を導く自由の女神」等を見ます。

ここには、どこかで見たことがある、と言う見事な大作がズラリと並んでいます。後は、一階に降りて、「瀕死の奴隷」「エロスとプシユケの接吻」などイタリアの彫刻、「戦士の像」などギリシヤの彫刻を見て、最後に「ミロのビーナス」でお仕舞。これでユックリ一時間です。

パリのプロの案内人にも褒められたコースですのでお勧めです。

(平成十四年十二月十日)

## スイス

スイスには、ロンドンに駐在している頃、何度も行ったし、その後出張でも何度か出かけたが、圧巻は母と家族を連れての欧州縦断バス旅行だった。この時は老人と病人と子供と言う最悪の組み合わせだったから、どうやっ

て無事に終わらせることが出来るか、ばかり考えていた。この辺で誰かが何かを起こしたら、どこの空港が一番近いかが、そこからロンドンに連れて帰って、それからどうしよう、と言う事ばかり考えていたのだろう。スイスには二泊した覚えがあるが、このときの旅行記は残していないし、記憶も定かでない。次に紹介する旅行は、殆んどが行ったことのあるところばかりだったが、こんな心配が全くない気楽な高校の古い仲間との旅行だったので、最も記憶に残る楽しい旅行だった。

## アルプスの山々

知的障害者の「ゆめ駅伝」関連のオランダ行きが五月二十八日発、六月一日帰国に決まり、手帳に書き込んでいたら、東京在住の高校の同期の一行が、六月二日からスイス

に旅行する、と言うメモを発見しました。この連中は二年毎に外国旅行をすることにしており、最初の東欧、二回目のイタリアに続いて、今年は三回目の旅行を計画していたのです。私にも毎回案内が来るのですが、これまでは全く考える余裕もなかったのを見送って来たものの、いつかは参加しよう、と、手帳にメモだけは入れておいたのです。これは何か出来るのではないか、と思つて幹事に連絡を取つてみると、今年は三十五人の参加、と言います。ゆめ駆伝使節団には旅行代理店の添乗員が付いているので、オランダでのお役目さえ済ませれば、私自身は帰国まで付き合う必要はなさそう。六月一日にアムステルダムでフリーになれば、二日にスイス入りするこのツアーに現地で参加出来るのではないだろうか。幸い、両方とも旅行代理店はJTBです。と言つことで、この二つを上手く繋げないか、相談を始めました。

これが又、意外にややこしいのです。オランダ行きはKLM利用、スイス行きはルフトハンザ利用の団体旅行になっています。団体旅行の場合、特別に安い航空運賃を出すので、制限がうるさくて、往復同じ航空会社の便を使わねばならない。それも同じ出発

点に帰って来なければならぬ、なんて言つづるさい取り決めがあるとのことで、一時は「成田へ戻つて、又出かけて下さい」なんて話になり、それでは全く意味がないので、検討は中止しようか、というところまで行つたのですが、聞いてみると、スイス旅行を手配しているJTBの支店の支店長が、私が営業本部長時代に親しくなつた人だったので、応援を頼んだところ、すんなりアレンジが出来上がりました。ルフトハンザが到着するチューリッヒで合流して、スイスの旅行は一行と行動を共にし、帰りは皆が帰る同じ日に一行と別れて、一人になつてアムステルダムまで戻り、KLM便で関空に帰つて来れば良いのです。これなら、アムステルダムでの一日の追加滞在費と、アムステルダム・チューリッヒ間の往復航空運賃を負担すれば、日本からの往復は一度で済みます。スイスでの「地上費」のみで参加出来ることになりました。簡単なことのようにですが、旅行業者の常識からするとかなり無理をしてくれたようでした。

で、六月一日、アムステルダムで、ゆめ駅伝使節団一行を送り出して身軽になり、ホツとして市電と列車を乗り継いで、懐かしのデン・ハーグへ出かけました。マウリッ

ハウス美術館のフェルメールを見るのが目的です。相変わらずごじんまりしているけれど良い美術館で、フェルメールの「デルフトの風景」を見ました。もう一つのお目当ての「耳飾りの女」(別名「青いターバンの女」)は、大阪に貸し出されているとのことで、留守中でした。レンブラントの「最初のポートルート」「六十三才の最後のポートルート」「サスキア(奥さん)の肖像」等。また、当時は気が付かなかったけれど、ベルギーでは画聖として持て囃されているルーベンスもかなり沢山展示してあるのを発見しました。その日はアムステルダムに追加一泊し、翌日、チューリッヒの空港で、東京から来た一行と無事合流しました。

同窓会一行と言っても、同窓生の関係者は夫婦連れ三組、男性のみの参加が私を入れて三名で、女性のみが十二名と圧倒的に多かった。同窓生の旦那が不参加で、代わりに奥さんのみで参加したのが二人。残り十四人ほどは、これらの人たちの友人達と言つことです。夫婦での参加がモツと多くて良かったのではないか、と思いましたが、男性の参加が少ないのが意外でした。もっとも、参加された女性の中でご主人を亡くさ

れた人が、既に三人おられましたから、若しかしたら、この種の旅行には、いずれも単身で参加するのが礼儀なのかも知れません。女性のみの参加が多かったのは、奥さんの同窓会にご亭主が出席するのをためらう気持が判るような気がしました。男性同窓生の奥さんのみの参加が、二人あつたのは凄いいと思いました。これは珊瑚の集まり並。この集まりが定着しつつあることを示しています。最後のご挨拶で、この点に触れておきました。

最初の夜はチューリッヒ泊で、翌日は氷河鉄道でツェルマットへ。ここに二泊して、マッターホルンを見ました。登山電車で、近くのゴルナーグラードと言つところまで行き、男性的なマッターホルンの雄姿を見た後、一旦降りて来て、午後、山の中をくり抜いたトンネルを地下ケーブルカーで登り、タッタ四分間で着いたスネガと言つところから、今度は歩いて二時間かけて降りて来る、と言つ面白い体験をしました。ここは朝の、マッターホルンの朝焼け見物が圧巻でした。朝焼けがキレイ、と言つので五時前にホテルを出て、一番見晴らしが良いと言つ橋の上まで案内して貰い、日の出を待つのです。

一日目は大勢行きましたが、結局、頂上付近の最後の雲が取れず空振り。残念なので、希望者のみ二日目もトライしましたが、この時は流石に参加者は五人ほどでした、でも、ウッスラとはありましたが、マッターホルンの朝焼けを見ることが出来ました。ツェルマットと言う町では、ガソリン自動車が禁止されています。普通の自動車は、直ぐ下のテーシユと言う町で通行止め。後は、電車が電気自動車ということになります。タクシーも荷物運搬用の自動車も、朝のパンを配達する配達車も、可愛いデザインの電気自動車でした。ハウステンボスのタクシーやバスも、もう古くなって排気ガスの黒煙を上げたりしていて、環境が売り物の街なのに、何とも様にならない。何とか電気自動車を導入出来ないか、考えていたのですが、実際にガソリン自動車乗り入れ禁止の町を見て、その感を深くしました。

四日目は、ブリエンツ湖を船で渡ってインターラーケンからグリンデルワルド。二泊したのですが、ここは二十五年前、ロンドン駐在中に、母と先妻と小学校四年の美貴と二年の達直を呼び寄せた時、一週間かけて欧州バス旅行をしたときに一泊した思い出の

地です。年寄りと病人と子供、と言う最悪の組み合わせの旅行を良く強行したものだ、と今でも思い出します。母はその後スグ動けなくなりましたから、良いタイミングで一種の親孝行が出来ました。本当に良い思い出をしたものだと思います。で、ここは美峰ユングフラウ見物が目的でしたが、この日は霧と小雨で視界が全く悪く、ユングフラウ・ヨツホの標高三五七メートルのトップ・オブ・ヨーロッパと言われる展望台に上がりがながら、何も見えない、と言う残念な結果でした。ここでも一旦下山してから午後、有志でロープウェイで別の山に登り、野の花や、放牧されている牛の群を見ながら二時間ほど降りて来る、というアルプスの山歩きの雰囲気味わいました。

六日目は、首都ベルンからローザンヌ、シロン城を経てジュネーブ入り。翌日フランスとの国境を越えてシャモニーへ行き、モンブランを見物しました。この日は雲一つない最高の天気。標高一〇〇〇メートルのシャモニーから、ロープウェイを乗り継いで、一気に三八〇〇メートルのエギユイユ・ディ・ミディ展望台まで登る、という豪快な経験をしました。高山病の危険があると言うので、大事に大きく息をし、大声を出して騒

がず、殊更ユツクリ歩く努力をした結果、全員何ともなく無事でした。只一人、若い女性の添乗員のみが倒れてしまい、気の毒でした。立场上、大きな声で注意をしたり、気を使ったりして疲れが出たのでしょうか。

旅と言えば買い物。私の買い物は、久し振りに万年筆を使いたい、と思っていましたので、本場でモンブランの万年筆を買った程度でしたが、女性群の買い物はやはり迫力がありました。ここでも盛んに頼りにされ、買い物に入った店で、「長島さん」と言う声が、そこから飛んで来ます。最後の日は、買い物に付き合ってくれ、という女性群一団と、ジュネーブの街を歩きました。ジュネーブは何度も行っているのですが、土地勘があります。こちらはオランダの一行と違って、気楽なお手伝いですから、そこそこにお役に立って喜ばれました。

今回の幹事が、JTBに相当ヤカマシク言ったらしく、三十過ぎのシツカリした女性の添乗員を付けてくれました。外国旅行にスツカリ馴れたベテランと言う感じで、乗せ方も上手で六十過ぎの爺さん婆さんどもを完全に自家薬籠中のものにし、楽しい旅

の手伝いをしてくれました。JTBの社長は何時も「感動を与える旅をして貰うのが旅行代理店の勤めだ」と言っているので、件の支店長に「添乗員が良くやってくれ、感動を与えてくれた」とお礼状を書きました。支店長からは、早速「励みになった」と言う返事が来ました。これで、添乗員のお給料が上がると良いけど。

(平成十二年九月一日)

## ドイツ

### ドイツの印象(ロンドンボケ便り 六)

経済エンジン国、とか言われ、ドイツと日本は何かと対照される。同じように第二次大戦に負け、戦後の瓦礫の中から立ち上がって、逆に今度はかつての戦勝国を経済力で凌駕し、リードしている国。国力の基盤というか、根の奥底の力強さには若干差を感じるが、何となく似たところが多い。この間、ドイツ人の客と話していたが、忙しい、と

言いながら、忙しさを楽しんでいる。暇よりも忙しい方が良い、アクセクしていないと何となく落ち着かない気持がある、と言う。日本には貧乏人根性と言う言葉がある、と教えてやったら判ったような顔をしていた。資源がないから、何かを作り、何かを売らねば生きて行けない、それだけに他の国の人たちより働かねばならない、と言う。こう言う感覚が浸透している国民はそうざらにはいない。単一民族で構成され、団結心が強いと言うか排他的。海外旅行をしても群れをなして行動し、時には傍若無人な態度で旅行先の国の人たちの輦轡を買う。そんなところなんか日本人とソックリだと思う。

ロンドン駐在中、ドイツには一年目の夏、家族共々バス旅行で西の端をライン川沿いにスイスまで行ったのと、帰国の直前一回りしたのと、二度だけの訪問だったが、そのときの印象を思い出してみたい。

## 一・ドイツ人

ドイツ人は欧州の田舎者だ、と言われる。自分が一番正しいと思ひ、世界を見ない。

唯我独尊の傾向が強いところから来ているのだ、と言う。仕事をしても、押し付け  
て来るような傾向が強く、やり易い相手ではない。意固地なほど自分を主張する。非常  
に戦闘的な国民であることは事実だ、と思っていたら、実際毎日が戦争と心得ているの  
だ、と言う。夫婦の関係がこういふものだ、と言うから驚かされる。毎日が主導権争い  
の戦争で、どちらがボスカを相手に教えてやろうとして、どこかで闘っているのだと言  
う。共稼ぎが多いが、女性が家庭に入ってしまうと立場が弱くなるから共稼ぎを続ける、  
という理由がまかり通る。主人が主婦に給料袋をそのまま渡すなんてことはまずない、  
とのこと。買い物には大抵主人が付いて行くから親切なんだ、と思つたら、そうでもな  
く、財布の紐を握つて付いて廻るのだ、と言う。我々だつたらそんなことどうでも良い  
や、と思うところ。日本人の男はこれ程主導権に拘らないから、ドイツ人女性から見  
ると包容力があるように見える由。女性の方も主張するだけあつて、やることはキツチリ  
やるから、日本人男性とドイツ人女性の組み合わせは上手く行くケースが多いと聞く。  
但し、奥さんは理屈っぽく可愛げがない。この点は我慢せねばならない。

田舎者と呼ばれるもう一つの理由に、おせっかい焼きがある。「新西洋事情」にも書いてあったが、窓が汚れていたり、庭の草が伸び過ぎていたり、全然見知らぬ通りかかりの人が入って来て注意する、と言つのは本当のことだそうだ。静かな小都市では午後一時から三時までには休みの時間と決められており、静かに過ごす。この習慣を破つて子供を外で遊ばせたりしていると隣から注意される。日曜は静かに過ごす決まりで、日曜大工やピアノもいけないとされているところが少なくない。これくらいなら良いが、毎日夜十時以降は静かにしないと他人に迷惑がかかると言つので、風呂の水やトイレの水を流してはいけないなんてところがある。これら決められたルールは守らないと隣近所から必ず苦情が来るし、警察への密告も多いとのこと。密告と言えば、駐車違反や無免許での車の運転練習なんかは必ず誰かが警察に届け、間違いなくお巡りさんがやって来るそうだ。外から見ると何て堅苦しいところ、と思うが、住みついてしまえば、ルールに慣れてしまえば住み易い、とも言つ。こつこつ風に我慢できる人は良いが、生理的に我慢できない人がドイツ駐在にでもなつたら悲劇。四六時中周囲から監視されているみた

いな気になったら神経衰弱もの。たまったものではない。

## 二・ハンブルグ

船の仕事の殆んどはハンブルグが中心になる。ハンブルグはドイツ一の商業都市。アルスターと言う湖の周りに栄えるきれいな街である。ハンザ同盟の中心で、七〇〇年前から自治権を持ち民主主義を敷いている、という。ドイツは東西二十二の州からなる連邦だが、ハンブルグはこの町ひとつで州のひとつになっており、今もってこの町の正式名称は、ハンザ自由都市ハンブルグ、と呼ばれ、市民はこれを誇りにしている。港はエルベ河を一〇〇キロほど遡ったところにあるが、大きな船も入って来るし、コンテナ・ターミナルも立派。貨物の取扱高もロンドンと拮抗する、という。港をまたぐと言うよりエルベ河の河口に掛かる橋があり、近代的な港に相応しいシンブルなデザインの現代的な作りで素敵だった。ハンブルグは夜が有名。土地の人は行かないと言うが、レーパーバーンという有名なピンク・ゾーンがある。音に聞く飾り窓、テレホン・バー、

エロス・センター、怪しげな劇場等が並んでいる。中心の小さい通りがグロッセ・フライハイト（偉大なる自由通り）というところなので、何でもかんでも目茶苦茶に自由なのかと思つたら、昔は、商人として自由の通り、という意味だったとのこと。話の種に、と一通り散歩してみる。細いグラスの外側にビツシリ露がつくほど良く冷えたシュワツプ（透明な焼酎みたいな強い酒）を一気におおひ、焼けた喉を本場のビールでうるおす。ビールの飲み方が気に入った。ビア・ケラーでは隣の爺さん達と肩を組んでの大合唱になった。こんなこと白状するくらいだから、左程悪いことはしなかった、と思つて頂こう。

### 三・ベルリン

仕事の関係はなかったが、折角だから、と一寸無理をして週末を利用してベルリンまで行つてみた。土曜日早朝にハンブルグ発、小一時間でベルリン着後、空港のコイン・ロッカーに荷物を全部放り込んで旅行案内所へ行き、観光の相談。バスで街に出て、教

わつたとおり観光バスの発着所へ行く。バスが出る前にコーヒーとサンドイッチの朝食代わりの腹ごしらえ。午前中西ベルリン、午後東ベルリンと二コースのバスに乗ったら夕方になる。後は時間一杯西ベルリンの街の中心を歩き、疲れたら喫茶店の一つにも入って、お茶にお菓子で絵葉書でも書いて、またバスで空港へ戻り、そのままデュッセルドルフへ向かう、という大変能率的な超々特急の駆け回りだった。一人旅だと気軽にこういうことが出来る。

やはりベルリンの壁の話が中心になる。今でこそ西ベルリンの方が大きくなったが、歴史上の建物は東側に多い。意識的にだろうが、戦災で破壊された建物がそのまま残されている。西洋人の執念深さか、と思うが土地に余裕があるせいか、とも思う。東ベルリンにも観光バスなら簡単に行けるチェック・ポイント・チャリーという関門から入るが、一人一人面通しをして大変に物々しく時間も掛かる。東側からの逃亡者を防ぐのが目的だから、出るときなんて、バスの下に誰かへばりついていないか、まで検査する。そのために鏡の敷いてある検査場がある。関門も車で強行突破ができないように、コン

クリートでジグザグの道が作っており、大型のバスは大変な苦勞をして曲がりながら通って行く。それでも一九六一年に壁が出来てから三万人の人が東から西へ逃げてきたと言う。失敗した人は数知れないが、その内八〇人は死んで西側に落ちてきた、という。西側で死んだ人たちの十字架が壁際に並んでいる。傷ましいことだと思う。写真なんかで見る壁は、一九六一年のある日、一夜にして作られたと言う。普通の家やビルの窓や戸口をレンガとコンクリートで塞いだ、いかにも生身を裂かれたと言う印象の生々しいものを予想していたが、これらは段々に取り壊され、今は高さ四メートルほどの白っぽいコンクリートの壁になっていて凄みは大分薄れていた。

東側に入ると専門のガイドが付き、決められたコースを巡る。思ったほど押さえつけられたような感じはなく、暗さも感じられなかった。店先の品物も豊富で他の東欧諸国とは大分違うとの印象を受けたが、ガイドの案内はかなり宣伝臭が強い。米国の援助を受けずにここまで復興したのは社会主義諸国の協力の賜だ、とか、家がまだ不足しているが、十年計画で徐々に増やしており、これは社会主義国でなければ出来ないことだ、

とか、税金が安い、とか、労働者の平均賃金はこれこれが高くはないが、福祉が行き届いているから実質はもつと良い、とか、観光も宣伝の一つなのだろう。逆に西側から本や新聞を持ち込むのは西側の宣伝として禁じられている。旅行者でもこんなものを持っていると取り上げられる。戒厳令下の台湾みたいなもの。写真は撮っても良いが、撮っていけないところは観光ルートになっていない、というのが、西側から付いて行ったガイドの話だった。やはり全部はさらけ出せぬ何かがあるのだろう。

西ベルリン側には大して見るものがない。古いものでは駅前のウイエルヘルム皇帝教会、旧国会議事堂など。あとは新しい建物ばかりで、戦災でコナゴナになった後、力強く復興して来た町、という印象が強い。このところ革新系の社民党が政権を握ってきているが、絶対の人気を誇っていたブランド前首相が一種のスキヤンダルで退陣した後のシュミット首相にあまり個人的魅力がないとかで、丁度小生が行った日の総選挙では社民党が大幅に後退し、政局の不安定が予想されると言われていた。

#### 四・デュッセルドルフ、ケルン、ボン

高校時代の友人でNECの駐在員をしている山口君を訪ね、日曜日一日デュッセルドルフを訪れることにした。デュッセルドルフはドイツで日本人が一番沢山住んでいる町。四〇〇〇人は住んでいるとか。五〇〇〇人を收容すると言つ立派な日本人学校がある。日本の経済は、何だかんだ言われながらも輸出に負つところが多く、輸出に従事する海外駐在員も多いが、この駐在員に対する国の配慮が足りないように思う。特に教育の面。子供が小さい間は良いが、大事な時期にある子女を抱えている人は、海外に適当な教育施設がないために大変な目に遭う。長年の駐在生活を終えて日本に帰つて来てても、今度は受け入れてくれるところがない。長く日本を離れていたために、子供の面で不幸な目に遭つている家庭を幾つか知つている。このため家族、又は子供だけを日本に置いての単身赴任を考える人も多く、家庭生活では大変な犠牲を強いられることになる。デュッセルドルフの日本人学校は田中角栄元首相の置き土産だ、というが、一万五千人の日本人が住んでいるロンドンでもこの面はお粗末だった。私立の寄宿舎制の学校が一つあつ

たのみで、それもあまりレベルが高くない、とのことだったが、ヤットこの程、国の補助で一つ日本人学校が出来たとか。今後とも海外で貿易戦争の尖兵として働いている駐在員が、安心して仕事が出来るとような制度を確立して欲しいものである。

デュッセルドルフはライン河に沿った静かな街。ルール重工業地帯の中心地でもあるが、ドイツといわず西欧の町は人口の過度の集中がなく、ゴチャゴチャした感じが無い。東京の場合、人口の過度の集中により不経済が発生しているが、この程度の中都市だと都市の便利さが充分エンジョイできる経済サイズと言う感じがする。

ここから南へ少しライン河を遡ると、化粧水オー・デ・コロンで有名なケルンがある。ヒットラーの作ったアウトバーンをBMWで一五〇ノ六〇キロですつ飛ばすからすぐである。山口君と言う人、大人しい人でスピード狂でも何でもないのだが、この国にいと、良い道を車の能力の限界近くで走らないと罪悪感が残る、とか言いながら豪快に飛ばしていた。廻りが皆そうだから危険の感じは全然ない。オー・デ・コロンはケルンの水、という意味。十八世紀始めにイタリア人が売り出したものだそうだ。有名なのは

ゴシック・スタイルの大寺院。ヨーロッパでは大抵の町に行くと、中心に大きな教会があつて宗教の力の大きさを教えてくれるが、このケルンの大寺院は戦争などをはさんで七〇〇年も掛かつて出来たものの由で、一六〇メートル近い二つの尖塔を持つ一寸した小山のような教会で驚かされた。

もう少し南へ行くとボンがある。ボンは西独の仮の首都。今もってドイツ人にとつては東西ドイツの統一が宿題で、西ベルリンには統一後の大統領官舎も用意してあると言ふ。ボンはあくまで仮の宿ということ、つい最近まで議事堂もバラックだったとのことだった。小さな町だがベートーベンが生まれ育つた街としても知られる。宮廷楽士だったベートーベンの親父さんが副業に酒屋を始めたのが間違ひの始まりで、自分がアル中になつてしまい、楽士でいられなくなつたが、息子に音楽の才能を発見し英才教育を施して偉大なベートーベンを造り上げたと言ふ。その時代の古い楽器で演奏したと言ふレコードを二枚買ってきた。

## 五・再びドイツ人

ドイツ人と言うと重厚と言う印象が強い。政治にしても学問にしても芸術にしても、軽い、という感じは全くしない。英国人も重い感じだが、これは分別がある、という感じの重さでドイツ人の重さとは一寸違う。ドイツ人の重厚さは森と言う自然から来るのだ、という説がある。ゲルマン民族は森の民族と言われる。確かにドイツの森はすごい。

シュバルツ・バルト（黒い森）。ロンドンの最初の夏、家族を招んだ時に大陸バス旅行に参加した。フランスのカレーに上陸し、ベルギー経由でドイツに入り、ドイツの西の端をライン河に沿って二日間南下してスイスに入った訳だが、時速一四〇キロから

一五〇キロで走るバスから見るアウトバーンの両側の森又森に驚かされた。ドイツという国には山があるのかしらん、と思う程、行けども行けども平らな土地に限りなく続く森だった。日本の明るくて爽やかな森や、映画で見る南方のガラガラした毒々しい森とは全く違う、ズッシリと重く厚く暗い森。やはり「黒い森」という表現がピッタリなのだろう。ゲルマンの言葉の成り立ち、文法もこの森から来ているという人もいるがこれ

は判らない。でも、足が地に着いた重い厚い民族の感じがこの森から生れたのだ、と言われると成る程そうだろう、と思う。

まず一人一人が重く強い。古い大学都市ハイデルベルグへ行くと、学生牢というのが。学生が悪いことをしたときに入れられる独房である。悪いといっても集団の固い規律の中で少し跳ね上がって勇氣のある行動をした学生がこの牢に入れられる。だから当時はむしろ牢に入ることが誇りだったと言う。学生同士の決闘がつい最近まで行われていた、という。目隠しをして、劍の先がヤット届く距離に劍を持って向かい合い、どちらかが傷つくまで劍を振り回す。決して顔をそむけてはならない。だから顔に傷のある方が勇氣のある証拠。男が四十歳を過ぎてても傷やシワのない顔をしていると軽蔑されると言う。四十過ぎたら自分の顔には自分で責任を持って、というのはこの辺から来たのかも知れない。

かといつて、決して個人主義ではない。民族として纏まると唯我独尊的になる風潮があると思う。国としてのまとまりの強さは他の国の比ではないと思う。(イスラエルが

最も強いと思うが、これに次ぐものではないか)あの森の中で生きて行くには個人個人が強いと同時に集団を大事にせねばならぬと言う感覚があったのではないか。「全ては国のため」の一言で団結できる民族だと思う。第一次大戦のウイルヘルム一世、第二次大戦のヒトラーもこの集団の力を上手く引き付け、利用して行ったのだと思う。自分を犠牲にしても国のために、という全体主義の考え方がどこかに根強く残っているように思えてならない。小、では先般紹介した自分の住む世界での規律作り、大きくはこの大戦後の復興の仕方。日本の場合はパチンコと衣類などの表面の華やかさから入って行ったが、ドイツの場合、着るものとか住むところは二の次にして工業を興し、基礎を固めて行った。辿りついたところは同じ経済大国だったが、やり方は如何にもドイツらしいと思う。

今度の赤軍派のハイジャックの処理にして然り。一人二人の個人を犠牲にしても、全体としての規律を守って行こう、個人よりも国と言つか集団を大事にしよう、という考え方が如実に出たのではあるまいか。逆に赤軍派の方の考え方も同じ。あの獄中自殺は、

最初は報復のための獄吏による他殺かと思った。それはそれで理解できる気がするが、よく考えるとやはり自殺だったと言うことも充分考えられる。ドイツ赤軍派の考え方と言うのは、こうした無秩序状態を作り出すことにより国の締め付けを厳しくさせ、一般国民の体制に対する反発を煽り立てて現体制を崩そうとしているのだ、という。良い悪いは別とし、又立場は違っても、自分を犠牲にしても集団を守ろうとする考え方には共通するものが見えるように思う。その辺から考え合わせれば自殺があっても少しもオカシクはない。大戦であれだけ痛い目に遭っていないながら「あれは弱いイタリアが入っていたから負けたんだ。今度はイタ公抜きでやるうぜ」と言うドイツ人。何ものにも屈服しない個人の強さ、集団を大事にする民族思想から見るとときに、もう一度ヒットラーが出てきたら、また同じような行動に移る可能性を持っている国民ではないかと思う。

(昭和五十二年十二月二十四日)

## ノルウエー

### オスロより

ノルウエーはオスロに來ています。

今年に入ってからバタバタ続きで落ち着きません。ソ連代表部の連中とのネゴにネバリ勝ちして、ソ連の砕氷船の修理の注文を取ったり、北朝鮮の客船が横浜で火事を出し、国交のない国を相手にして大丈夫か、なんて言われながら、前金で仕事をして大儲けをしてみたり、ロサンゼルスで起こった北欧船の事故の工事を引つ張り込むのに成功したり、やっていることは次から次に沢山あつて、それが一つずつ物語になりそうな話。退屈はしないけれど、こう続いては芯が疲れます。

ひと頃好調を伝えられていた我々の仕事も、海運市況が冷えて來るに従つてスツカリ不況になり、仕事探し競争は熾烈を極めています。新年早々から仕事探しに欧州を歩かせていたチームから反応があり、良い話になりそうな見通しがついたので、二月二十一

日の日曜日に急に出てくることを決め、二十二日月曜日の夕方発でこちらに來ました。火曜日早朝アムステルダム着。その足でチームの泊まっているホテルへ行き、朝食兼打ち合わせ会。昼の間はロツテルダムの客のところへ行つて一つ仕事を済ませ、その日の夕方発で八時半過ぎオスロ入り。そのまま駐在員の自宅へ行つて方針の打ち合わせ。やっとホテルに一泊後、翌水曜日から客とのネゴに入る、という、いかにも日本人らしい、と言つか、せせこましくミミツチイ動き方をしています。今度の仕事は、上手く行くと四〇億円位になるものなので、今どき願つてもない話。何としても押さえ込もう、とやってくる訳です。

出て来れば、時差とか、ホテル暮らしとか、客との交渉とか、疲れはしますが、日本にいるときと違つて、二つか三つの案件に専心すれば良いのですから、氣分的には樂とも言えます。ただ、一週間経つた今も帰りの予定が立たず、子供達には又々淋しい生活を強いることになっています。

当地は勿論、雪は残っていますが、寒さは思ったほどではありません。でも、朝夕の

気温は零下一〇度程度だし、日中でも零度を越えることが少ないので、長いこと外気に触れているとジックリ冷えてくる感じ。一昨年、中国に行ったときに買ったブーツとモントリオール製の岡崎譲りの皮コートが活躍しています。

今、オスロでは世界スキー大会が開催されていて、何時もは静かな人口四十五万人のこの街も人でごった返しています。街を歩いてても世界のどこから来たのか、ダウンジャケットにリュック姿の若者やら、シャレたセーターに身を固めたオジサン達がゾロゾロしていますし、夜になるとホテル前の広場（国会議事堂前広場になります）には人が集まって、雪のデコレーションを囲んで何やら夜遅くまで騒いでいます。この静かな街にとっては、何年かに一度のお祭りみたいなものなのでしょう。客の事務所へ行っても、昼間からテレビに囁り付いて、今日はノルウエーは金メダルを何個とった、なんて大騒ぎしている連中が多く、能率の悪いこと。社長、副社長クラスが、やっと仕事している感じです。

競技の会場はホルメンコーレンと言って郊外の山の中にあります。今日が最終日で、

九〇メートル級のジャンプがあるというので出かけてみました。事務所の台所で熱い紅茶を作り、ウイスキーを小ビンに入れて出発。電車で十分ほど行って、徒歩で十分ほど登れば会場です。流石に山の中は大変な雪。寒さも下界とは比べものになりません。十数万人の人が、始まる二時間も三時間も前から寒さの中で待っています。雪の中ですから立つたままですが、食べたり飲んだり、音楽にあわせて踊ったり、一種の遠足気分なんでしょう。ギリギリに行った我々なんか、人垣の後ろで見えもしません。生憎の雪と霧で何も見えないし、何時始まるかも判らないので、一時間ほどいて帰ってきました。二時間ほど雪の中を歩いて戻って来てテレビをつけたら、丁度終わりの方をやっていました。霧で何も見えない中を飛ぶのですから大変だったことでしょう。日本勢は惨敗。フィンランドが優勝していました。

（昭和五十七年二月二十八日）

# イラン

## 遠い国イラン

一・テヘランからの泣き言

イランに来てもう一〇日。今回は珍しく出て来るのにあまり乗り気ではなく、出る時から早く帰りたくて、何か日本を離れ難い気持でした。行き先が行き先で、仕事も並大抵ではない、と言うことが予想出来たこともあります。直前に悪い風邪を引いて九度近い熱を出し、そのため出発を二日遅らせたくらいでしたから、気が弱くなっていたのかも知れません。でも、とにかく出て来ました。戦争当事国なので何が起るか判りませんから組合員の部下を出す訳に行かぬ、と言う配慮もあって自分で来ねばならなかったのです。

来て見ればそれ程治安が悪いわけではなく、ホテルの設備も思ったほどではなくて、パサパサの飯とアルコール全く抜ききの生活に慣れれば生活の方は大したことはありません。

せん。

仕事の方は、最初の三・四日のヤリトリで受注内定。仕事を求めて、長いことこの国に留め置かれていろいろな業種の他の会社の連中からは、やつかみ半分には、この国でこんなに早く、手際よく決めたのは珍しい、位のことは言われているのですが、そのあと調子に乗って、一気に正式契約までやってしまおう、と考えたのが運のつき。毎日々々契約条件の交渉に悪戦苦闘してもう一〇日もここにいて、と言っわけ。あと二・三日のところまでは来ているので、もう山が見えた、と思っっていますが、普通なら契約書作りだけで一ヶ月はタツプり掛かると言うお国の現状だそうですから、これでもピッチはウンと早い方なのだそうです。とにかくこの国のトップには頭にターバンを巻き、身体に白いチャドルを着、髭をつけた坊さんやカストロ帽にカストロひげ、機関銃を持った怖いおじさん達が、革命政府と称してガンバッテいて、金は全部この人たちが押さえています。商売のシの字も判らぬこの連中から貴重な外貨を引き出そうとするのですから、ましてやそれがイラクとの戦時下と言う異常状態の下なのですから、並大抵のことでは

ないことはこちらも良く分かります。

てなこと、七転八倒の毎日なのですが、・・・

朝、一人で朝食の席につき、ナンと言う平べったいパンを口に押し込みながら、夜、パサパサの御飯に乗った固い羊の肉と格闘しながら（昼は勤務時間の関係で抜きになることが多いのです）早く日本に帰りたいな、と思います。日本の土を踏んで子供達の顔を見て、自分で作ったインスタント・ラーメンでも良いから自分の家でゆっくり食事をしたいと思います。

そして不思議と思いがちなのが、先日野口兄の「成長」。真史君のケナゲな姿が微笑ましいけれど、それよりも兄が我が子を見る目に愛情があふれていて何とも言えない。それから大分昔に杉山夫人の書かれた赤ちゃんの詩のこと。あれを受け取った時は、本当に泣きながら読んだものでした。（そう言えば、あれ以来、杉山夫人のきれいな詩にはお目にかかりませんね）それと手前味噌だけど、十年前程自分で書いた「姉弟五態」。珊瑚が始まってからもう一七〇回位書いているのだけど、私自身はあれが一番好きです。

ま、一言で言えば、情けないことに若干ホームシック気味なのです。なんてこと言いながら日中は（偶には夜中まで）日本との間でテレックスや電話でガンガンやり、客の前ではテーブルでも叩きかねない勢いで契約条件の交渉をしているのですから、人間なんてオカシナ動物だと思えます。

何て、心細そうなことを言っているけど元気です。私も偶にはこんな気持になるということを一寸言ってみただけ。

サヨナラ

テヘランにて

361

## 二・遠い国

イランという国、地図で見ると左程遠そうには見えませんが、とても遠いところですよ。東京からの直行便は週に一便しかありません。あとはパキスタンのカラチで一泊する便が一便あって、残りの日は全部欧州を経由しないとイラン入りが出来ません。私が出発したのは月曜日でしたが、この日もまず方向違いの北に向かって飛び出しました。アン

カレッジ、アムステルダムで一時間ずつ休んだ後、何とスペインのマドリッド着。ここで三時間の待ち合わせでイラン航空に乗り継ぎ、合計三十一・五時間掛かってやっとヘランに着きました。やはり地の果てだな、と思いました。

帰りは丁度週一回の直行便のある日に合わせることが出来たので、これなら北京経由十三時間で帰れる、と思いました。月曜日夕方のテヘラン発で、これだと日本で夕食に悠々間に合うので、出て来るときに子供たちと約束した通り夕食は牡蠣鍋にしよう、成田空港からの帰りに材料を買えば良い、なんて考えながら空港に向かいました。テヘラン空港で、やかましい荷物検査、出国手続き、税関検査を受けてやっと待合室に入り、これでこの国ともオサラバだ、と思っていたらペルシア語の放送。何だか分からないけど、どうやら出発が遅れるらしい。待合室には立派なソファが一つだけあったので、これを占領して、泥棒除けのためカバンに足を乗せ、ブリーフ・ケースを抱いて寝ていました。他に出る便もないし、置いて行かれることもあるまい、と思ったからです。気持ち良くグッスリ寝込んでいたら誰かが「弁当を配っているよ」と起こしてくれました。

聞くのと二時間遅れている、と言います。丁度、イランがイラクに対し、革命記念日の大攻勢をかけた日でしたから、少しくらい遅れても仕方がない、と思いつつ粗末なサンドイッチの弁当を平らげ、又寝ていましたが、結局そのままズルズル遅れて五時間も待たされ、出発したのは火曜日の午前二時でした。やはり遠い国です。

### 三・自然

イランという国は大変に広い国、北はカスピ海から南はペルシア湾まで。ですから氣候も一通りではないようです。南の方は暖かで、今頃でも避寒地になりますが、北は大分寒いのです。特に北西部のコーカサスに近い地方では冬は零下何十度にもなるのだそうです。国の真ん中が広い地域に亘って砂漠。テヘランはずっと北の方に位置していて、エルブルース山脈の南斜面に貼りついた形になっています。ですから、坂の街。と言っても、南から北に向かって一方的な登りの街。アップ・アンド・ダウンは殆どありません。標高差が海拔一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルの間に位置しているとのこと

で、街の南の端と北の端では二〇度からの温度差があると言います。北ではスキー、南では水遊びが出来る街、と言つのが一つの自慢です。

標高が高い所為で空気が薄いのが、一寸激しく動くと息が切れます。最初、重いカバンを持って事務所の階段を駆け上がったら、大変な息切れがしたので、こんなに年を取ったのか、とガツカリしたのですが、聞いてみると皆そつだとのこと。どうかすると軽い高山病に罹つて頭痛を訴える人もいます。

私がテヘラン入りしたのが一月二十五日で、この日は雪が降っていました。二・三日は雪で、一度なんか車が走れなくなる程でした。ですから気温は低くて、コートなしで外に長くいると芯から冷えてきます。後半は大分暖かくなつたのですが、結局雪は消えませんでした。テヘランの北側に壁のようにそそり立っているエルブルース山脈は中腹から上が真っ白の雪。これは結構高い連山で、一番高い山はデマベントとかいつて標高が五七〇〇メートルもあり、エベレストから西では一番高い山なのだそうです。

雪なのにはやはり砂漠の中にあるからなのでしょう、大変に乾燥しています。ニューヨ

一刻でも悩まされた静電気には苦勞しました。ドアの取っ手の怖いこと。何せ夜中に目が覚めて毛布を掛け直そうとすると、バチバチって暗闇に火花が散るのですから大変なものです。

#### 四・パサパサの街

イランの人口は四五〇〇万人と言います。その内、テヘランに住んでいるのが七〇〇万人というのですから、テヘランはかなりの大都会のはずなのですが、どうやら大変にだだっ広い街らしく、あまり高層のビルは見られず、低い石の家がどこまでもどこまでも続いています。一体にホコリツポイ街。雪が残っていると雪が溶けた後の道路はもうカサカサで土ぼこりです。

目立つのが汚い車と物凄い運転。水が不足して洗えないのか、雪の後なので特に汚れているのか、洗車なんかまるきりする気がないのか、とにかく汚れ放題に汚れた車が走っています。その運転たるや、一体全体交通法規があるのか、と思うほど。勇気のある

方が勝ち、と言う運転です。交差点やロータリーへの入って行き方、追い越し、割り込み、反対車線走行等、違反と言う違反は何でもあり。気の弱い運転手は一步も動けないのではないだろうか。

その車の無秩序な流れの中を縫って、これまた勇気のある人たちが出て来るのです。横断歩道なんかあるのかないのか、車の流れの間を上手くすり抜けている感じです。若い男が敏捷にやるのならまだしも、およそ運動性に欠けた長いチャドルを引きずって、老婆（とおぼしきもの）が同じ事をやるのですから見ていてハラハラするどころの騒ぎではありません。一度も人身事故に出くわしませんでした。出会わないのが不思議なくらいです。命を張って車を運転し、道を歩いている、と言う感じすらしたことです。ですから、ぶつかった跡のある車の多いこと。片目がつぶれたまま走っている車なんてザラです。どこかに傷のある車の方が多いのではないか、と思うほど。革命後は輸入車の部品が手に入らず、修理も出来ないという事情もあるのでしょうか。

公共の交通機関がなく、せいぜい乗合タクシー位なので車を持っていないと不便なの

ですが、こんな具合なので流石の三菱商事の駐在員たちも自分では運転していません。社有車とか貸切タクシーを利用してました。

街が何となくカサカサしたササクレ立った感じがするのは、空気が乾いてホコリっぽくて街中が何か薄汚れているせいもありますが、そこら中の石や土の壁に訳のわからぬスローガン（だと思えます）とか、指導者達の似顔絵（これが又上手いのです）とかがベタベタ描いてあったり、革命前に着工したのに革命のために工事を中止したと言っ建てかけのビルが、クレーンをつけたまま街角に立っていたり、丘を切り開いて整地しかけたまま荒地になっている土地があったりするからなのでしょう。

おまけに街を歩いているのがどういふ訳か男が多く、女性が偶に歩いていても例の黒いチャドルで上から下までスッポリ身を隠しているのですから（女性が人前に肌をさらしてはいけない、と言つのはコーランの教えとのことです。本来は女性のみは課せられた制約との事でしたが、この一・二ヶ月の間に制約が厳しくなり、男も半袖は駄目だ、なんて言われているそうです。とにかくコーランの教えを管理しているのがライフルを

持った革命防衛隊の連中で、捕まると有無を言わさず牢屋にぶち込まれるのだそうですから、たまったものではありません。街が殺伐に見えても仕方がないのかも知れませんが。

## 五・政治・経済

政治経済なんて言つと話が大袈裟になりますが、一言だけ。

ご存知の通り、四年前、シャー（王様）・レザー・パーレビが追放され、ホメイニ師を中心とする宗教グループが政治の実権を握りました。シャーの時代に、フランスに避難していたホメイニ師が人民の歡呼に迎えられてテヘランに帰って来たのが、四年前の二月一日、革命政府を樹立したのが同二月十一日だったとのことで、私が行っている間に帰国記念日が来るというので、街にはチャチではありませんがイルミネーションが飾られ、ホテルの飾りつけも少し変わって心なしか華やいだ雰囲気になっていました。

街全体が騒然としている、と言つ訳ではなく、戦争中の国という感じはしませんが、

やはり迷彩服を着てライフルを持った兵隊がそこら中をウロウロしています。

ところどころに政府か軍関係の建物があつて、その前は車の通行が自由にならないように道に段差がつけてあるし、門の横にはトーチ力みたいなものがあつたり、監視台みたいなのがあつたり、かなり物々しいのです。勿論、この近くでは写真の撮影は禁止。大使館ジャックで有名になつたアメリカ大使館を見ました。写真撮影は禁止のことだつたので、人を撮る格好でバックに建物を入れようとしたら、兵隊が血相を変えて飛んできてダメでした。とにかく連中はライフルやピストルを抜き身で持ち歩いていますから、間違つて引き金にでも手をかけられたらオダブツです。

テヘランの町の中を歩いている限りでは、酷い生活をしている人が多いようには見えませんでした。いわゆる乞食、浮浪者の類は見えません。いい年をした髭面のオジサンが、どついつ訳か水仙の花束を持って信号待ちの車の間を縫つて歩いていました。売れている現場を見た例はありませんでしたが……。こんな人たちが一種の浮浪者なのかもしれません。

店頭にも、日本ほど潤沢ではありませんが、品物は豊富。ポーランド辺りで見たように、何か品物が出ると行列が出来るなんて雰囲気はないようです。驚いたのはシャンデリアを売っている店がかなり沢山あること。外国人はシャンデリアが好きで一寸した家に行くとは間に立派なシャンデリアがぶら下がっていて驚かされます。日本なんかだったら、天井が落ちるのではないか、と思うほど立派なものが店先に並んでいます。こんなものを買えるだけの余裕のある人が、これだけの数の店が存在し得る程いるのか、と感心した次第です。

旧シャーの宮殿に行くと、お年寄りや恋人同士、子供連れの観光客が大勢いて、それも上の方の階級とは言い難い格好をしています。こんな姿を見ると、精神的にも経済的にも余裕があるのではないかしらん、と思います。

外から見てみるとホメイ二師が強大な力で国を押さえつけているように見え、同師がいなくなったら、又元に戻るのではないか、と言う気がしますが、何だかんだと言いながらも今の体制が定着しつつあるのではないか、と言うのが大方の見方のようです。三

菱商事の現地社員、個人タクシーの運転手（一寸インテリっぽい人でしたが）、国営土産店の主人などは、「シャアの時代は良かった。今は窮屈で」、なんて言っていました。王様はもういないだし、王制に戻ると言うことはまずありえないでしょう。ホメイニさんが死んでも新しい指導者の下で国が運営されて行くのではないかと、思いました。宗教臭の強さは異常の感じ。ノーマルな長続きする状態と言うのは、もう少し宗教臭の薄れた状態ではないでしょうか。今のところはホメイニ師は革命のシンボルです。そこから例の憎しみをこらえたような厳しい顔のポスターが貼られ、激しい調子のスローガンが書かれています。アメリカが目の敵。“Down with USA”（アメリカをやっつけろ）なんてやっています。これは総合弁証法の外部否定。外部に意識的に敵を作ることにより内部をまとめる作戦と思われる。

何せイランという国は、石油、鉱石資源、綿花など、売るものに恵まれていて、イラクとの戦争も自前で賄っている程です。戦争に毎月四億ドルかけていると言いますが、石油だけでも十五億ドル位売っていて、戦費を垂れ流しにしながら、六〇億とか七〇億

ドルの外貨準備を抱えているのだそうです。もっともその割には為替管理が厳しくて、入出国の際の、外貨の持ち込み、持ち出しのチェックは厳しいし、高価な製品の持ち出し（カーペットとか貴金属とか）は禁止されているとのこと。今回の修復契約でも外貨支払いの許可を取るのが大変だったようでした。

これに反し、戦争相手のイラクの方は借金で戦争をしているので、ソロソロ行き詰まって来て、大きなプロジェクトの支払いが出来なくなつて、モラトリアムを申し入れていきますし、先日フセイン大統領が休戦の申し入れをしましたね。この辺は国力の差ではないでしょうか。人口だけを比較してもイランの四五〇〇万人に対し、イラクは七〇〇万人との事ですから比較になりません。それなのにどういふ訳か三菱グループはイラク最前なのです。三井がイランに食い込んだので対抗の意図があったのかも知れませんが、三菱商事の駐在員の数を比較しても、バグダットの三〇人に対してテヘランは六人。イランも国情が落ち着いて来て段々に商売が出来るようになり、人の出入りも繁くなつてくるみたいです。もっとイランに力を入れても良いのではないかと、思います。

## 六・仕事のこと

イラン・イラク戦争の最中、昨年十一月、ペルシャ湾の奥の方（石油流出で有名になったノールーズ油井の近く）で当社建造のイランのタンカーがイラク軍のミサイルに攻撃されて炎上しました。石油を満載していたのですが運良く火災は居住区（ブリッジの部分）のみで鎮まり、戦争地域から逃れて湾の出口、ホルムズ海峡に近い島に避難しました。事故が発生した直後は、我々の仕事になるとは思えず、やられたな、と遠くから見ていた程度でしたが、十二月に入ってから、修復に協力してくれ、と言う呼びかけが入りました。

早速、技師を送り出して調査。年末ギリギリまでかかって資料を揃え、見積もりを提出したのが年明け早々のことでした。例によってシンガポールが大の競合相手になります。第一、船はペルシャ湾にいて自力では航行できません。修理地まではタグボートで曳航するわけですが、シンガポールまでなら三〇日ほどで着くのに、日本まで来るとなると倍近い二ヶ月近くかかるのです。この時間差と曳航費用の差に加え、工賃の差、値

段の差が大きなハンディキャップになっています。その上、ホメイニさんの指導の下では、何でも厳正な入札というのが建前になっているのだそうで、下手な出方をしたのでは交渉のチャンスもなく、一発でオシマイ、と言うことになるのだそうです。私もイラソンの商売は初めてなので、色々研究し考えた挙句、入札の時に色んなところに、条件とか、引つ掛けのネタを作っておいて、相手を何とかして交渉の場に引つ張り出す作戦を採ることにしました。

この言わば、罠をかけて待つている間が長かった。仕事の欲しい時期です。何かこちらから動かないとダメになってしまうのではないかと焦る上の人や工場の人たちを押さえて、今暫く、もう少し、とジツとガマンをして来ただけに一〇日後に、打ち合わせをしたいから直ぐ来てくれ、と言う呼びかけが来た時は正直ホツとしました。第一段階は成功と言う訳です。呼び出しがあったら即日出かけよう、と準備していたのに悪い風邪。九度の熱が出て、それでも行く、と言ったのですが、流石に上の人に止められ、技術者を先発隊として出しておいて二日ずらしてテヘラン入りしたのです。

先方でも衝に当たる人たちはその筋のプロ、いわゆる民間人ですが、革命の後、トツプは全部国が押さえていますから、やはり国营企業ということになります。今回はこちらの読み筋通りに相手が動いてくれ、思ったよりずっと早く決着が着いて、他社が動き出す前に受注内定に持ち込んだのは、行って話を始めてから四日目のことでした。引き続き契約ネゴに入ったのですが、これが大変。相談する人も手伝ってくれる人もいないので、契約書の案文作りからネゴまで全部一人。最近は世知辛くなつて、課長なんて偉そうなこと言いながらプレイング・マネジャーだ、なんて言っているのですが、こうなるとマネジャーはどこかへ行つてしまつて、単なるプレーヤーです。直接の相手は仕事も良く判っているし、こちらの事情にも理解を示すのですが、何せ金を握っている財務担当重役や中央銀行と称するところの連中が大変です。決められた規則や書式はどんなに理不尽でも一言一句変えることはまかりならぬ、と言つ態度。訳がわからず決まりだけを押し付けようとするからこう言つことになります。こうした決まりに触れぬよう、右に左に体をかわしながら十日ほどで何とか契約に持ち込めることになりました。

圧巻は支払条件でした。通常なら信用をベースに書類だけを整えておいて、金は船が出た後で払って貰う、と言うのが船舶や航空機の修繕費用精算の国際慣習なのですが、戦時下と言う異常状態にある国、と言うことを相手に納得させ、工事費全額受け取らなければ船は渡さない、金の顔を見るまでは船は造船所から離さない、と言う契約をしたことでした。現地の商社の人や、同じ時期、商談に来ている色んな企業の人たちなんか、イラン人相手にこんな強気の商売をやった人なんか見たことがない、なんて言っていました。説得工作が効いてこの線でまとまりました。

先方も、こちらと訳のわからぬ上司との間で板ばさみになって散々苦労したものですから、目処がつきかけたとき、こんなことを言っていました。「イランには『人生を二度生きることが出来たら、一度目は学ぶために生き、二度目はその経験を生かして生きる』という諺があるが、自分は二度目の人生は絶対に政府系企業には勤めない」。苦労の程が判って同情しましたが、こんなことが言い合えるようになれば成功です。契約調印は日本から委任状を送ってもらって相手の社長との間でやったのですが、調印のテー

ブルの周りにはチャドルを着てライフル銃を持った革命政府の連中がウロウロしています。一〇億円程の契約でしたが、仕事を決めると言うのはいつになっても良いものだと思います。と思つたことでした。

船は一カ月半掛かつて四月二十日横浜着。ようやく来たな、と感慨も一入でしたが、始まつてしまえばあつけないもの、契約書通り三カ月後の七月二十日には完工引渡し、と言うことになりました。心配していたお金も約束どおり入つて来て、「金の顔が見えるまで、船はこちらで預かります」なんて嫌なことは言わないで済みました。長いこと掛かつて苦労して仕事を纏めても、済んでしまえば、もう終つたのか、と言う事になるのが我々の商売。でも、今回は最初からの心配が皆一つずつ奇麗に片付いて行つて、スツキリした一件落着でした。

## 七・アルコール禁止の国

イスラム教は飲酒を禁じていますので、アラブの国々は殆ど禁酒国なのですが、その

中でも厳しいのがサウジ・アラビアと革命後のイランだ、と言うことを聞いていました。自分たちが宗教上の理由で飲まないのは勝手ですが、外国人旅行者にも飲ませない、というのはいささか行き過ぎのように思います。クエートに行った時もかなり厳しかったのですが、他の国では外国人の飲酒は認められ、ホテルにはバーもあるし、旅行者が自分で飲むために持ち込む酒は認められている、と聞きます。ところがサウジとイランでは酒の持ち込みも一切ダメなのです。イランでは外国人でも空港で酒を持ち込もうとするのが見つかり、目の前で瓶を開けられ、ドボドボと捨てられるのだそうです。ここはイスラム教、コーランの教えですから、一寸間違えるとすぐに体罰です。特に、革命後、国の秩序を守ると称して目を光らせているのが、革命防衛隊の若い宗教家達だそうですね。ですから怖いとのこと。聞くところによれば、この防衛隊の中にはシャーの時代の犯罪人（政治犯のみならず本当の罪人も）が多く含まれていて、何か手柄を立てようとウズウズしているのだそうで、こんな連中に捕まったら何をされるか判りません。何かの拍子で牢屋に入れられ、ある日突然銃殺されてしまって、後で、ア、間違っていた、なん

てことが度々起こるのだそうですから油断は出来ません。飲んでいるのが見つかったらどんなことになるのか判りませんが、良くしたもので、こんな国にもチャンと密造酒があるのです。

トルコ、コーカサスに近い地方に住むアルメニア人が作っていると云う、ブドウの枝から作るというウオツカみたいなものがあります。気心の知れた韓国料理屋（革命前、沢山あつた日本料理屋が殆どそのまま韓国人の手に渡つて、韓国風日本料理を食べさせます）へ行くと、イラン・ビールと言つアルコール抜きビールを出してくれ、これにこのウオツカを割つてサツポロと称する不思議な飲み物を飲ませてくれます。駐在員の社宅（三菱商事の駐在員は六人きりですが、国状が国状ですから全員単身赴任。いわゆる支店長の社宅に全員が合宿しているのです。以前、日本人の家で働いていたと言つイラン人のコツクがいて、日本食まがいのものを食べさせてくれます。ここへは何度が連れて行ってもらいました）には、この密造酒を売りに来るらしくて、タップリあるので。ただ、臭いがきつくて、このままでは飲めた代物ではありません。水で割つてレモ

ンやカボスの汁をジャバジャバ搾り込むか、コカコーラ（アメリカとケンカしていると言うのに、不思議なことにコークは豊富みたいです）で割るかして飲むのです。それでも二週間もここにいて帰る頃には、この臭いと味に何となく馴染んで美味しいと思うようになっていました。

もっとも二週間もアルコールに不自由な生活をしていると、アルコールなんか抜きでも良い、と思うようになります。あまり飲みたくなくなるのです。帰る日が来てやっとアルコールのない国を抜け出してもイラン航空機では機上の酒のサービスはありません。北京で一休みするので、トランジットで降りたら、売店にウイスキーやビールがあるのです。好きな人は、待ちかねた、とばかりにウイスキーのボトルを買い込んで、乗り換えた機中に持ち込み、成田に着くまでにへべレケになっていましたが、私はビールを見てあまり手を出さず、折角だから、と付き合いにカルスバーグの缶ビール一本求めただけでした。その代わりに家に着いてから夕食時に飲んだ日本酒が美味かった。出る時からの約束で、帰った晩は牡蠣鍋を用意して貰っていたのですが、酒で

鍋をつついて、良くぞ日本人に生まれけり、の感一入でした。

## 八・特産物・観光・土産

ご存知の通り、イスラム教では安息日は金曜日。土曜日、日曜日はシツカリ働きます。日本サイドは勿論金曜日はやっていますから、日本との連絡の為に出張者は金曜日も出て来て働くことになります。と言つことで、出張中の二週間、全く休みなしでした。もつとも金曜日は半日で仕事を片付けて、見物に出かけたりしましたし、最終の日は、夕方出る飛行機待ちで丸々一日時間がありましたので、買い物なんかも出来ました。

旧シャーの王宮があります。私が行つたのは夏の宮殿と言われるところでしたが、一つの丘を庭みたいに作り、その中に王様、その両親、夫人の館があります。建物自体は大理石の立派なものですが、大して大きなものではなく、フランスの王宮や英国の貴族の館に比べたらチャチなもの。中の調度品、世界中から買い集めてきた品物、各国からの贈り物等、立派なものはありません。美術品も大分

買い集めていて、美術館に展示されていますが、本物ではあつても有名な画家の作品や我々が知っているようなものはなくて、むしろオソマツな位でした。金はあつても歴史が浅いので、美術品も良いものが集まらなかったということなのでしょう。王宮の至る所に写真のスタンドがあつて、そこには王家の豪奢な生活ぶりと貧しい人たちの生活の様子が並べられ、その差の大きさを見せつけるような格好になっていました。中国で、やはり博物館に行つた時、それはそれは物凄い宝物の横に、この宝物一つで当時の何万人の人が何日生活できた、なんて往時の支配者への憎しみを掻き立てるような紹介がしてあつたのを思い出しました。こうして他の国の王様達と比べてみると、イランのシャーが特に贅沢をして人民を苦しめ、そのために追放されて悲惨な最期を遂げた、とは言えないのではないか、と思います。むしろ近代化に力を入れ、国力を増して善政を施したとすら言えるのではないか、と思います。ただシャーの場合は、これが何百年も昔のことだけでなく、この四〇・五〇年の間にやってしまった、というところに批判を受ける理由があるのでしょうか。もっとも、先日、金の仏像を含むシャーの財産の一部が何十億

ドルとかで売られた、と言う新聞記事を見ました。我々が見られる範囲のもの以外も、  
っと良いものが隠されているのかも知れませんが。ただ観光客としては、こうした場所  
での写真の撮影が全く許されないのが残念でした。

イランと言えばペルシャ絨毯。カーペット博物館なるものがあります。この絨毯は完  
全な手作業で作られます。道具を見ても実に原始的なものです。長さ方向に縦糸を通し、  
横糸は一目一目手で織り上げて行くのです。七センチ足らずの何とか言う単位の長さの  
中に、何個の織り目があるか、によって値打ちが変わります。細い方が手間は掛かるけ  
れど良い模様が出るので値打ちがあると言う事になります。普通のもは五〇目位で  
すが、一二〇目なんてのもありました。コッソリ触ってみました、良いものはやはり  
ビッシリ目が詰まっっていて如何にも高そう。王宮にある絨毯で一四五平米というのがあ  
りました。これも最高級品で平米辺り五百万リアルと言いますから、一五〇〇万円。一  
枚二十二億円もするということになります。絨毯織りの職人は子供の頃から何十年もか  
けて一枚の絨毯を織るのだそうです。最初の部分の色があせないように、暗くて、ある

程度の湿度の所で仕事をしますから全く非健康的。手にタコが出来るのは勿論のこと、足が立たなくなったり背中が曲がってしまったりするのだそうです。とにかく細かいものになると一日に織れる長さが何ミリという単位とのことですから、余程根気の要る仕事です。

あとは工芸品ですが、何か乱暴で大まかそうに見えるあの人たちのやる作業が意外に緻密で繊細なのです。銅版に細かい模様を打ち出した皿や壺。細かいモザイクの箱とか額縁。全く見事なものです。粗末な服を着て、ガサツに見えるけど、本当は繊細な人たちなのかも知れません。イランなんてもう行く機会もないだろうと思いついて、記念品を幾つか求めたのですが、外貨規制が厳しく、通貨が実力以上の交換レートになっているので（入国時に持ち込んだ外貨の額を調べ、パスポートに記入されてしまいます。出国時に滞在中の通貨交換証明書と外貨残高を調べられるので、闇の交換が出来ません）大変に高い買い物になりました。絨毯とか貴金属、金製品など高価なものは買ったとしても国外への持ち出しは禁じられているとのことでしたが、我々が買える程度のものはゴミの

部類らしく、税関でも別に何てことありませんでした。

（昭和五十八年十一月八日）

## オーストラリア

オーストラリアへの出張は主にLNGTの長期修繕契約のネゴ目的の回数が多かったが、こちらの方は仕事のみ。最初に行った出張時に書いたものが紀行文の形になっているので、この分を紹介する事にした。

## オーストラリア

### 一・仕事のこと

六月末、急に一週間ほどオーストラリアに行ってきました。いつもの海外出張だと、

工場や上司から、何とか仕事を纏めて来てくれ、頼む、と言う感じで期待を背負って出て行くのですが、今回は一寸様子が異なりました。一寸した仕事の入札で、予選を通過して決勝ラウンドに残ったものの、その後の戦いが厳しそうで、社内的にもこれ以上は無理できず、これ以上戦っても無理なのではないか、と言う声が強かったのです。この時期、他に目ぼしい案件もないし、これに賭けてみよう、行けるところまで行ってみよう、と言う私の主張が通って、それなら何とかして来い、と言うことで自ら飛び出したものの、言わば孤立無援。よく海外に出て途中で本国からの支援が続かなくなつて出張者が討ち死にするケースを、二階に上げて梯子を外す、と言う表現で説明しますが、今回のケースは最初から梯子がなくて行った先の二階から梯子を降ろさないと生還できないと言うケース。不況産業を抱えている営業責任者の悲哀です。行つて縄梯子を縋いかけたら、早くも先方から梯子を引つ掛ける爪を外されそうになり、最初から七転八倒と言うことになりました。

結局、結論が出ぬまま五日の滞在で一旦帰ってきました。その後、向こうでの工作

が奏効して、何とかかんとか決勝ラウンドで一番札にもぐり込み、これなら行ける、と思ったのですが、労働組合の抵抗と言う全く別の面からの障害が出て来て、このプロジェクト自身が中止になり、結局今回は無駄働きという結果になりました。

オーストラリアは労働党が長いこと政権を握っていたせいもあって、労働組合の力が大変に強いのです（労働組合が強いから労働党が政権をとるのだ、と言う逆の見方もあります）。海運の世界でもこれは有名で、居住設備とか荷役設備、クレーンなんかには大変にうるさい規則があります。今回の仕事は、居住設備の改装工事でした。オーストラリアの船は一隻の船の乗組員が七つの労働組合に分かれていて、夫々の組合の要求を満たさなければならぬ、とか。こんな具合ですから、乗組員の数も世間の水準に比べると圧倒的に多くて、不経済な運行を強いられています。それも中国とか、インドとかの人件費の安い人たちが大勢乗っているのなら何とかなりますが、世界有数の高賃金国のオーストラリアの船員が大勢乗っているのですからたまったものではありません。で、乗組員の大幅減員をするための工事を会社側が計画し、私たちはこれに協力してき

たのですが、最後の最後でたった一人のところまで折り合いがつかず、交渉が決裂してこの計画はオジャンと言つことになりました。お蔭でこの会社が持つていた航路権を一つ手放すとかの騒ぎ。何でもこの会社の代わつたばかりの社長が、対組合強硬派で組合に対して姿勢を示さんとした、との話もありますが、いずれにしても高い代償だつたわけです。私たちも折角良いところまで追い込んだのに最後のどんでん返しで残念なことでした。

## 二・生きもの

オーストラリアという国は、変わった動物がいることで知られています。一番ポピュラーなのがカンガルーとコアラ。あとカモノハシとかエミュー、歌で有名なクカブラと言つ鳥。もつとも今回は滞在が五日間で、週末もなかったもので、どれも見られませんでした。最近の話題はご存知エリマキトカゲ。いつも宣伝の下手な三菱自動車が三菱ミラージュの宣伝に使つた、二本足で走るエリマキトカゲが評判になっていきますね。空港の

売店にカンガル―やコアラのブロンズに混じってエリマキトカゲがあったので、「これ、今売れるでしょう」と聞いたら、店のオバサンが「どうしてだか、売れて売れて」と言っていました。新しいもの好きの日本人のこと、買い漁っているのでしょうか。何を隠そう、私も一〇個ばかり買ってきたものです。オーストラリアの硬貨には皆これらの動物がデザインされていますが、二セント硬貨の裏がこのエリマキトカゲ。これは記念になるワイ、と少し多目に持って帰りましたが、三菱商事の人が、本国から二セント硬貨を二万枚集める、と言う指令を受けたとかで困っていました。ガメツイ人がいて、ペンダントにするか何か商売にすることを考えているに違いありません。溜まった分何百枚かを持って帰ってくれ、と頼まれましたが、都合でダメになりました。その代わりに言うてはナンですが、娘に大きなコアラの縫いぐるみ人形を抱えて帰りました。ディズニ―ランドの熊のプーサン、ロンドンのア―ント・ルーシー（パディントン・ベアの伯母さん）、アメリカの大きな熊等など、娘の部屋は縫いぐるみで一杯です。

### 三・食べるもの

新しい国ですから、オーストラリア料理なんてのはないのだそうです。地の料理はなくて、欧州の出来上がったものが輸入されているみたいです。カンガルーの尻尾のシチューなんてのがあるとのことでしたが、これとて一般的でなく奇を衒った観光客向け料理みたいなものらしい。料理の方法は別として中々美味しいものがあります。肉の国ですからステーキ。これは中々豪華で美味しいのです。メルボルンに豪州で一番美味しいと言われているステーキ屋があつて、連れて行ってもらいました。小さい店ながら流石に美味しいステーキを食べさせてくれました。コースは一種類でタップリしたサラダとソーセイジの前菜。手作りのソーセイジでプリマ・ハム辺りとは大分違います。肉は余程用心して、スモールを強調しないと、馬鹿でかいワラジみたいなのがドスンと出て来ます。魚料理と言えば牡蠣。オーストラリアの気候は日本と反対で、行ったのが向こうの冬ですから牡蠣のシーズンなのです。これも小粒で、牡蠣フライには適さないけれど生牡蠣、酢牡蠣には最適です。魚も色々ありますが、クレイ・フィッシュと言うエビカニ

みたいなものが名物、と言つので食べてみました。伊勢海老を大きくしたみたいなもの。向こうの人は良く食べますから、その上にアワビとか、卵のマヨネーズ和えとか、ゴテゴテに乗せて大きな皿を山盛りしたみたいなのを食べていましたが、こちらはあつさりニンニクで焼いたのをやりました。これも美味かった。身の部分だけでお腹が一杯になって、肉のタツプリ詰まったハサミや足の部分には手が出ませんでした。これらは殻が固いので、トンカチとペンチのお世話にならないと中身を攻略できません。

ここは又ワインが美味しいのです。特に白ワインは良いのがあります。面白いのはB・Y・Oと言うシステム。レストランは免許制になっていて、酒を出せる店と出せない店とがあります。酒を出せない店の方に行くと、B・Y・Oと書いてあります。これはBring Your Own の略。つまり、自分で飲む分は自分で持っていらっしやい、と言つことなのです。別にお燗代を取ったり、氷代と称して法外の持ち込み料を取られることはありません。持ち込んだ酒をそのまま出してくれるのです。勿論、グラスは貸してくれるし、要すればワインも冷やしてくれます。良くしたもので大きな Non Licensed

Restaurant の前には酒屋があつて、夜遅くまで店を開けています。日暮れ時になると、銘々にこの酒屋の大きな紙袋を胸に抱えて嬉しそうにレストランの戸を押し入つて行くグループが見られます。いかにも「さあ、今夜は飲ろうじゃないか」と言つゝ雰囲気があつて微笑ましい感じですよ。

#### 四・オーストラリア

オーストラリアは初めてでした。建国はごく新しく、英国のクック船長がこの大陸を発見したのが一七六七年。英国からの、流刑者を含む一〇〇〇人ほどの人を連れてアーサー・フィリップと言つた人が入植したのが一七八八年と言いますから、歴史は、現地人のアポリジニを除くと二〇〇年程しかありません。私の行つたメルボルンはこの中でも古い街だそうで落ち着いた英国調の街でした。オーストラリアというと私にはすぐ白豪主義が思い出され、他国人を容れない閉鎖的な国、と言つ印象が強くて、どんな国なのかしらん、と思ひながら行つたのですが、意外にそうでもなくて、有色の人も大勢い

るようでした。メルボルンには中華街があり、例にもれず中華料理屋も多くて、中国人社会が定着しているように見えたので、帰ってから、どうしてかしらん、と一寸調べてみて、白豪主義そのものが中国人に起因するものだったことを思い出しました。ゴルド・ラツシユに沸いた一八五〇年ごろ、採鉱労働者として中国人が大勢入ってきて経済を混乱させたので、外国人を締め出したのが白豪主義の始まりだったのです。戦後はずい分緩和され、最近ではポート・ピアルのベトナム難民も数多く受け入れているので、今や白豪主義の名残は少ないみたいです。

でも、そう言う偏見で見ると、この国の人たちは何か純粹さを尊ぶような気がします。一つの例ですが、入国時の検疫がやたらと厳しいのです。飛行機が豪州最初の飛行場に着くと、降り支度をする前に検疫官がフマキラーみたいなスプレーを両手に持って乗り込んで来て、機内をスプレーして廻ります。もっともあまり熱心とは言えず、役目柄スプレーの口を天井に向けてシューとやりながら通路を一回歩くというオザナリなもので、どの位効果があるのか疑問ですが、この儀式が済まない、外から来た人が

オーストラリアの土を踏むことが出来ないことになっています。持ち込みも食物、植物には特にうるさいのです。土のついたものは絶対ダメ。干しいたけなんかもダメだつて書いてあります。成田を出るときに、世話になる商社の人に辛子明太子を買ったのですが、これが心配でした。見せると案の定、引っかかりました。あれも説明しようとする和中々難しいものです。魚の卵を塩して、トンガラシで、なんてやるのですが、どうも旨く行かない。検疫官が、何の魚の卵か、と聞きますから、鱈だか鮭だか、何か大きな魚だろう等とやっていたら、鮭とは言ってくれな、と言うのです。鮭は特に輸入禁止品目とか。話している内に段々こちら寄りになって来てくれて、確かにこれは鮭ではないから良いや、ってんでパスさせてくれました。中々人の良い検疫官だったので助かりました。

(昭和五十九年十月六日)

## 中国

### 中国駆け歩記

一月十二日から一週間、初めて中国入りをして来ました。北京、天津が酷く寒いと聞かされていたので、ソ連製のアストラカンの帽子を借り、岡崎譲りのカナダ製の皮コートを着込み、十何年振りかで長袖のシャツとモモヒキを買い、ブーツを求め、おまけに化学カイロと足のつま先用のトンガラシを持参すると言つ大袈裟な準備をして出かけたのですが、最低気温が零下三・四度と大したことがなくて拍子抜けがしました。北風が吹くと一度に寒くなるんだそうで、悪いことは総てシベリアから来る、という冗談が流行っているようでした。

北京に四日いた他は、天津を日帰り往復、上海、広州に一泊ずつという超駆け足旅行だった上、仕事オンリー（流石に先方が同情してくれて、日曜日の午後半日だけ自由時間にしてくれましたが）だったので、印象として語れるものも少ないのですが、表面を

一寸撫でてみることにします。

## 一・技術交流

最近では中国へも観光客が入れるようになりましたが、我々商人が中国入りするのは中々面倒なことなのです。中国にはまだビザがないと入国できないのですが、これを取るのが中々厄介なのです。商談で行くにしても、相手から招待状を出して貰わねばなりません。

中国は今、中古船を大量に買い込んでドンドン自国の船隊を増強しています。船のあるところは総て我々のお得客さまになるわけです。私のところもあまり多くはありませんが、年々取り引きがあります。我々の商売の場合、商談に引っ掛けて手続きを取って訪中するのではタイミングが合わないし面倒なので、定期的に話をしに行くと言つことになります。年に二度、広州で交易会が開催されるので、これに引っ掛けて入って行くのが一番良い方法とされて来ましたが、この時期は色んな会社の誰もが出掛けて行きま

すから受け入れる側も大変だし、ゆっくり話をする時間ありません。そこで、何か適当なテーマを探して、技術の交流をしよう、という名目で客のところへ行き一緒に商売の話をして来よう、と言う作戦を取ることにしました。

今回は、海洋汚染防止とか航行安全のための新しい国際条約が出来るので、これらを古い船に適用するにはどんな工事したら良いのか、というテーマで技術交流会を申し入れたところ、是非来て欲しい、ということと招待状が来たので、この寒い中を出かけることにした訳です。

技術交流という位ですから、技術の話が先行します。相手は船舶会社ですが、今回は中々アレンジが良くて、北京にある総局に、広州、上海、天津、青島、大連にある支局から代表が集まってくれていて、ここで交流会なるものを開きました。二〇人ほどの集まりでしたが、司会と触りの部分を私が受け持ち、詳細は同行した技術屋さん達が説明すると言うやり方。通訳が入るので倍の時間が掛かります。交流会が軌道に乗ったところで、こちらはソツと脱け出して、別の人のところへ商売の話をしに行きます。

会談といつても通訳が入る訳ですから、団員が夫々勝手なことを発言する訳には行かず、こちらの窓口と相手のリーダーとのヤリトリが中心になります。今回は、一応団長を立てていたものの、こちらはもっぱら窓口役でしたし、後半は団長をやらされたので気を使いました。それでも交流会は中々好評、おみやげに二つ三つ仕事を貰って来ましたから、まずは実のある出張だったと言うことになるのでしょうか。

技術交流の方は、交流といつても一方的な講義が実体。先方の知識のレベルが充分でないため質疑応答も大したことなく、交流というより技術直流、という感じでした。

## 二・友好第一

中国へ行くと、やたらと友好にぶつかります。まず、中国に着くと招待状を出してくれたところの責任者が必ず空港に出迎えてくれます。いわゆる熱烈歓迎です。今回も朝早く出発したり夜遅く移動したりしましたが、必ず出迎えと見送りがありました。それも担当者が案内のために来るのではなくて、相応の格の人が自ら送迎を行い、別れのと

きなんか見えなくなるまで手を振ってくれます。どうやらこれが儀式化されているみたいですね。

今回も目的を伝えて、最初、相手に予定を作ってもらったら、一日会議をやったら、翌日は観光、次の日は工場やら人民公社などの見学を含める、と言う予定を作って来て三週間以上のものでした。とんでもない、という訳で、こちらの都合で最初から仕事オンリーということにし、観光や見学は一切なし、日曜日も会議の予定を組んで一週間に縮めて貰いました。その通りの行程を消化してきましたが、普通に行く観光や見学には全部、商談や会議の相手が付き合ってくれ、責任者自身が案内してくれるのだそうです。今回の私達のやり方は友好・親善をモットーとする中国の人たちにとって不満を残すものだったかも知れません。

夜が又大変。必ず歓迎宴が持たれます。中国料理のテーブルを囲んで、マオタイ酒のカンペイ、カンペイが始まる訳です。次の日は時間を作って、こちらからも答礼をするのが礼儀になっていて、少なくとも一ヶ所で二晩はカンペイ、カンペイの夜になります。

今回は駆け足旅行で、二晩以上泊まったのは北京だけでしたので、答礼は一晩だけ、受けるばかりでお返しが出来ませんでした。歓迎を受けるときも、乾杯に対しては何か挨拶をした上でお返しのカンペイをせねばならないし、答礼宴でこちらが招く側に回るときは、お礼の挨拶からご馳走のお勧め（相手の皿への取り分け）、酒のサービス、とそれは大変。この間に何だかんだと言いながらカンペイをするので、ホスト役は大分飲まされるし、気も使います。でも、本場の中国料理は流石に美味しくて、この面ではあまり苦になりませんでした。

こうした仕事を離れての付き合いを通じて、世界中の人々と友好を深めよう、と言うのが毛沢東の教えなのでしょう。意地の悪い見方をする人は、あの連中は家では碌なもの食べていないので、この種の宴会が楽しみなんだ、何て言っています。成る程そんな面もあるのかも知れませんが、それにしても、こちらからチームが行っている間中、関係者の殆んど全員が朝から晩までのフルアテンド。他の事をする暇なんてないでしょう。大変なことだと思います。

とにかく、一寸前までは仕事の発注先を選ぶ要因の第一番目に友好が来て、仕事の質や工期や値段の話は二の次三の次だったほどだったそうです。とは言っても、中国人と言うのは社会主義者である以上に天性の商売人ですから商談は上手です。友好だ、友好だ、と言いながら、今度はそれをタテにとって、友好値引き、なんて不思議なものを考え出して強要したり、満足の行く条件が出て来ないと、上の人の名前を出して「オタク以外にも大勢古い友人がいる」等と脅迫することによって上手く値段を叩いていました。もっとも今度行ったら、友好の要素は少し薄れていて、自由世界での商談のように経済の話が最大の関心事になっていました。。。

仕事が決まって、中国の船が造船所に入ってきて来ると、又ひと騒動です。お偉方を引っぱり出して歓迎のご挨拶に伺うことに始まって、パーティやら（それも代表者だけを招ぶと言う訳に行かないので、四〇人乗りの船なら四〇人全員を招ばねばなりませんから、大パーティになります）ピンポン大会やらバレーの対抗試合やら、友好に気を使わねばなりません。

こんな調子ですから自分の会社の偉い人が中国へ行き、歓待を受けて帰ってきたりすると、今度は招び返してそれ以上のことをせねばならず、事務局はてんでこ舞いをさせられることになります。中国では今、農業、工業、国防、科学技術の四つの近代化が合言葉になっていますが、こうした大時代的な接待合戦や友好の押し売りをやめることは五つ目の近代化になるのではないだろうか、と話し合ったことでした。

### 三・一つの偏見

毛沢東前主席の威光はまだ衰えを見せていないように思えます。北京の中心、天安門の正面には大きな肖像画が掲げられているし、遺体安置所もきれいに維持されています。駅とか大きな建物の正面にも同様の肖像画。毛語録の抜粋がそこら中の壁や看板に大きな字で書かれています。初めて中国入りした私には流石に大したものだ、という印象が残りませんが、何度も来ている人、駐在している人達に言わせると、何か少し変化が見られるとのこと。毛語録の抜粋一つにしても数が減ってきたと言うのです。昨年来た

ときは確かこの看板に語録が書いてあったと思つのに今回は映画の宣伝の看板になっている、とか、あの壁にも書いてあったんだけど消してある、とか。

毛沢東の評価が変わるのではないか、という声も聞かれないではありません。確かに革命家としては大変な人だったけれど、晩年の彼の動きは決して褒められたものではありません。大躍進と称し、農業に無理を強いて結局失敗に終つたこと、文化大革命の名のもとに紅衛兵を走らせ、大混乱を招いたこと。紅衛兵騒ぎが中国の現代化を十年遅らせた、という批判さえあります。有名な四人組の跋扈を許したこと、あまつさえこの中に江清夫人が含まれています。若し、毛批判をしようとすれば、ネタはいくらもあるように思えます。

大体、全体主義の体制を維持するためには、誰か強烈なカリスマを作り上げるとか、誰かを悪者に仕立て、共通の敵を作っておいて、これを徹底的に叩くことによつてまとまりを固めるとか（悪者を国内に作る場合もあるし、国外に敵国を作つて危機感を煽り立てることにより国内を纏めることもあるでしょう。先日紹介したオーウエルの「一九

八四年」でも、三つの全体主義体制の国が互いを仮想敵国視し合つて、それぞれの体制を維持している姿が描かれていました（歴史の示すところ、いつもこの種の配慮が働いていたように思います）。

この大中国一〇億の民を一つの方向に向けるためには相当強い力が必要の筈。また、その進む方向は極く単純なもので示されなければならない筈です。しかし、中国の場合、何か思想が必要だったとは言え、それが共産主義である必要があつたのかどうか。私には中国人と共産主義との結びつきがどうも良く理解出来ないので。巨大な中国を引っ張っているのが共産主義という思想だとはとても思えないのです。天安門広場にはマルクス、エンゲルスの肖像画と並んでレーニン、スターリンの大きな肖像画が飾られています。標語の中にも、レーニン、スターリンの教えに従おう、といったものがあります。ソ連と中国との関係が悪化してもう長いと言つのに、何か可笑しな気さえます。大体、中国と共産主義との結びつきが始まりそのものがそれ程思想的なものではなかった、と言われます。二十世紀の初め、列強の思うままに蹂躪されていた中国に対し、革命直後

のソ連のレーニンが、対等の立場で救いの手を差し伸べたのが中国と共産主義の結びつきの始まりだ、と言つのです。思想で結びついたと言つよりも、こうした心情的なもので結びついた、と言われた方が理解できるような気がします。中国を動かしている思想と言つのは共産主義思想と言つより、カリスマに祭り上げられた毛沢東による毛思想とも言つべきもので、何かもつと心情的なものではないかと思ひます。

#### 四・一つの偏見（続）

今現在、この大きな国が何故一応シツカリ纏まっているのか、という質問を投げかけると、大抵の中国通は、貧しくても平和で、まがりなりにも皆が飯が食える時代と言つのは、中国四〇〇〇年の歴史の中で初めてのことだからだ、という解説をしてくれます。古くは戦乱に明け暮れ、近くは外国の列強の支配の下で、屈辱的な生活を強いられて来たのに、偉大な毛沢東のお蔭で人並みの生活が出来るようになったこと、それだけで満足している、と言つのです。でも、人間は欲の動物であり、慣れの動物です。古い人た

ちは自分自身がそう言う酷い目に遭つて来ていますから、あの時代よりましだ、と言う事で納得するでしょう。でも、昔の生活を知らない若い人たちはどうでしょう。現在の生活が当たり前のものと考え、もっと向上したいと考えたとき不満が出て来るのではないのでしょうか。特に最近のように海外の文化の情報を比較的自由に流し入れていると、外の良いものが眼について、自分もそう言う生活をしたいと望む人が出てくるのではないか。そこに不満が生まれ、体制に対する疑問が出てくるのではないのでしょうか。元々漢民族は水準の高い優秀な民族の筈です。不満が生れても不思議ではありません。これを押さえ込むには教育しかありません。昔はこんなに酷かつたんだ、この酷い生活をひっくり返して現在の中国を作り、これだけの生活にしてくれたのは偉大な毛沢東のお蔭なんだ、ということを繰り返し、繰り返し民衆の頭に叩き込まねばならないのではないのでしょうか。

昔の王宮の故宮博物院は立派に維持されています。縦横一キロほどの城壁の中に王宮の建物がビッシリ建っています。木造建築が主体ですから、革命でゴタゴタしていた長

い間にはここも荒れ放題になったことと思うし、今でも年々の補修が必要ですが、次から次へと補修の手が加えられ、今や半分以上の建物がきれいに修復されています。今回は見る機会がありませんでしたが、北京の天壇公園とか北海公園に昔からある華美な建物も、金をかけて立派に維持されているそうです。まだまだ食べることに、生活水準の向上の方に、軍備や産業の近代化の方に金が幾らあっても足りないこの時期にこんな旧跡の復旧・維持に金をかけるなんてずい分余裕があると思います。向こうの人に聞いてみたら、文化の次代への伝承は大切なことだ、という通り一遍の優等生の返事が返って来ました。それも、こうした文化の遺産は皇帝が作ったのではなくて、人民が作ったものだからこれを子孫に伝えて行くのは我々の勤めだ、と言います。成る程もつとものことです。

中に入ると素晴らしい宝物が陳列されています。もつとも十四年前、台湾に行ったとき、蒋介石が本土から逃げ出すときに持ってきた宝物を陳列している中山博物館へ行きました。豪華さの面では台湾の方が上か、と思いましたが。目ぼしい物は台湾の方に流

れているのかも知れませんが。これらの宝物に「これは何年代の皇帝の苛斂誅求を受けていた当時の民衆が作ったものだが、この宝物一つで、当時の何万人の人が何年間飯が食えた。これは圧政の記録である」といったような解説がつけられています。古い文化の維持、伝達もさることながら、こうした昔の境遇の酷さを強調することにより、現在の境遇の良さを浮き彫りにするのが目的ではないかと思えます。古い桎梏を断ち切るための戦いをしてくれたのは毛沢東なんだ、ということとを強調し、あまり高望みをしないで徐々に良くして行こう、という姿勢を殊更示す必要があるのではないのでしょうか。

もっと体制が整ってくれば、毛沢東の看板を下ろしても良いかと思えますが、今のままでこの大看板を下ろしたら国民がバラバラになり收拾がつかなくなるのではないか。何だかんだ言いながら、ここ暫くは毛沢東の名声は守られて行くのではないか、というのが、今回短い期間中国を歩いてみて感じた一つの偏見です。

(昭和五十五年四月六日)

## 中国

十二年振りて中国へ行つて来ました（平成四年十一月十七日から二十日まで）。今回は上海と近くの蘇州のみで、期間も三日と極く短かつたし、仕事と宴会に追われて街をユックリ見る暇がありませんでしたが、ひと言だけ。

### 一・建築ブーム

十二年振りの上海は流石に大きく変わっていました。立派なホテルがそこら中に建っています。こんなに大きなホテルを建ててペイするのが、心配になるほど。黄浦江を跨ぐ凄い橋が出来ていました。道が二重にループしてやつと橋桁に到達するほど大きなもので、柱の Teppan に書かれた「南浦大橋」の文字は鄧小平の筆になるもの、とのことでした。黄浦江の下を潜るトンネルも二年程前に出来たとのことでしたが、これは折角作ったのに、片道一車線でしたから、すぐに渋滞するのではないか、と思われまし、換気も悪く、近い内に問題のトンネルになるのではないかと危惧されました。と言う

ことは、上海も川向こうが発展しつつあると言つことです。高さ四五〇メートルと言つオリエンタル・パール・テレビ塔（東方明珠電視塔）を建設中でした。これはカナダのトロントにある塔、モスクワにある塔に次いで世界で三番目に高い塔になるとのことでした。現在一〇〇メートル近辺まで出来ていて、完成は再来年の春とのこと。現場を見せて貰つたのですが、工法は人海戦術そのもの。基礎作りの段階では、機械力を使つたのかも知れませんが（モッコに天秤棒のレベルだったかも知れませんが）、鉄のパイプと竹を組み合わせた足場。籐のヘルメットに一輪車の手押し車のスタイル。勿論、塔の上にはクレーンを据えて継ぎ足して行く工法ですが、何だか頼りなくて怖い感じがします。現場には常時一〇〇〇人の人が働いているとのことでした。塔には大小七つの玉が組み込まれていて、これが真珠と言つことです。一番上の玉は、放送関係の事務所と機械室とレストラン、途中の五つの玉が夫々にホテルになるとのことで、出来上がったところに泊めて上げよう、と言つてくれましたが、造っている過程を見せようと、何だか怖くて出来れば願い下げにして頂きたい話です。一番下の玉とその周りは、商業施設と遊

戲施設になるとのことで、日本の企業も参画しているようでした。新聞で見るとサンリオ辺りの名前が出て来ています。街のそこら中に建築中の建物があって、一種の建築ブームではないか、とすら思えました。

## 二・経済

こうした建築ブームもさることながら、一番感じたのは人々が豊かになっている、と言うことです。十二年前は半分か四割位は人民服だったような記憶があります。上海は北京に較べると大分都会の感じがしたのを覚えていますが、それでもくすんだ感じの街と人だったように思います。それが今回は人民服なんて一人もお目にかかりません。皆小綺麗なサツパリした服装で歩いていきます。汚い恰好の貧乏人とおぼしき人たちは相当郊外へ行っても目に付きませんでした。物も豊富で、店には物が溢れています。食べ物屋の多いこと。軒並みレストランですし、着るものも明るいデザインのしつかりした品質の物が並んでいます。上海の中心の目抜き通りにある上海一のデパート、上海市第一

百貨商店を訪れ、社長に会って、昼食をご馳走になりながら話を聞きましたが、一日当り二十五万人から、日曜日には三十五万人の人が訪れて来ると言います。年間の売上が三〇〇億円。売り場面積二万平方メートル、従業員数三五〇〇人と云いますから、坪効率、一人当たりの売上で見ると日本の比ではありませんが（ちなみに私の店と比較すると、坪効率七〇〇万円対四五〇万円、一人当たり売上三〇〇〇万円対八五〇万円と言ふところでしょうか）、大変な活気です。大体、ウィークデーの昼間に上海の銀座通り、南京東路を老若男女が身動きできないほどゾロゾロ歩いている。全部が全部観光客ではあるまいに、どんな人種の人が歩いているのか、誰が何時働いているのか、と心配になるほどでした。それと一番感じたのが人々の顔付きが豊かだったこと。財布が豊かかどうかは判りませんが、心を豊かに持てる余裕を感じました。これも開放政策の成功の一例なのでしょうが。今、中国政府が力を入れているのは、私有財産制度の普及と株式投資なのだそうです。自分の稼ぎで、こうして豊富に回収しているものが自由に買える。郊外の住宅も自分の力で買うことが出来ると言っていました。現在、中国人大衆の懐に

は九〇〇〇億元と言いますから、二〇兆円以上の金が眠っているのだそうで、これを引っ張り出して投資に向けるために株を奨励しているとのこと。株式会社の制度が出来たのは、三・四年前とのことですが、国营企業もドンドン株式会社に移行しています。現在は中国全土に株式会社六十あるとのことですが、この内三十六が上海にある、と言います。上海はこうした金融の中心ですから、証券市場もここで立ちます。一般の人がドンドン株を買って、一種のブームなのだそうです。株は上がるもの、儲かるものと言う宣伝が行き過ぎて、下がった時に自殺者が何人も出たとのこと、少しブームを冷やすことも必要になっている、何て話も出ていました。いつだったか書いたように、中国人の生活力と言うのは大したものだと思います。世界中で活躍している華僑が一番良い例です。ロシアや東欧の自由化は政治のトップから進めているので急激に過ぎて、いろんなところに摩擦を生じていますが、中国の場合の自由化は、海の表面は静かでも海の底ではこうして大衆が経済の原則に従って力強く動いているのです。中国人はコミュニケーションである以前に商売人だから、政治なんて言うものは水の表面のさざ波程度にしか考

えられていないのではないか。誰が王様になろうが、共産党の首席になろうが、一般の大衆にとっては大したことはないのではないか、という私の持論を自分の目で確かめたような気がしました。

### 三・宴会

今回は招待旅行でしたからホテルも先方持ち。和平賓館と言う昔のガーデン・ブリッジ（今の外白渡橋）の近くの立派なホテル。偶然十二年前に泊まったホテルと同じところでした。ハウステンボスで中国の物産を売っている関係でこちらがお客の立場にあるものですから、大分前から、一度来てくれ、と言われていたのですが、こちらが忙しくて、中国どころではないと言うのが実状でした。それと中国へ行くとマオタイ酒で乾杯乾杯と言うことになって、怖いので行きたくないのだ、と言って断っていたら、決してそんなことにはしないから、と言う約束をしてくれたので、こちらの仕事が少し落ち着いたら、出かけることにしたものでした。約束はしてくれたものの、礼儀の問

題もあるし、と買って飲み手の次長を連れて行くことにしました。これが大成功。連日昼夜、あちらこちらで宴会ということになるのですが、威令が行き届いていて、「長島先生は『随意』（杯を干さなくても口を付けるだけで良い）、次長先生は『乾杯』」と言うことにして貰ったので、ずい分楽でした。まだまだ乾杯の風習が強く残っているのは、近代化と言っても、もう一つかな、と思ったことでした。上海は丁度名物の淡水の蟹のシーズンで、大分ご馳走になりました。最後の日はこちらで答礼することにしてアレンジをお任せしたら、訪問先の社長連中七・八人に集まって頂く宴会になったのですが、もの凄いとこゝろを用意してくれました。箸やゴブレットは勿論、蟹を食べる時に使う道具、殻を割る小さなハンマーやペンチみたいなものからフォークみたいなものまで全部シルバー。料理が大変です。上海蟹や鱧の鱗の姿煮は勿論、最上級のペキンダック、酒漬けの生蟹、鰻、子豚の皮の料理等、私辺りが珍味として知っている程度のものは全部と言って良いほど、これでもか、これでもかと出してくれました。流石に勘定が心配になったのですが、それでも全部で六万円程でしたから一人当たり五千円。中国のスタ

ンダードでは最高級と思われませんが、日本だったら、一人当たり五万円は下らない料理だったのではないかと、思われました。中国の料理は、その時にお腹一杯食べても、消化が良いのか、次の食事までにはスッキリしてしまって、またタラフク食べられるのです。お蔭でダイエットの努力はどこかへ行ってしまって、体重が大分増えて、帰ってから辛い思いをしました。

#### 四・人と自転車

相変わらず人が多い。上海の人口が一〇〇〇万人とも一三〇〇万人とも言いますから、人口では世界一の都会と言つことになるのでしよう。それと、これも相変わらず多いのが自転車です。パブリック・トランスポートーションのシステムが出来ていないので、自転車ということになります。バスと、一部にトロリーバスが走っていますが、これとどの程度便利に出来ているのか。でも、どれも一日中満員です。都市間には汽車は走っていますが、街なかの路面電車はありません。地下鉄を掘っているとのことでしたが、

完成が何時のことになるのか。タクシーもあります。十二年前は普通の人がタクシーを利用してゐる姿なんて、見た覚えがありませんが、今回はズツと頻繁に走っていたし、一般の人が捕まえて乗っていました。でも、とにかく今でも主要交通機関は自転車です。朝夕の通勤時間になると、おびただしい数の自転車がどこから湧いて来ます。街中が自転車で埋まると言つても言い過ぎではない程です。一時間も自転車を漕いで通勤して来る人もいる、と言います。ハイヒールにミニスカートのお嬢さんも自転車です。不思議なのはこれが全部無灯火。せめて後ろに赤い夜光塗料を塗ったバッジでも付けておけば良いのに、何も付いていないので、夜なんか車のライトの中に闇の中からイキナリ自転車が現れてビックリさせられます。私が滞在している間、訪問先の社長が専用運転手付きの車を貸してくれました。この運転手が二十四・五才と思われる女性なのです。あそこで車を運転するのは大変に神経を使うし、私なんか一〇メートルも行かない内に自転車との接触事故の一つも起こすのではないかと思うほど。これがこの可愛い顔をした女性運転手が実に勇敢で適確な運転をしてくれるのです。勿論、無事故。蘇州に行った

ときなんか、距離にすれば片道一二〇キロ程度と思うのですが、この調子ですから往きが三時間半、帰りが四時間半、合計八時間運転していました。最後の方では流石に疲れを見せていましたが、最後まで正確で神業的運転をし続けてくれました。どこにでもプロはいるものだと感じすることしきりでした。

(平成五年一月三日)

## トルコ

### トルコへ行きました

#### 一・プロローグ

トルコの歴史について私は系統立てて勉強したことはありませんが、断片的な知識を継ぎ合わせてみても、トルコと言う国は世界史の中でかなり大きな存在なのではないかと思えます。

私の歴史の知識の中にトルコが登場するのは紀元前十七世紀ごろと言われるトロイ

の戦争。これは神々と人間の間に生れた人（？）たちが活躍する戦争ですから、神話の一部とも言えそうですが、いずれにしても盲目の詩人ホーマーによって紹介され（私も小学校の頃、講談社文庫の「ホメロス物語」で読みました）、ドイツのシュリーマンが遺跡を発見して、この戦争が事実であったことを証明しています。戦争に負けてトロイから逃げ出した王族の末裔の一人ロムルスがローマに辿り着いて紀元前八世紀頃ローマを建国し、初代の王様になりました。そのローマは最盛期には北は英国島、西はスペイン、南はアフリカの砂漠とエジプト、と版図を広げていますが、東は今のトルコのアナトリア半島の奥の方まで征服しています。景勝地として有名なカッパドキア辺りまでローマが攻めて行ったと言う記述があります。ローマ衰退の後は、東ローマ帝国として栄え、その後トルコ民族が住み着いて、中東からメソポタミアの地域までがオスマントルコの領土でした。英国軍の将校「アラビアのロレンス」が活躍するのは第一次世界大戦のときで、ドイツ側についたトルコとの戦争でした。アラブ民族をトルコから独立させるという大義の下に英国が後押しをしたのですが、トルコが第一次大戦に負けた後、

英国を始めとする列強の都合で中東地域の領土の分割が行われ、その結果あの辺に小さな国々が出来たのだったと思います。イラクやシリアやヨルダンを始めとするあの辺の地域の政治情勢を不安定にしているのは、このときの無理な分割が原因とされています。とすると、昨今のパレスチナやイラクの騒動もトルコに遠因があると言っても良いのかも知れません。

中学の頃、長崎で同居していた母方の一番下の叔母が、勤めの給料が入ると、月に一枚ずつ私にS Pのレコードを買ってくれていたことがありました。「ダーダネラ」という美しい曲のレコードもこの時に買って貰ったものですが、これは黒海からボスポラス海峡を経てエーゲ海に出る途中のダーダネルス海峡を描いた曲で、こんなに美しい海峡があるのなら一度は見てみたい、とその当時から思っていました。

仕事上トルコとは全く付き合いがなく、出張でトルコへ行ったことはありませんでした。地図を見てみると、エーゲ海はトルコの沿岸ギリギリの小さな島までギリシャの領土なのです。これでは海運が育つ訳がありません。船を商売とする私のお客にはなり得

なかつた訳です。こうしてトルコは私にとって興味のある国、行って見たい国の一つだったのです。

高校の同級生から、安いツアーがあるが一緒に行かないか、との誘いを受けました。十五日間で十四万円、それも全部食事つきなんて言う、信じられない値段です。一月・二月というオフの期間なので可能なのでしょう。移動が多くてかなりの強行軍だし、奥地は寒いと言つし、この安値ではどんな扱いをされるか判らず、女性向ではないので、野郎どものみで行くことにしました。年は取っているけど、高校の昔の貧乏旅行を思えば、まだ大丈夫だろう、と言うことで、四人でこのツアーに参加することにしました。この種のバック・ツアーに参加するのは初めてのことですし、その上、信じられない程のこの安値。かなり酷い目に遭わされることは覚悟の上での出発でした。

## 二・ウズベキスタン航空

最初に、ウズベキスタン航空なるもので成田を発つ、と聞いてまず驚かされました。

こんな航空会社の名前は聞いたことがありません。今回のツアーの安値の一番大きな理由がシーズン・オフにあったことは間違いありませんが、もう一つの要因はこのウズベキスタン航空の利用にあつたのではないかと思ひます。旅行案内誌を幾つか見ましたが、ウズベキスタン航空でトルコ入りする方法なんて書いてある案内書はありません。ウズベキスタンと言う国はソ連の解体で一九九一年に独立した共和国。綿花が取れるので、ソ連の衛星国時代には大分搾取されていた国のようです。それより首都がタシケント。タシケントと聞くとサマルカンドなんかと並んで何だか懐かしい気がします。昔からの東西交易の中心地の一つで、イスタンブールと長安を結ぶシルク・ロードの重要なポイントとして知られています。孫悟空や沙悟浄を連れていたかどうかは別として、西遊記の玄奘三蔵もここを通っています。

まず、どんな機材に乗せてくれるか、が心配でした。どうせ欧州かソ連のお古の飛行機を払い下げて貰つて使っているのだらうと思つていましたが、古くはあるけれどもまずまずのエアバスを使つていてひと安心。エア・ホステスが殆んど唯一の楽しみでした。

発展途上国と言うか経済の遅れた国のエア・ホステスは一体にグレードが高い、というのが私の経験値です。こうした国ではエア・ホステスは女性のトップクラスの職業なのだと思えます。JALのスチュワーデスも、今は芋ネーチャンばかりですけど、ひと頃の日本では大変なエリートでピカイチの女性が乗っていました。大分昔、シンガポール航空やインドネシアのガルーダ航空に乗った時、行き届いたサービスと素敵な容姿に感心したことがあります。そこへ行くと北欧のスカンディナヴィア航空や英国のブリティッシュ・エア等では、頑丈なオバサンが、いかにも主婦、といった感じのサービスをしてくれます。で、ウズベキスタン航空はと言えば、ひと言で言って、大したことありませんでした。若しかしたらウズベキスタンと言う国、大変な先進国なのかも知れませんが。

成田を発って、一旦関西空港に立ち寄り、韓国の西側をかすめ、北京の上辺りから中国大陸に入ります。砂漠と雪をかぶった山々、どれがどれだか分かりませんが、中学時代に社会科で習ったゴビの砂漠やウラル山脈、天山山脈の上を飛んでいるのでしょう。見渡す限り緑も都市の影も見えません。地球には人が住める土地の方が少ない、と聞い

たことがあります。確かにこんなところには人間は愚か、生物も生息して行くのが難しいでしょう。偶に緑が見えると雲が発生しています。やはり乾いた土地の上には雲も出さない、と言う理屈なのだろうか。狭いけれど、国の殆んど全部が緑の生い茂る、人の住める土地を持っている日本人は幸せと思わなければいけないのではないかと感じました。砂漠らしいところには波状の起伏がありますが、ところによって似たような相似形の波になっているのは風が何かの関係だろうか。同じ形の波が延々と続いています。白い砂にみえるところ、黄色い土漠と思われるところ。その中に時々人工的な線が見えます。砂漠の中を走る道なのではないか。運良く窓際に席が取れたし、初めて通るルートなので、見飽きずに眺めていました。

後で地図を見てみたら、シルクロードと並行して飛んでいたようです。シルクロードの隊商や三蔵法師はこの道を、ラクダに乗ったり自分の足で歩いたりして何年もかけて踏破したのです。それを考えれば、ボロの飛行機の狭いエコノミー席でも九時間足らずでタシケントまで行けるのですから、贅沢は言えません。タシケントで別のウズベキス

タン航空に乗り換え、五時程でイスタンブールに着きました。

帰りのタシケントでの乗り換えの時、乗り継ぎ便の出発が一時間以上遅れたのに、アナウンスも何もなしに待合室に放つて置かれたのが唯一の不満と言うか不安でしたが、心配していたウズベキスタン航空もまずまず合格、と言ったところでした。

### 三・イスタンブールで考えたこと

トルコでの案内役はエルキンさんという三十七才の男のガイドさんでした。若い頃、体操競技の選手でヨーロッパ選手権で銅メダルを取った実績を持っているとのことですが、怪我で引退し、大学で日本語を勉強してガイドを始めたとのこと。日本には行つたことがない、とのことでしたが、立派な日本語を話し、良く勉強していて優秀なガイドでした。

トルコ人の宗教は九十九%がイスラム教とのことですが、政治と宗教の分離が徹底していて、他のイスラム国家とは大分違っているようです。これは私の理解ですが、イス

ラム教の教えでは、人間は、神の言葉、即ちコーランの教えに従って生きていけば良いのであって、人間が作ったルールに従って生きるなんて、神を畏れぬ思い上がった生き方だ、ということなのではないのだろうか。多数決が原理の民主主義の社会なんておおよそ許されるものではないでしょう。ところがトルコでは完全に共和制の民主政治が行われているようです。その代わり、イスラム教の戒律は厳しさを失っていて、一日五回の礼拝に礼拝堂に集まる人は二、三%程度とのことです。ラマダンを守る人の数も割合が減っているし、飲酒も自由になりつつある。ところによっては禁断の豚を食べる人すら出て来ているとのこと。コーランの教えも解釈の仕方によっては、こうしたことも可能になるとも言います。戒律を甘くする、しないは個人の自由ともいえませんが、宗教が政治を支配する方向が薄れつつあるというのは大変良いことだと思つたのです。今アメリカがイラクでやるうとしてゐることは、アメリカの民主主義を正義だと称して、これを押し付けようと言つこと。先日亡くなったアメリカの外交評論家のジョージ・ケナンが「アメリカ人は、自分達とは異なる価値を尊重する人々がいることを、どうしても認め

ることが出来ない」と言っています。西部劇の昔から抜けることの出来ないDNAなのでしよう。トルコでもアメリカのテレビが見られます。丁度、アメリカ大統領の就任式が放映されて見えたので見ていましたが、ブッシュ大統領は就任演説でもバカの一つ覚えのように民主主義だ、正義だ、と宣っている。民主主義や自由主義が正義である。正義は世界中の何処でも行われねばならない。その民主主義の後ろ盾としてキリスト教がありますから、今やキリスト教徒とイスラム教徒との全面抗争になりつつあると思うのです。両方とも一神教の宗教ですから、ぶつかり合うことになれば片方が完全に駆逐されるまでの争いになりかねません。自由主義社会は、政教を分離したトルコの知恵を学ぶべきではないか、というのがトルコに来て考えたことです。トルコのEC加盟が話題になっています。近々加盟の方向が定まり、十年位かけて条件作りをするとのことです。トルコが、入れてくれ、と言うのに、EC各国の方がイスラムを入れるのはどうか、なんて言っているようです。ECも、そんな白人・キリスト教社会の仲良しクラブみたいなことを言っていないで、トルコを媒体としてイスラム社会との共存を図るべきでは

ないのか。むしろ積極的に、お願いしてでも加盟して貰うべきではないのか、と思ったことでした。（新しいローマ法王が決まりましたが、このベネディクト十六世は、トルコのEU加盟を「大きな間違い」と言っていていられるそうです。私の意見が法皇の意見に敵うとは思えませんが・・・）

#### 四・ダーダネルス海峡

イスタンブールからマルマラ海の北側、欧州側を西に走って五時間ほどでガリポリに着きます。ガリポリは第一次大戦当時、大変な戦闘が行われたところとして知られています。敵味方合わせて五〇万人の死者が出たとか。このガリポリからフェリーでダーダネルス海峡を横断して、アジア側のチャナッカレに渡ります。夕暮で景色があまり良く見えないので、憧れのダーダネルス海峡の美しさを十分に味わうことは出来ませんでした。が、三十分ほどの間、吹きっさらしの雨混じりの艦橋に立って若くして亡くなった叔母のことを思い出していました。

女ばかり四人姉妹の母の一番下の妹で、私とは十才違い。姉弟と言っても良いほど仲の良い叔母でした。自分の姉の一人に向かつて、達明ちゃんみたいな兄さんが欲しい、と言って姉に複雑な思いをさせたことがあるそうです。陽気で笑い上戸の美しい人でした。法事の時、お坊さんのお経が可笑しいと言ってシーンとした満座の中でキュウキュウ言って笑って、オジイチャンに大目玉を食らっていたことがありました。長崎で月に一度買ってくれていたレコードは、レコード屋で試聴して気に入ったものを買うのですから、系統だったものではありませんでした。「金と銀」「スペインの姫君」「ラモーナ」など繰り返し聴いたので今でもメロディを覚えています。ダーダネルス海峡をイメージしたと言われる「ダーダネラ」はこの内の一枚でした。当時の私は分かっていますませんでした。叔母は同居の家賃代わりとして、レコードを月に一枚買ってくれていたのではないかと思います。後年、子宮ガンを患い、子宮を摘出して入院していましたが、その時も何度も見舞いに行きました。当時は抗がん剤が飲み薬で、茶色くていかに不味そうなお粉をドッサリ飲まされていました。もう病気に負けかかかっていて弱気に

なり、この薬を飲むと胸がムカムカして気分が悪くなる、と泣き言を言いますから「また（子供が）出来たんじゃないの」とブラック・ジョークを飛ばしたら「子宮もないのに」って、それこそお腹をよじって涙が出るほど笑ってくれ、それから間もなく亡くなりました。五十一才の若さでした。

チャナツカレという海峡の地中海への出口の町に一泊しました。夕食の時、キーボードの弾き語りでBGを流しているオジサンがいたので、勇を鼓して「ダーダネラ」のリュクエストに出かけましたが、英語が通じず全く駄目。メロディを唄ってみてくれ、と言ったのでやってみただけで、唄い方が悪いせいか通じません。ガイドに頼んで通訳して貰いましたが、結局、その曲は知らない、とのことでした。感傷の日の締めくりが出来ず残念でしたが、オジサンの努力をもって多とすることにしました。

## 五・建国の父

お天気に恵まれていた旅も一〇日目には雪になりました。カッパドキアからハットウ

シヤシユというヒツタイトの古都（世界遺産になっています）に行く予定になっていたのですが、かなり険しい山道を通って行かねばならず危険、と言うことでキャンセルになり、真つ直ぐ首都アンカラに向かいました。これも雪山を超えて行く大変なドライブでした。大体、トルコのあるアナトリア半島というのは、黒海と地中海の間に盛り上がった台地で全体に標高の高い土地なのです。西のエーゲ海側が一番低く、東に行くにしたがって高くなり、イランとの国境の辺りが一番高くて、ノアの箱舟が漂着した山として名高いアララット山を含む五〇〇〇メートル級の山々が並んでいます。アンカラは丁度この中央辺りですから、標高八〇〇メートル。夏は三十五度になるし、冬は零下二十度にもなると言います。その日の寒さは大したことはありませんでしたが、私たちはその真冬の雪の中に飛び込んだのです。

アンカラはトルコの首都ですが、人口はイスタンブールに次いで二位の三二〇万人。一九二三年に共和国として独立した際、首都に指定されました。独立に当って力を発揮し、初代大統領になったのが建国の父と呼ばれるアタチュルクで、アンカラには立派な

靈廟があります。アタチユルクは第一次大戦時の陸軍の將軍の一人で、ガリポリの闘いなどで活躍した英雄でしたが、敗戦後、英国を初めとする列強がトルコの分割を始めた時、時のスルタン（王様）が自分の身を守るために、勝手にその分割を認めるような条約を結んでイタリアに亡命した後、この条約に反対して立ち上がり、独立戦争を勝ち取った人です。大統領就任後は、政教分離を徹底させ、近代化に力を尽くした人とのことで、タイム誌で二十世紀最大の人物、と評されたことがあるそうです。文字をアラビア文字からローマ字に変えたり、一夫多妻の慣習を禁止したり、トルコ帽の使用を禁止したりしています。明治維新を成し遂げた人として、明治天皇を尊敬していたとのことから、トルコ帽の禁止は、意識改革に効果があつたという断髪令に習つたのかも知れません。この改革に一番抵抗したのはイスラム教の聖職者達だつたと思われませんが、これらの人々を肅清した例はなかつた、と言います。宗教の指導者が、自分達の存在を否定するような、こんな改革に付いて行つたなんて普通に考えたらとても考えられないこと。アタチユルクと言う人は当時の人たちの絶大の支持を得た余程の大英雄だつたに

違いありません。

## 六・世界遺産

トルコには九つの世界遺産がありますが、今回はこの内六つを巡る旅が計画されました。

### イスタンブール歴史地域

トルコには国中にイスラム教の寺院、モスクがありますが、その中で一番有名とされているのがこの歴史地域にあるブルーモスクです。第一日目の最初に行ったのがここでした。十七世紀の初頭にオスマントルコのスルタンが建てさせたものです。モスクには礼拝の時間を知らせる目的で、ミナレットという塔が一本付いているのが決まりになっていますが、ミナレットの数は建てた人の権勢を示すものなので、このモスクは六本のミナレットを持っています。四本までは時々見かけましたが、六本あるのはこのモスク唯一とつとのこと。外見もまるで小さな山みたいな巨大な建物ですが、中に入る

と柱のない広い空間があつて、これが礼拝の場所。イスラム教は偶像崇拜を禁止して、ますからキリスト教のマリア様とか磔になつたキリストの像などはありません。抽象的な図柄の壁や天井があるだけです。流石に立派なものでした。

再度イスタンブール入りした最終日に、同じ歴史地域のトプカピの宮殿に行きました。オスマントルコのスルタンの居城です。私のここのお目当ては、大分昔に見た「トプカピ」という映画に出て来た、秘宝の短剣。大きなエメラルドで飾られた奇麗な短剣でした。隣に、八十六カラットという巨大なダイヤモンドが飾られていました。このダイヤモンドは、昔、漁師が拾つたのを、スプーン職人が三本のスプーンと取り替えた、という伝説があり、「スプーン職人のダイヤモンド」と呼ばれています。この後、添乗員とガイドさんに無理を言つて、グランドバザールでの買い物に行く一行と別れて、自由時間を貰いました。この自由行動は、それまでの旅行中、私が示した実績が信用になつて特別に許して貰えたものようでした。

宮殿内の考古学博物館を見た後、お目当てのアヤソフィアまで歩きました。ブルーモ

スクのお向かいに、少し小ぶりに見えるアヤソフィアというモスクがあります。ミナレットの数は四本。小さく見えました。ドームはブルーモスクよりこちらの方が大きくて、なんでもローマのサン・ピエトロ寺院、ミラノのドウオモ、ロンドンのセント・ポール大聖堂に次いで、世界で四番目に大きなもののだそうです。六世紀にキリスト教の教会として建てられましたが、十五世紀にイスラム教の寺院に改修され、それまであったキリスト教関連の壁画は漆喰で塗り込められました。今は博物館として使用されているので、漆喰を剥がす作業をしています。イスラム教のモザイク模様の下から、十字架に掛けられたキリストやマリア様の絵が出て来ているのが見られます。ツアーではこちらのモスクの見学は入っていませんでしたが、我が俵を言つて、無理をしても行つてみて良かった。ミナレットの数は四本でも、歴史的に見ればこちらの方が格段に価値がある、と思いました。

その後、夕食の場所に指定されていたイスタンブール・シルゲジ駅のレストランまで歩いて行つて一行と合流しました。この駅は、オリエント・エクスプレスの終点になつ

ていた駅。「オリエント急行殺人事件」を書いたアガサ・クリステイの大きな写真の下で、トルコ最後の晩餐会になりました。

### トロイの古代遺跡

盲目の詩人ホーマーがイーリアスの中で歌ったトロイの戦争は紀元前十七世紀ごろの出来事とされています。元々アフロディテなど三美神の美人コンテストの役を勤めたというパリスが主人公だし、戦争の中で活躍する英雄達も神様と人間の間に生れた人（？）達の話ですから、神話の一部とされていたものです。十九世紀になってドイツのシュリーマンがこれを史実だと信じて私財を投げ打って発掘した結果発見したものです。ここにはそれ以前から人が住んでいたとのことですが、アナトリア半島は地震の多いところですから何度も崩れて廃墟になり、その上に又都市ができる、ということを経り返して、九層もの都市遺跡が発見されました。トロイの戦争はこの六層目の都市で起こった出来事なのだそうです。実はシュリーマンが発掘したのはこの第一層だったそう

で、それでも沢山の財宝を発見し、ドイツに持ち帰りました。シュリーマンなんて古代文明の発見者とされていますが、結局は墓荒しだったと言うことです。

ここは是非見て見たいところの一つだったので、楽しみに行って見ましたが、大きなトロイの木馬の模型がある程度で、遺跡自身の保存状態は悪く、大したことはありませんでした。最初の発見者が素人だったので十分な保存が出来ていなかったとのことです。今は学者の手で発掘が進められています。全貌が解明するまでに少なくとも三〇年は掛かるだろう、と言われていているそうです。

### パムツカレ

エーゲ海の真珠と言われるイズミールから少し内陸に入ったところに不思議な景観の土地があります。三十六度とも三十七度ともいわれる石灰分を含んだ温泉が何万年にも亘って地表に流れ出していて、その石灰分が固まって真っ白な地面と崖が出来ています。丁度、鍾乳洞が地上に出来上がったと考えれば良いのでしょうか。平らなところは真

っ白な蓮の葉を並べた段々畑のような棚が並んでいます。温泉は崖を滑り落ちる訳ですが、この部分は真っ白な崖になります。棚の部分には温かい温泉が流れていて、素足になって歩かせてくれます。歩いてみても、こんなもんだな、と思うだけです、面白い経験でした。

### カッパドキア

トルコの観光案内には必ず登場する、岩を載せた石の塔が林立するこれまた不思議な景観の場所です。火山が噴火して噴出した大量の火山灰の層の上に火山弾の大きな岩が飛んできてそのまま残ります。火山灰は固まって石になりますが、何万年にも亘る侵食を経て比較的柔らかい火山灰の部分の石が削り取られ、火山弾の岩の部分はそのまま残るので、石の塔の上に大きな岩が乗った柱が林立する誠に不思議な景観が出来上がります。これがカッパドキアです。

迫害を逃れたキリスト教徒が一世紀から四世紀にかけて、この灰から出来た石の部分

に穴を掘って隠れ住んでいたそうです。七世紀になってアラブの迫害を逃れたやはりキリスト教徒が隠れ家にしていたと言うカイトルと言う地下都市があります。地下九層にもなっていて、一万五千人の人を収容する能力があったと言われています。ローマのカタコンベみたいなもの。隠れキリシタンというものはどこにでもいたものです。

### サフランボル

サフランの街と言う名前の街で、十七世紀のトルコ特有の建物をそのまま残している、ということとで世界遺産になっています。日本でいえば白川郷の合掌造りの集落の感覚なのでしょう。確かに、木造の古い建物が並んでいるけれどそれだけのこと。何故世界遺産になったのか理解に苦しみます。そう言えばフランスに行ったとき、セーヌ川の川岸やボルドーのブドウ畑が何故世界遺産なのか疑問に思ったことがあります。世界遺産の安売りがなされているのではないだろうか。長崎で古い教会群を世界遺産に登録しようと言う運動がなされています。幾つかしか見たことがありませんが、それ程の価値があ

るのだろうか。こんなものが認められても、見に来た人は、何だこれは、と思うのではないだろうか。政治力が働くと認められることになるのかも知れませんが、世界遺産という以上、誰が見ても恥ずかしくないものを認めて貰いたいな、と思いました。

### ハットウシャシュ

トルコのあるアナトリア半島には何万年も前から人が住んでいたそうですが、普通歴史に登場する最初の人にはヒッタイト人です。紀元前十八世紀ごろのことで、最初に鉄器を使った人たちとして知られています。ハットウシャシュはこのヒッタイト人の首都だったと言われているところです。アンカラから少し東に入ったところで今回のツアーでは一番東の奥地になります。大分山を分け入って行くところらしいのですが、丁度大雪になり、危険ということでの部分だけキャンセルになりました。大した遺跡が残っている訳ではない、とのことでしたが、少々興味があったのでこれは残念でした。その代わり、ここの遺跡の主要なものがアンカラの博物館に保存されているとのこと、ここ

はユックリ見物することが出来ました。

### ヘレニズムとローマの遺跡

世界遺産ではありませんが、遺跡は山ほど見ました。どれがどれか分からなくなるほど。大抵が紀元前三世紀から二世紀にかけてのヘレニズムと、その後のローマの遺跡です。ヘレニズムはアレキサンダー大王の足跡を残すものですが、大王が三十一才の若さで急死してしまうので、その配下の將軍達が各地にギリシャの文化を残し、これが遺跡になっているのです。古代ローマというのはやはり大変な勢力だったんだ、と実感します。フランスに行ったとき、南フランスはローマだ、と書いたことがあります。トルコも奥の方までローマの遺跡が残っています。エーゲ海に近いエフェスの遺跡は保存状態も良くて感心しました。二万五千人人を収容したと言われる野外劇場は今でも使われているそうです。ローマ三賢帝の一人とされているハドリアヌスなんて皇帝は、ずい分と旅行の好きだった人らしく、英国の北のニューカッスルの近くに蛮族の侵入を防ぐた

めということ、英国島を横断するハドリアン・ウォールを築いていますし（実はローマの方が侵略者で、原住民のケルト人を追い払った後、これらの人が戻って来ないように作った壁です）、アテネにもハドリアンの門があります。このエフェスにもハドリアンに捧げられたという神殿がありました。地中海の沿岸の町アンタルヤにも美しいハドリアヌス門があつて、町の景観に溶け込んでいます。東に向けてはどうやらシリアの辺りまで行つたらしいのです。

地中海に近いアスペンドスではこれも略々完全に近い形の野外劇場を見ましたし、三万人を収容したと言われるアフロディシアスの競技場はローマのチルコ・マツシモンかとは比べものにならないくらい保存状態が良く、見事でした。

## 七・伝統と近代化

### デノミネーション

トルコでは丁度今年の一月一日からトルコリラの大幅なデノミが実施されました。ゼ

口を六個取り去る大幅なもの。勿論まだ新札と旧札が混在しています。同じ価値の紙幣は、数字だけ変えて絵柄も色も大きさも全く同じに作られています。デノミもこれくらい大幅になると間違えようもないようで、混乱は全く見られませんでした。まだ旧貨幣の呼び方がまかり通っていて、五新リラのビールを飲んで二〇〇〇万旧リラのお札で支払いをすると、一五〇〇万リラのお釣りが来るなんて現象が起こります。何だか気がが豊かに大きくなつたような気になります。偶然ではありますが、中々経験できない面白い経験をしました。

### 犠牲祭

丁度、地中海側の都市アンタルヤ入りした日が、年に一度の犠牲祭と呼ばれるお祭りの日でした。宗教のお祭りですが、別にパレードが出るわけではありません。牛や羊を儀式的作法に則って殺して、家族で食べる。一部を貧しい人たちに分け与える、というものです。イスラムの教えでは所得の四〇分の一は貧しい人に分け与えることになつて

いるようですが、これはそれとは別、とのことでした。バスで街を走っていると、所々の軒下で動物を殺して肉を捌いている光景に出くわします。夕方、ホテルに着いてからあてもなく近くを歩いていたら、明かりが点いていて人声がある家があったので覗いて見ますと、大きな肉の塊りを切り分けているところでした。家族で分けていたのだそうです。家の外には焼肉用のコンロみたいなものが置かれ、そう言えば町でも木炭がそこここで売られていました。

### メヴラーナ教

地中海に面したアンタルヤから雪山を幾つか越えて、かなり内陸に入ったところにコonyaと言う街があります。ここは十一世紀にセルジুক্তルコの首都になっていた町で、メヴラーナ教の本山があります。メヴラーナ教と言うのはイスラム教の一派で旋回舞踊と言われる祈りで有名です。右手の掌を上、左手の掌を下に向けてクルクル廻りながら祈ります。神様は九十九の良いものを持っているが、人間はその内の十八を頂いて生

きているんだそうで、右手の掌紋がアラビア語の八十一、左手の掌紋が十八に見えるところから、足して九十九から十八を頂く、と解釈してこんな祈りをするんだとか。踊るのは男だけだそうです。スカートのお化けみたいな白いユルユルの服で廻るので、まるで傘が開いたように見えます。この状態で恍惚となり何時間廻っていても目が廻らない、と言います。戦後のひと頃、踊る宗教という怪しげなものを広めたオバサンがいましたが、そんなものなのかも知れません。

## ハمام

殆んどのホテルの地下室に、トルコ風呂の原型になったハمامという施設があります。何事も経験、と思い、行って見ました。天井も壁も床も大理石の部屋があつて、真ん中にこれも大理石の大きな台が置いてあります。この台は下から暖められていて、ここに寝転がって汗をかくのです。室温はせいぜい五〇度から六〇度程度ですが、温かい大理石の台の上に長いこと寝転がっていると自然と汗が出て来ますし、疲れが暖かい大理石

に吸い取られて行くようで誠に気持が良いのです。旅行者は水着姿で入ってきますが、私は水着を持って行かなかつたので、こちらの人同様、腰布を巻いたままで入りました。私が行ったハمامは男女混浴でした。裸同然の男女が、同じ大理石の台の上に一緒に並んでゴロゴロ寝転んでいる。中々スリルがあります。

一度はホテルの外に本格的なハمامがあるというので行ってみました。こちらは男女別々になっていましたが、台に寝転んで汗をかいてきた頃、強そうなオジサンが出て来ます。こちらへ来い、という手招きに従がって台の端の方へ行くと、黒いグローブを嵌めて垢すりをやってくれます。続いてマッサージ。かなり手荒にやってくれました。更に手招きで台を降りると、頭からザボンとお湯をかけられて頭を洗ってくれ、続いて身体を丁寧に洗ってくれました。これでチップを入れて一〇〇〇円程度ですから安いもの。ハمامに嵌ってトルコに何度も来ていいるという人がいました。

## 八・エピソード

## パック・ツアー

今回のツアーは阪急交通社のトラピックスが企画したもので、参加者が二十六人という適当なサイズのグループでした。やはり年配のご夫婦の割合が多く、話をしてみると、年に一度か二度は定期的に楽しみを作っている、と言う人が多かった。奥さんにコツコツり聞くと、実は女同士で行く方が良いのだけれど、という人ばかり。どうやら旦那は邪魔者扱いみたいです。ご婦人の二人連れもご婦人の一人参加もありましたが、我々の男性の爺さん四人のグループと言うのはかなり異常に見えたらしく、どんな関係ですか、とそこら中で訊ねられました。集合時間には一番遅く現われる。一度なんかは朝の散歩に出かけた二人が道に迷って時間までに現われず、バスの出発を三十分も遅らせる。その代わり、食堂には真っ先に現われてワインを取って一番最後まで大騒ぎをする、なんて悪ガキの不良老年グループでしたが、皆陽気な連中なので他の皆さんとの交流も深め、女性方にも適当にもって楽しい旅でした。私はパック・ツアーに参加したのは初めてでしたが、パック・ツアーも悪くないな、と言うのが偽らざる感想でした。

## ナザルボンジュー

こうしたツアーでは必ずお買い物タイムといって、お土産屋に立ち寄る回数が増えます。買い物には全く興味のない私なんかにとっては、この時間は誠に迷惑なのですが、お土産屋からのリベートは現地ガイドの収入源の大きな部分を占めるので、大目に見なといけないようです。特に、今回みたいな超安値ツアーでは満足なガイド料も払っていないかも知れないし、と我慢して付き合いました。立ち寄ったのは革製品の店、ジュータンの店、陶器の店、トルコ石の店と四ヶ所でしたが、それぞれに工夫を凝らした商品説明を兼ねたイベントをやってくれて面白かった。

革製品の店では四・五人の美男美女が出てくるファッション・ショーをやった後、売り込みになったのですが、ショーの中のアトラクションでモデルに選ばれたので、旅の恥は掻き捨て、とばかり思いっきりのパフォーマンスをやったら大受けでした。

ナザルボンジュー（魚の目）というデザインがあります。青い玉に白と青で作ったまなこを象ったデザイン。これは本当はメデューサの眼なんだそうです。メデューサと言

うのはギリシヤ神話に出てくるゴルゴンの娘。頭髪が蛇になっていて、その眼で見られると石になってしまふ、という化け物です。神々の王様ゼウスが、黄金の雨に化けて、人間の人妻ダナエの寢室に忍び込み、その結果生れたペルセウスによって退治された、という悪役なのですが、トルコやギリシヤではこの眼がお守りになっています。遺跡の正面には大抵このデザインの石が埋め込まれていますし、場合によっては、メデューサの顔が石に彫られて正面に飾られています。今でも店先や玄関先、歩道の真ん中などに飾られています。このデザインを使ったお土産もドッサリあります。飾り、アクセサリ、キーホルダー等、手頃な値段のものばかり。貧乏旅行者の私は、今回はもっぱらこれをお土産にすることにしました。安い上に交渉次第では負けてくれる。数買つと更に負ける、ということ、皆さんが高価な買い物をしている間、私はもっぱらこのナザルボンジュー・グッズの値段交渉を楽しんでいました。

トルコ料理は世界三大料理の一つだと言います。フランス料理と中国料理が世界の二大料理であることは聞いていましたが、三番目がトルコ料理であることは知りませんでした。確かに東洋と西洋の間に栄えた国ですから、その宮廷料理が素晴らしいものであったことは想像できます。今回のトルコ行きでその片鱗でも窺えるかな、と密かに期待していましたが、流石にこの安値では無理と思われました。決してまずくはなく、それなりに満足はしましたが、何の変哲もないお皿か、ビュッフェ・スタイルの食事。でも、お米が混じっているので取り付きやすかったし、パンがフランス・パン系で美味しかったです。それと毎食サラダが出て、この種旅行では陥りがちの野菜不足を救ってくれていました。最後の頃出て来た、ドネル・ケバブ（串刺しにして回転させながら焼いた羊の肉を削って頂くケバブ）に、唯一、三大料理の片鱗を見せて貰いました。

#### 行程

一月十四日お昼頃成田発。関西空港とタシケントを経由して、同日深夜イスタンブール

ルに着き一泊。二日目は午前中、イスタンブールを軽く見物してから、マルマラ海の北側を西に走ってガリポリからダーダネルス海峡を渡ってアジアに入り、海峡のエーゲ海への出口、チャナツカレと言うところに一泊。三日目は強風の中でトロイの遺跡を見た後、エーゲ海の沿岸を南下し、途中ベルガマでヘレニズムの遺跡を見て、そのままトルコ第三の都市イズミールへ入り一泊。四日目は、近くのエフェスでローマの遺跡を見てから内陸に向かい、この日はパムツカレ泊。五日目はパムツカレの奇観を見た後、南東に下ってアフロディシアスでローマの遺跡を見、雪の山道を走って地中海沿岸のアンタルヤまで行ってここに二泊。この間にローマの遺跡シデ、ペルゲ、アスペンドスと連続で見て回って、遺跡には聊か食傷気味になりました。七日目は北東に上り、内陸のコンヤ泊。八日目、更に東に向かってカツパドキアまで行き二泊。カツパドキアの奇勝をユツクリ観光しました。十日目、ヒツタイトウシャシュ経由でアンカラに向かう予定でしたが、これが雪のためキャンセルになりました。真っ直ぐアンカラに向かいましたが、これまた大変。大雪の中でタイヤ・チェーンを巻いたり外したりで運転手大

奮闘の後、夕方暗くなってアンカラ着、一泊しました。十一日目はアンカラの観光後、真つ直ぐ北上して黒海沿岸に近いサフランボルまで行き一泊。十二日目は雪のサフランボルを出て西へ西へとロング・ドライブをしてイスタンブールの南、ブルサで一泊。最終日はブルサから再度イスタンブールに入って二度目のイスタンブール観光をした後、最後の晚餐で打ち上げとなりました。殆んど毎日、早朝発で移動の多い強行軍の旅でしたが、皆さんお元気で完走しました。バスでの走行距離はトータルで三八〇〇キロになったそうです。十四日目はお昼頃イスタンブールを発つて、タシケント経由で翌二十八日の朝十時過ぎ成田に着き、十三泊十五日間の旅を終わることが出来ました。季節外れではありましたが、比較的暖かく、雪の一日を除いてはお天気にも恵まれて大成功のツアー参加でした。(完)

(平成十七年二月)

## スペイン

### スペインからの便り(ロンドン便り 十五)

独り者が年末年始の休みの間、ロンドンのアパートでゴロゴロしていても仕様がないので、思い切って長い休みを取ることにし、十二月二十三・二十四日と日本が休みの二十九・三十日の四日間休暇を取って二週間の休みを作りました。

今、南スペインのバレンシアに來ています。

団体旅行に参加し、二十三日にロンドンを発つてマドリッドに入りました。ここには三泊してプラド美術館でゴヤ、ベラスケス、エル・グレコの絵を見たり、立派な王宮を見たりしました。途中、昔の首都で要塞都市と呼ばれるトレドへ行ったりしました。スペインへ来て感じさせられるのは十五世紀のイザベラ女王の偉大さです。南の回教徒の町を併合して今のスペインを作り上げたのがこの女王ですし、イタリア人のコロンブス

の意気に感じて、自分の装身具から王冠の宝石まで売ってお金を作り、大陸発見の援助をしたのもこの人。コロンブスがアメリカ大陸を発見し、五回の往復でスペインに巨大な富をもたらしました。スペインが栄えたのはこれから一〇〇年ほどの間だけ。産業が栄えなかつたせいも、それから静かになってしまい、第二次大戦の頃からはフランコ將軍の独裁に抑えられて最近に至っています。三〇年以上、独裁者だったフランコ將軍がつい最近亡くなって王制に戻りましたが、少しづつ空気が変わりつつあるとのこと。存命中はストライキなんかやると死刑にでもなるような具合だったのでしょうが、私の行っている間にもタクシーの運転手のストがあつたし、地下鉄の労働者も待遇改善を叫んで騒いでいるようです。独裁者に抑えられた後と言つのは跳ね返りが強いのが世の常、スペインと言つ国はこれから大変なのではないでしょうか。

あとずっと南のグラナダまで飛んで、アルハンブラの宮殿などを見ました。この辺はアンダルシア地方といってアフリカから渡ってきた回教徒によって栄えたところですから、そう古くはないけどアラビア風の文化の跡が見られます。アラベスクなんて模様

は、回教が偶像崇拜を厳しく禁じたため、極度に抽象化された模様になったものだそうです。人種もヨーロッパ人という感じとは一寸違います。アフリカの血が混じっているのか肌の色も黒いし、髪が黒く背も高くなって、後ろから見ると日本人かしら、と思うほどの人を良く見かけました。グラナダからコルドバ、セビリアはバス旅行。黄褐色の乾いた丘陵地帯を良く走りました。雨が少ないせいかわ緑が少なく、あるのはオリーブの植林ばかり。オリーブは沢山ありますが、白っぽい緑なのでいかにも渴いた感じの景色になります。街はどこも同じような雰囲気。街の中にアラビア人の区画、ユダヤ人の区画、ジプシーの部落なんかがあり、また必ず大きな教会があります。セビリアの理髪師の家も何かとってつけたみたいな感じでした。フラメンコ・ダンスは二度ほど見ましたが中々綺麗で一見の価値がありました。これも元はアラビア人たちが故郷を偲んで歌い踊ったものだそうで、そう言えば激しい中に何か物悲しいものが感じられます。特に呼び出し役の男の歌は声からさびた感じで旅情をそそります。

セビリアからマラガへ出て来て、ここからロンドンに帰る団体と別れ、一人でバレン

シアまで飛んで来たというわけです。ホテルは旅行会社に任せただけですが、飛行場からタクシーに乗ったら、高速道路に乗ってバレンシアなんか通り過ぎてドンドン遠くへ行くのです。観光客と見てナメやがったか、と思い、一旦車を止めさせて確かめたのですが間違いないとのこと。結局、このホテルは街から二〇キロも離れたところにあります。こちらの人、観光国にいながあまり観光ずれしていません。パリやローマ、アテネなんかとは大違いです。団体旅行についた日本人のガイドも、こちらの人は決してボツたりだましたりしないから大丈夫、と言っていました。昔の大国の面影があるのか、ボンヤリしているのか。

ホテルが又物凄く立派なのです。流石に驚きました。街から離れた山の中にあるホテルですから、街に出て観光する、なんていうのではなく、ホテルの中だけでユックリ休暇が楽しめるようになっていっているらしいのです。団体旅行はかなり強行軍だったし、こちらも休みに来ているんだから、ひっくり返って太陽を浴びて本でも読んで昼寝でもしていれば良いのに、そこは貧乏性の日本人の常で、何となく勿体なくて出かけることにな

ります。四〇〇ペセタ、二〇〇〇円のタクシー代でバレンシアの町へ出て、よく歩きました。カソリックの国だけに必ず教会があつてこれがいずれも立派です。コルドバには回教のモスクを改装したカソリックの教会があつて、何が何だかわからないような建物でした。ホテルで貰つた地図を片手にテクテク、美術館とか珍しい陶器博物館とかを見ながら十一時ごろから六時ごろまで。もつともスペインはどこでも二時から四時までシエスタという昼寝の時間で、この間は街の噴水も休んでしまうので、ユックリ食事でもするしか仕方ありません。ガスパチオというこの地方特有の一寸酸味のかかつた冷スープとパエリアという海産物を主体とした混ぜご飯みたいなものを食べました。

ヘトヘトで帰つて熱い風呂に入つて生き返り、夜は折角なのでゆったり過ごすことにしました。こうなつたら覚悟を決めてせいぜいホテルの豪華さに負けないようにすることにです。食事は九時からですから、少し前にダーク・スーツに身を固めて(ヨーロッパを歩くときは遊びで出るときでも一着はダーク・スーツを持って行った方が良いでしょう)降りて行き、食前の庭の散歩。このホテルの凄いののは庭の立派なことで、テニス・

コート、馬場、ミニゴルフ場があるのは良いとして、プールが大小十一個もあるのです。部屋によっては個人プールもあります。暗い中、一人で少し気味が悪いけど猫が一匹、ずっと付き合ってくれました。 Grillでは窓際に席を取ります。もっともらしく食事を注文するとアペレティフが出て、眼下に広がる夜景を楽しみながら一杯。ワインはローゼ、食事中はウェイターが気を配っていてグラスが空になりかけるとチャーンと来て注ぎ足してくれます。この辺はイギリス人とは大分違います。イタリア人なんかとても良く気がついて食堂のウェイターにはピツタリだと思えますが、ここでも一寸そんな気がしました。もっともシーズンオフで客が少なく、ウェイターが三人ぐらいで面倒を見てくれるので、サービスの良いのは当たり前ですが・・・。食事の後は、又少し腹ごなしの散歩。ワインでほてる頬に夜風が気持ちよかったし、オリオン座とカシオペアがきれいでした。

なんて、これぐらいの事です。明日はスペインご自慢のタルゴという汽車でバルセロナへ行き、新年を迎えることにしています。ではこれで。(昭和五十年十二月三十日)

## マレーシア

マレーシアは、LNGT修繕包括契約の交渉のため、  
ずい分何回も出張しているが、最初の訪問の時のみ、印  
象記を書いている。

### マレーシアのJICA

昨年十月、初めてマレーシアへ行きました。クアラルンプールで一泊しただけでしたが、マレーシアびいきの三菱商事の支店長の話を聞き、現地の人たちと接触した中で、特に人種問題について興味を感じましたので忘れない内に書き留めておくことにしました。又、外国の話で少し鼻につくかもしれませんが。

マレーシアと言う国は日本と同じくらい面積のところに入人口二二〇〇万人、と言いますから東京と同じくらいの人が住んでいる国です。この内、二〇〇万人が東側の貧しい地方に、残りが比較的豊かな西側に住んでいます。工業地帯は西側のクアラルンプール、ペナン地区に固まっています。

クアラルンプールはこの国の首都で人口八〇万人。土地の人は昔の名前でセラングールと呼んでいます。クアラルンプールというのは泥の川といった意味だそうで、これが外国向けの名前になっています。確かに街の中を土色をした小さな川が流れています。この国は錫の産出国で、この街の周りにも錫鉱山がいくつがあつて、これらが川の水を汚すのだそうです。でも、街は緑が多く、スツキリしていてとてもきれい。決して豊かな感じはしませんが、こざつぱりした雰囲気は爽やかな印象すら与えます。折角きれいな街なのに「泥の川の街」なんて、誰が何時つけた名前なのか知りませんが、人ごとなから残念な気がします。接する人の感じもとても暖かくて良いのです。対日感情も悪くないようです。

政体は立憲君主制。王様がいるのですが、十四ある州の首長が五年交代に選挙で王様になるのだそう、民主的な王様もあつたものです。強烈な反共主義の国、と見受けられました。National Monument（国家記念碑）というので、何かと思つて行つて見ましたら、共産主義者と戦つて死んだ人の碑でした。博物館にも共産ゲリラやテロリストを何人やつつけた兵士、警官ということで写真や遺品が飾られていて、今も国民の英雄になつています。

この国の現在をあらしめたのは、有名なラーマンなのでしよう。Tengku Abdul Rahman は一九六三年、マレーシア建国時の初代の首相ですが、マレー系マレーシア人（ブミプトラと呼ばれます）の地位を向上させよう、と言つ政策を打ち出しました。現在の首相は三代目ですが、二代目、三代目ともブミプトラで、ラーマンの政策は変わらず続けられています。マレーシアの人種構成は、五〇％がマレー系のいわゆるブミプトラ、四〇％が中国系、一〇％がインド系と大別される由で、宗教が夫々回教、仏教、ヒンズー教と異なつてゐるため、人種が混じり合うことは殆んどないとのこと。この辺は

宗教心の薄い日本人には中々理解し難いところです。土着は勿論ブミプトラなのですが、農業に従事している人が多いのだそうです。氣候が良いために食べるのに事欠かず、土地さえあれば何とでもなるといふことで、どうやら人間がノンビリ出来上がっているとのこと。日本の企業も沢山進出していますが、給料日の後、一週間くらいはブミプトラの従業員の出勤率がガタンと悪くなるのだそうで、この人たちはその日が食べられればそれで良く、将来のためにガツガツ貯蓄しようなんて意識はないだそうです。一般的に言えば、向上心に欠けるということになるのでしょうか。そこへ行くと中国系やインド系は土地を持たないよそ者ですから金が第一。商売にも長けていますから、特に経済界は殆んど中国系が押さえています。後進国ですから外国からの援助が多いのは当然ですが、産業資本の面から見ると、六〇%が外資、三〇%が中国系で、マレーシア自国の資本は二、三%程度とのことで産業界が外資と中国系に抑えられていることが判ります。

一九七〇年に国の建て直し二〇年計画が出来ました。何でも人種比率にするのが平等、という考え方の下に、一九九〇年には何もかも平等にしよう、というのです。五年毎に

この計画の見直しが行われ、現在までのところは順調に進んで来ているとのこと。全ての職業に従事する人の比率をブミプトラ、中国系、インド系の順に五対四対一にしよう。農業でも工業でも商業でも。個々の企業の内部の人種比率も、管理層の比率も何もかも。ここまで来ると職業の自由まで奪うことになってくるし、能力の問題も何処かへ行ってしまうから、少々行き過ぎではないかと思えます。教育にしても、学生数の比率を平等にしよう、と言う事でブミプトラには門が広く開けられています。大学入試の合格ラインが人種によって異なり、ブミプトラは成績が悪くても大学に行けるのです。もともと平均的には中国系、インド系の方が成績が良いとの事ですが、一流大学のトップはブミプトラが占めているそうですから、マレー系が全部悪いと言う訳でもないようです。

ということ、この国の進む方向はハッキリしていて、行き着く姿は平等の精神と言うことですが、今の時点を取ってみると、当然のことながら中国系・インド系に対する差別待遇がひどすぎると言うことで、色々なことで苦情が出ているようです。現に今回訪ねた客の内部もこの抗争でゴタゴタしていましたし、日系企業の中でも摩擦が起きて

いるとのこと。中国系の人に言わせると、こんな不自然なことをするから、中国系は不満を持つし、ブミプトラはますます努力しなくなる、と不満タラタラ。人種問題と言うのは単一民族の日本人にはあまりピンと来ない問題ですが、アメリカもマイノリティ優遇という不自然な形で解決しようとしているし、どうやら世界的な問題のようです。この国では中国人にしてもインド人にしても東洋人ですから、不公平な扱いをされたから、と言ってすぐに過激な動きに走ると言うことはないかも知れませんが、ベイルートの回教徒とクリスチャン、カナダの英系とフランス系、アイルランドのカソリックとプロテスタント等の間の抗争と同じような争いが起こる芽を持っている国ではないか、と思つたことでした。

(昭和五十四年三月二十六日)

## 台湾

台湾を手始めに、香港、マレーシア、シンガポールへの

出張の記録だが、台湾の紀行文が他にないので、ここに掲載する。

### 久し振りの台湾

五月六日発で台湾へ行き、ホンコン、クアラルンプール、シンガポールを廻って丁度一週間、シンガポールからの夜行便で五月十三日早朝帰って来ました。今回は、お偉いさんを引っ張り出しての駆け足旅行でしたので、あまり自由が利かず、ゆっくり出来ない、と言う出張でした。一ヶ所の滞在が短いと、どうしても連日夜の部、と言うことになります。特に、台湾は中国と並んで乾杯の国、疲れます。

台湾は四十一年、ホンコンにいた頃二度行ったきりで、十八年振りでした。あの頃の台北はまだまだ田舎で、道がやたらとホコリっぽかったこと、建物がチャチだったことが記憶に残っています。それが今度行ってみると広い立派な飛行場から街までは、これ

も立派なハイウエイが出来ていて、街なかも少なくとも中心街は完全に舗装された道路に立派な建物。ホテルも格段に立派でした。もっともホテルの方は、昔も良いのがあったのだそうで、十八年前の若造と今とでは少し違ったところに泊めてくれた、と云うことだったみたいです。中正記念堂と言って、街の真ん中に広い場所を取って、蒋介石總統の記念公園が造られていました。ワシントンにあるリンカーン・メモリアルを大袈裟にしたみたいなもの。記念堂の中には總統の大きな坐像があり、周囲の壁は名言集で飾られています。故宮博物館はシーズンが悪かったのか、前に見たときの方が立派なものが展示されていたように思います。

台湾で目立つことは、海運業の元気なこと。海運不況については巷で言われているし、私も時々泣いているように、今や世界の海運業は危機に瀕しています。コンテナ船に関する限り一部の台湾船主は元気が良いのです。行ってみると、安い労働力と少ない船員で船を動かしています。良く働くシステムを作り、沈滞一色の海運界で大張り切りなのです。船腹を増やし安い運賃を出して、言ってみれば世界中のコンテナ市場を大

混乱に陥れているのです。迷惑がっている人が多いのですが、見方によっては中々立派なことだと思えます。

ホンコンでは何と云つても一九九七年問題が話題の中心になります。香港は一八九八年、阿片戦争の結果の南京条約で、英国が中国（当時の清）から九十九年間借用したところになっていますが、この返還期限が、十三年後の一九九七年に来るのです。香港は所謂香港島と九竜半島南端とその奥の新界（ニュー・テリトリー）と呼ばれる地域から成っており、面積では新界の部分が九〇%を占めています。正確に言えば、島と九竜部分は永久割譲を受けていて、一九九七年に返還期限が来るのは、この新界地域だけなのですが、人口的には島と九竜に集中しているものの、何せ飛行場は新界にあるし、工場も貯水池もこの地域にあると言う訳で、この新界を返してしまつたら、香港の経済活動は成り立たないのです。で、どういう形で返還されるか、が問題になるわけで、一九八二年九月、サッチャー首相自ら訪中して第一回の打ち合わせを行い、その後、中英両国間で香港の将来についての定期的な会議が持たれているとのことです。今や一〇回以上の

会議が開催され、この秋には「香港の将来に対してのガイドライン」なるものが出されることになっていきます。

新聞でも報道されている通り、一九九七年には、この永久割譲の部分を含め、今の香港がソックリ中国に返されるということはハッキリしていて、返還の後どんな形で統治されるのか、が議論の中心のようです。中国は外貨収入の六〇%以上を香港経由で得ていると言う現実から、金の卵たる香港の経済活動を阻害するようなことは出来ませんから、何とか今の繁栄状態が続けられるような工夫がなされる筈で、現に、少なくとも五〇年間は今のやり方を変えない、などと言っています。やはり経済を握っている連中に見れば、政治が変われば居心地が悪くなるのが目に見えています。このことあるを予想して、心ある人、というより金持ち連中は、もうずい分昔から、カナダやアメリカといった安全なところに財産を移しています。私が前にいたときですらこんな動きはありました。もっとも当時は中国が文化大革命、紅衛兵で騒いでいた直後でしたから、政治不安からこんな動きが出ていたのかも知れませんが、どうかすると家族も外国に

移してしまつて、亭主だけが着の身着のままの身軽な単身赴任で香港で働いている、と言つ人が少くないのです。

香港で海運業が栄えたというのも、土地柄、貿易なしではやつて行けないこと、税金が安くて商売がし易いこともさることながら、財産である船がいつでも海外逃避出来ると言つのが一番の理由だと言われます。

先頃話題になつたのは、一〇〇年前から香港の経済の中心の一つだつた英系企業、ジヤードン・マディソンがバミューダに逃げるとの情報でした。いよいよ組織的香港離れが始まつたのか、と一寸した騒ぎになつたのですが、その後、これは株価操作だつた、と言つ話も出てきて、今は治まっています。あそこの人たちが本当に何を考へているのか中々判りません。今回行つた際もアメリカ西岸に移住する人のサヨナラ・パーティーみたいなものに出くわして出席しましたし、顧客を訪問してトップに会つても、北京詣でをして帰つたばかりだとか、社長が現在行つているとかで心なしが北京への傾斜が窺えました。とは言え建設ブームは相変わらずで、地下鉄はドンドン延長しているし、高い

ビルが続々建設されていて、後十三年で償却が出来るものなのか、その先もこのままや  
って行けるとの見通しが立っているのか、外からでは理解することが出来ません。

次のクアラルンプールが今回のメインイベントでした。一年程前、マレーシア通いし  
てまとめたLNG船の修繕契約がいよいよ実施の段階に入るので、お偉いさんを引つ張  
り出して挨拶に行ったと言う訳。一寸したパーティをやり、進行役、挨拶原稿を作り、  
と裏方役、言ってみれば猿回しの役を務めました。そう言えば何だかこのところ、セレ  
モニーづいています。新設備の披露パーティ、会社関係の先輩方を集めての会、工事完  
成の引渡し式等等、立场上、司会役をやらされます。最初はお客さまに失礼があつて  
は、とか、間違いがあつては、とか、準備に気が使いましたが、最近は殆どアドリブ。  
これで中々評判が良いのです。あまり自分を表に出さず、行事自体とか、挨拶をする人  
を引き立てようとする姿勢が良いでしょう。(何せ控え目で内気な人ですから)  
と言うことで、第一船がこの六月十日に入ってきました。余程下手をしない限り、こ

れから二〇年間、世界最大級のLNG船五隻が入れ替わり立ち代り横浜の造船所に入ります。お守も大変ですが、この辺は営業冥利ですね。何せ船が出来る前、ロンドンにいる頃から動き始め、種を播き、長い間掛かって契約まで漕ぎ付けたのですから。現在、横浜にある船主さんの事務所にしたって、何もないガランドウの部屋から駐在の監督官と協力しながら一緒に作り上げてきた過程を知っている私から見ると、よくもここまで積み上げてきたものだ、と言う感慨を禁じえないわけです。

シンガポールは現地工場に出ている人たを激励に行ったようなもの。土曜日一日でしたので、午前中はお偉いさんに工場に行つて貰い、こちらは客周りをしましたが、午後は止せば良いのに、炎天下のゴルフ。あそこの芝は寝ていて土に貼り付いている感じで、ボールが浮いていません。その上ノータッチですから、余程シツカリ打たないと上手く飛んでくれません。疲れ、暑さ、芝、借りクラブと悪条件を弁解にしても五一・五二で不本意な成績でした。借りクラブの方はこのところ慣れてきていて、私程度の実力

だと何を使っても変わりはない、等と言っていたのですが、今回はパツとしませんでした。

で、その晩発つて夜行便で帰ってきました。日曜日が組合主催の運動会で、どうしても一寸顔を出す必要がある、と言う訳で、翌日曜日の朝六時十分成田着後、会社のグラウンドに直行して九時半の開会に間に合い、昼過ぎまで付き合いました。昨年はリレーか何かに関わり張られなくてグラウンド半周位走ったのですが、今回は流石にご勘弁願つて、応援だけにしました。

(昭和五十九年七月八日)

## インド

### タージ・マハール(インド紀行 一)

インドへ行くのは厭だ、イヤダ、と言いつつ出かけて行った唯一の楽しみはタージ・

マハールでした。あの国へ行ったらあれを見よう、という名所・旧跡が世界中に幾つもありますが、これもその一つ。東南アジアではあとカンボジアのアンコールワット位かしら。

今回は、ボンベイとニューデリーに用事がありましたので、月曜日にニューデリーの打合せをセツトしました。タージ・マハールはニューデリーの近くのアグラと言う町にあるのです。調べると、ニューデリーから丸々一日のツアーになると言います。週末にニューデリー入りして、日曜日を一日利用して行って来ようと言う魂胆です。仕事の成り行きで、途中でこの計画が危なっかしくなる局面がありました。何とか持ち堪えて同行のお偉いさんから離れて、予定通り土曜日夜ニューデリー入りに成功しました。早速、翌日早朝発のバス・ツアーを申し込み、翌日は七時前、ボロガタではありませんが、一応エアコン付バスに乗り込みました。調子を崩して心配していたお腹の具合も、この日奇跡的に治って不安はありません。

ボンベイはゴミゴミして汚くて、いかにもインドと言う感じの街ですが、ニューデリ

ーは新しく作られた街だけあって、道も広く殆んどが並木道。緑の多いきれいな街。これがインドかしら、と思わされます。もっともセンターベルトのある片側三車線もあるうと言う立派な並木道を、自転車や人力車、小型三輪（ミゼットを改造したみたいなもの）のタクシー、はては馬車なんかが雑然と走っています。車がこれらをすり抜けるようにして走っているのがインド的かどうか。ニューデリーとデリーは別々の街かと思つたら、隣接している、と言つより、一つの街の中にオールド・デリーとニュー・デリーがあるのです。このきれいなニュー・デリーから一歩オールド・デリーに入るとこれまた大変。道は細くてゴチャゴチャ。建物は汚い、人はウジャウジャ、乞食はウヨウヨという「インドー」と言うイメージに一転してしまいます。

このデリーの街を抜けて南へ二〇〇キロ、四時間ほどでアグラまで行くのです。途中は一面の畑。ところどころに集落があります。人間が住めるとは思えない汚い小屋とハダシで汚れ放題の人たちを横目に見ながらバスはひた走ります。片側一車線ギリギリの道で、クラクションで前に行く汚いトラックを脇によけさせておいて対向車線に入り、

道端を走る自転車や馬車をかすめるように豪快に追い抜いて行きます。私にはとても出来ない運転です。

タージ・マハールと言うのは、十七世紀から十八世紀の前半にかけて、略々全インドを制したムガル王国の三代目の王様、シャー・ジャハンのお妃ムム・ターズのお墓です。三十九歳の若さで死ぬ時、私が死んだら世界で一番美しい墓を作って下さい、というお妃の遺言を守って、二十二年の歳月と当時のお金で六千万ルピーをかけて作つたと言います。ルピーは現在の価値で十二〜三円ですが、当時はどう言うことだったのか。やはりこうした大事業と言うのは、皆さまのご意見を伺って物事を進めて行く民主主義の世の中では出来ないこと。人様の都合なんか考えず、独裁者が民衆から税を絞り上げ、奴隷をムチで叩いて働かせないと出来ないことなのです。もっともこの王様は、お妃の墓を作った後、自分の墓を作りかけたところで、自分の三番目の息子に王位を奪われ、七年間牢屋に入れられた後、死んだのだそうです。死んだ後、このお妃の墓に入れて貰ったものですから、建物の中央に、小ぶりのかわいいお妃の柩があり、その横に大きな

王様の枢が置いてあるという、誠に妙な格好の配置が出来上がっています。また、このムム・ターズは、先代の王様のお妃、ヌール・ジャハンの姪との事ですが、このヌール・ジャハンというお妃は赤子の時、一旦捨てられたのに、偶然又親の手に戻り、あらためて育てたらこれが絶世の美人で、この王様に見初められて王妃になったと言います。インドの歴史には全く疎くて、どこがどうなっているのか判りませんが、中々ロマンティックな話が積み重なっているような気がします。

で、このタージ・マハール。写真では皆さんもご覧になったことがあると思いますが、筆舌に尽くし難い、としか説明が出来ません。丸ビルの倍の大きさと言うのにバランスが良いせいか、その大きさを感じさせません。真つ白な大理石の、優雅な、いかにも女性的な軟らかい丸みを帯びたドームが誠に印象的です。また、この大理石には一つ一つ世界の各地から持って来たと言う様々の色の石できれいに模様が埋め込んであります。王様が最愛のお妃を偲んで、金に糸目をつけず一つ一つ丹精をこめて作り上げたお墓、という感じが全体に滲み出っていて、何時まで見ていても飽きない思いでした。

あと、この王様が作り、自分が幽閉されることになったお城なんかを見ましたが、これは全くの付け足り。アグラはタージ・マハールだけの街です。帰りの四時間が実に長くてつらかったけれど、これだけの苦勞をして行って充分価値のある一日でした。

## 発電バージ（インド紀行 二）

インドは聞きしに勝る貧しい国でした。ボンベイ空港に降り、町に行く間に通る道の両側の小屋。これが人間の住む家か、と思うほど貧しくて汚い。八月は丁度モンスーンの時期で一日中雨が降り、時には酷く降るのですが、あれで雨露がしのげるのか疑問です。それにボロをまとった人々、ハダシで歩く子供達。これで雨季が終ると人々が夜、外に出て来て、軒下と言わず道路と言わず寝るのだそうです。人間と言うより動物と言った感じの生きものです。こうして貧しい生活をして体力も弱っていますから、一寸した温度の変化に耐えられず、一寸暑くなったり、温度が下がったりするとバタバタと死ぬのだそうです。そしてその汚さはどうでしょう。人間のいない場所のきれいなこと。イ

インド人のいないインドは美しい、という言葉がありますが、全くだ、と思います。自然に生育している猿のきれいなこと。これが動物園に入れるとあんなに汚くなるのです。地球を汚しているのは人間なのではないか、と言つ気がします。工場廃棄物、核廃棄物等、人が作り出す汚染もあります、人間そのものが汚い生き物なのではないか、と思つのです。埃と脂で固まったような髪。垢と埃で黒ずんだ顔・手足。それと人間を汚くするのは衣類ではないか。何かを身に付けねばならないから不潔になる。何も身に付けなかつたら、まどつているものの汚さからは逃れることが出来ると思つただけれど・・・と人間に対する評価が大分落ちました。

乞食の多いこと。ハダシでボ口をまとつた子供達や赤ん坊を抱いた若い母親が哀し気に手を出して付いて来ます。こうした人たちの中に、手・足のない人が目に付くので、交通事故でも多いのか、と聞いてみると、他人の同情を引いて貰いが多くなるように、親が子供の手や足を切り落したりすると言います。これはいくら何でもとても信じられる話ではありませんが、こんな話がまことしやかに話題になるほど貧しいということ

になるのでしょうか。

インフラストラクチュアの遅れも大変なもの。インドでは初歩インフラである交通、通信、エネルギー（電気）といったところがまだまだ遅れています。英国が統治時代に何もしなかったからだ、という人もいますが、英国の統治は一九五〇年までの約二〇〇年。それ以降は曲がりなりにも自分の国だったので、これはやはり政治を含めてインド自身のせい、と言うべきでしょう。七億五千万とも八億とも言われる人口のせいなのか、日本の九倍に及ぶと言う広大な国土のせいなのか、隠然と残るカースト制の障害のせいなのか、多種多様の宗教・言語のせいなのか、何が原因なのかは判りません。政治の面では英国からの独立を勝ち取り、インドの誇りを大切に、ステーツマンとして立派なネルーヤガンジー女史はいましたが、民衆の暮らしを良くする政治屋の仕事は不得手だったのかも知れません。

交通については鉄道の軌道の中が三種類あつて、全国に統一した運送システムが出来ないのだそうです。トラック運送は道が悪い上に、州境や町境ではまだ税金を取る風習

が残っていてそのチェックに時間が掛かるものですから、例えばボンベイ・デリー間二〇〇〇キロの輸送に二週間以上もかかるとか。これではスムーズな輸送網は出来ません。電信・電話は大都市間は何とか繋がっているものの誠に貧弱。出張中にも不通・不明瞭・故障にはずい分泣かされました。

遅れているのが電気。火力主体、水力が従、と言うことらしいのですが、水力はこの数年、水不足で頼りにならないのだそうです。火力も元々大分足りないのです、政府も力を入れていますが、国内では政府系の重工業メーカーの独占状態にあり、国内産業保護の尻馬に乗って国際競争のときは超安値を出して全部さらってしまい、国内では競合がないので高く売りつける。受注してしまえば納期は守らない、出来は悪い、と言う訳で手が付けられない状態で、陸上の発電所の整備が遅れているのです。加えて、あれだけ広いのだから土地の確保は容易だろうと思つたら、土地が完全に私有化している上、所有権が複雑で所有権の移転手続きに五年も六年もかかるとか。日本の商社の人々が、発電所一つ作るのに十年もかかる、と言うので、そんな馬鹿な、と思つていたら、今度会

ったエネルギー大臣も、陸上だと四年も五年もかかる、と言っていましたから、満更才一バーな話ではないようです。

で、今回私が出かけて行ったのは、電気を海から供給してあげましょう、という話です。中古の船や台船の上に発電所一式を積んで持って行き、岸壁に着けたり、沖に停泊させて、ここから陸に向けて電気を送ろう、と言つ訳です。こうすれば土地問題からも独占企業の話からも逃げられ、おまけにどんなに長く見ても二年もあれば送電開始可能と言つ訳で、八方丸く収まりそうです。あるツテを求めて会ったエネルギー大臣も、大乗り気になってくれました。でも、とにかくお金のない国。金がないくせにプライドは高くて、物乞いの形で借款はしたくない、という態度。日本の官僚の、貸してやるんだからそれを態度で示せ、というやり方と合わなくて、これまで日本のインド向け経済援助は伸びていません。でも、このところ日本政府も経済援助を急速に伸ばすことを全世界に約束しています。インドへの援助も伸びることが予想されますから、こうした動きに乗ってこれから仕組んでいくことになります。時間は掛かりそうですが。

### インドでの買い物（インド紀行 三）

「商人」と言つと第一に出てくるのはユダヤ人、と相場が決まっていますが、モノの本によると（本によつて順番が異なりますが）ユダヤ人よりウワテなのがアラブ人で、その上を行くのがインド人だと言います。ですから、インドで買い物をする時は、負けさせる、値段の交渉はゲームだ、半分にはさせられる、と言われます。日本人は、というか、特に私は、値切るのが不得手。いつも商売で値切られて悲しい目に遭つているので、値切られる人のつらい気持が判つてしまつて、あまり強いことが言えないのか、生まれつき弱気なのか。

インドでの最初の買い物は、ボンベイで朝ホテルを出て近くのインド門まで散歩したときのこと。ホテルを出たときから汚い男が付いて来ます。最初は、観光案内をしてやるう、こちらへ行つたら何がある、とか何とか言つので、ノー、ノーと言いなから無視して歩いていたら、その内に絵葉書を持ち出しました。十枚セットで二〇ルピーと言います。ここで絵葉書を買う積りはなかつたので、いらぬ、いらぬ、と言つて歩き続

けていると、それが十五ルピーになり、一〇ルピーになるのです。いくらなら買うか、との問い合わせに、要らない、と言いつけたのが良かったのかも知れません。一〇ルピーと言つと一〇〇円。これで一〇枚の絵葉書が手に入るなら悪くありません。どうせどこかで記念に買うのだし、という気になり、中身はどんなのかな、と見る気になります。一寸見たら最後、ここを先途、と攻撃がかかりましたが、もう一押しして結局八ルピーで買うことになりました。インドの紙ですから良質の写真ではありませんがマアマア。一枚八円の絵葉書は買い物でした。

次がタージ・マハール。見物を終えて出て来るとクジャクの羽根のウチワやら絵葉書やらを持った男達がワンサカ寄つて来ます。お尻のポケットの財布に注意しながら、この人達を掻き分けて帰りのバスに向かうのですが、中でとりわけ熱心な若い男が執拗に付きまとして来ました。細い針金製で、操作によって様々に形の変わる玩具を片手で器用に操りながら、四個一〇〇ルピーでどうだ、と言つのです。イラナイ、イラナイを続けてバスの近くまで来ると、今度は小さな本を取り出しました。カジユラホと言つて例

の工口チックな石像の写真集。その方面が嫌いではない私、チラリと本に目をやったのが運の尽き、何とかして品物を手に取らせようとします。一度手に取ってしまうと今度は返させないで押し付けにかかって来ます。バスの乗り口に立ち塞がって乗せてくれず、買え、買え、と迫って来るのです。値段はドンドン下がって、結局この針金の玩具四つに小さなカジュラホの本をつけて二〇ルピーで買うことになりました。

考えてみると、ボンベイでもタージ・マハールでも全く買う気のないものを買わされています。この針金の玩具なんて、四つも買っちゃってどうしよう、って途方に暮れました。もっとも一個二十五円位のものですから惜しい気はしませんが。何かの本で、人が要らないというものを売りつけるのが本当の商人だ、と書いてあるのを読んだことがあります。人が欲しいものを売っている間はまだまだ本物ではない、とのこと。この辺の汚い、裸足の男達は実は本当の商人の集まりなのかも知れません。

次はシカンドラというこれも貴族の墓に行った時のこと。建物の写真を撮ろう、と良いアングルを探して、グループから離れて一人で歩いていたら、これは少し小ザッパリ

した大きな男が近付いてきました。自分は銀細工の職人だが、銀製のネックレスを安く分けてあげるから買わないか、と言つのです。銀色の象の形のペンダントに鎖をつけて三十五ルピーだ、と言います。四〇〇円足らずで銀もないものだ、と思つたし、チラリと見ると出来も手製でなく铸件なので、要らないよ、と言つてドンドン歩いて行つて写真を撮り、バスへ戻ろうとしたら、又シッコイ売込みが始まりました。ヒンズー教の神様、シバの女王の飾りも出て来ます。こちらの方は少し出来が良いみたいだな、と目の隅に捕らえました。これが二〇になり、十五になったとき、幾らなら買つか、と言つので、ウツカリ、一〇なら買つても良い、と言つたら十二で一寸ねばつた後、一〇まで下がってきました。あまり簡単なので、二個で一〇だ、と言つたら、流石に「一個で一〇ルピーは、お前が言つた値段ではないか」と誠に理路整然とした反論がありました。それでは要らない、と強引にバスに乗ろうとしたら、二個で良い、と言つ事になり商談成立。こうなると本当の値段がどこにあるのか判らなくなります。バスの中で隣に座つたインド人の可愛い女の子（WHOに勤めている親父さんとジュネーブに在住し、高等

学校に行っている、と言っていました(に、半分自慢気に、これ幾らで買ったと思う、と聞いてみたら、五ルピー位のものでしよう、とスバリ当てられてガツカリ。一目見たら値段が判るようにならないとインドで買い物をする資格はないようです。

自分の意思で値切ったのが一件。私は初めての都市に行くと、その町のマークの付いたスプーンを買うのがささやかな趣味なのですが、ホテルで発見したので買うことになりました。一本四〇ルピー。これだけではつまらないので、プレスレットの安いのを見つけておみやげ用に幾つか選びました。締めて一六〇ルピー。これを値切ろうと言うのです。ホテルの店はワン・プライスだ、一五〇以下には下がらない、と言うのを、一〇〇ルピーだ、と言い張り、オドシ、すかし、他のものも合わせて、どうするとかこうするとか言っている内に、根負けしたのか言値の一〇〇になりました。相手は、負けた、という顔をしているけど前の例がありますから本当に勝ったのか、やはりシテやられたのか判りません。

でも、本物の商人から物を買ったら、これはやはり相手の思惑の範囲の中で買わされ

たのであって、結局は相手が勝つたのだ、と考えた方が良いのではないか知らん、と悟りを開いたことでした。

#### 拝火教徒の話（インド紀行 四）

八月二十五日はボンベイの三菱商事の事務所は休みだ、と言います。曆にも出ていないし、お客の事務所では休まないところもあるし、同じ三菱商事でもニューデリーは休まない、という具合で何か曖昧なのです。現地の人に何の休みだか聞いてみるのですが、適確な返事が返って来ません。客のところへ行つたとき、この休みの由来を尋ねてみたら、面白い話をしてくれました。その後、調べてみたことも合わせて紹介します。

インドにはパーシーと呼ばれる一族がいます。紀元前六〇〇年頃、イランに北部にツアラトウストラによって開かれたゾロアスター教を信仰する人々がいました。光明の神アフラ・マツダを神として崇め、拝火教徒と呼ばれます。モスレム教に追われてインドとパキスタンに流れて来てこの地に住み着いた人々です。この一族の人口は全部で十五

万人ほどで、殆んどがボンベイの近辺に住んでいるのだそうです。こう言う極く少数民族なのですが、どういふ訳かお金持ちが多く、経済界のトップに座っている人が多いとのこと。大財閥のタワーなんかこの一族が押さえているとか。顔つきも欧州系の立派な顔をしており、色も白くて一目見てパーシーだ、ということが判るのだそうで、インド人からは一種独特の尊敬の目で見られているようです。英国の統治の時代には真つ先に協力して力を蓄えた、とも言われます。かなり排他的な人たちで同族意識が強く、結婚も同族の中でないと許されないので。

ボンベイの市内にハンギング・ガーデンという公園があります。いわゆる吊り公園。空中に浮いて吊られた状態になっているので、ハンギングと呼ばれている、と言いますが、もう一つ理由がハッキリしません。行ってみたら判るかと思つて、一寸寄つて見ましたが、一寸高い丘の上にあるというだけで別に何の変哲もない公園でした。この横にタワー・オブ・サイレンス（沈黙の塔）と言われるところがありますが、ここは中々人に見せないところ。外からは見られても絶対に中には入れてくれないとのこと。これは

パーシーのお墓なのです。この人たちは未だに鳥葬を営みます。人が死ぬと遺体をこの沈黙の塔に持って来て、置いて行くのだそうです。すると秃鷹が出て来て、肉をむしって食べてしまいます。骨だけが残りますが、骨は雨風に晒されて乾いてしまい、その内に塔の下にある孔にカラカラと音を立てて流されて行ってしまふ、と言います。こう言う宗教上の秘密の場所なので、関係者以外は完全に立ち入り禁止。写真を撮ることも勿論禁じられていますが、最近どこかの雑誌記者が、空からここを撮影して写真集にして話題になっています。この写真、見るだけ見せて貰いましたが、白い装束の何人かが、死体と思しきモノを抱えて、この塔（と言っても低い円柱みたいなものが入りつつかあるところ）を歩いていきます。塔の中央には暗い孔が口を開けていて、いかにもオゾマシイ雰囲気。周りには、もう秃鷹が何羽も待つている、と言う怖い、暗い写真でした。

未だにこんな埋葬の方法が許されている、と言うのが不思議な気がします。こんな変な前近代的な風習を持つ一族が存在し、それが社会の上流階級（インドのカースト制の中には入っていません）に座っていると言うこと自体、よく判らない社会だし、イン

ドと言う国にはまだ未開の部分が残っていると云うことなのかな、と思います。

八月二十五日はこのパーシーの新年元旦とのこと。最初はこの一族がトップを占めている会社だけが休日だったそうですが、これらの会社と付き合いのある会社も休みになると云う訳で、段々ボンベイ全体に休みが広がって来ている、との事です。休みにはならない会社も従業員の間にパーシーがいるとその人たちには休みが認められていると云う具合。

でも、たった十五万人ほどの人たちが人口七〇〇万とも八〇〇万とも言われるボンベイの殆どどの企業を休みにし、経済活動に大きな影響を与えている現実を目の当たりに出来たのは面白い経験でした。

(昭和六十二年十一月二十一日)

## エジプト

### エジプトの話

昨年七月、当社の広島造船所で建造したエジプトの浚渫船が、スエズ運河で浚渫作業中に他の船にぶつかって沈没しました。遠いところで起こった出来事だし、とてもこちらの方の仕事にはなるまい、と思いつながら様子だけは追って来ましたが、十二月には引き揚げ、修理して又使おう、という考えになったらしく、持ち主のスエズ運河公社から、協力をして欲しい、との呼び掛けがありました。造船所の方は、是非やらせてくれ、そのため様子を見に行つて来てくれ、と圧力を掛けて来ます。エジプトが金のない国であることは判っていたし、並行して続けられていた新造船の商談の進み具合を見るにつけても、やり難い相手だ、ということが良く判るので、どうにも出かけて行く気がせず、渋りに渋っていたのですが、とうとう重い腰をあげさせられ、四月九日発で丁度一週間、初めてエジプトの土を踏んで見ました。

#### 一・蜜にむらがる蟻

エジプトと言う国、歴史的には大変な国ですが、今は貧しい国です。スエズ運河の通

行料と、過去の遺産に頼る観光と、棉と米を中心とする農業が頼りで経済的には破産寸前。ナセル、サダトと続いた大政治家の、軍事力に裏付けられた外交テクニクが辛うじて国を支えて来ている、と言っても良いのではないだろうか。ナセルの時代にはアメリカとソ連の両極を見事に手玉に取って、双方からの後押しのもとに文字通りアラブのリーダーとして君臨したことは記憶に新しいし、全世紀の外交史の殆んどトップを飾ると思われるイスラエルとの和平交渉は、アメリカを巻き込んだサダト一流の外交技術なのでしよう。エジプトは国際収支の大幅な赤字に苦しんでいて、慢性的に借金をしな

いと国の経済が成り立たず、言わば自転車操業の状態です。そのためアメリカの銀行(アメリカ政府の後押しで)や近隣の産油国から大きな借金をしています。出費の大きなものが膨大な軍事費と四回に亘る中東戦争だったわけで、今回のイスラエルとの和平交渉も軍事費削減の意味から経済的には大きな意味があるのですが、政治的な面から見ると逆の動きが出て来ます。エジプトとイスラエルが友好関係に入ると、少なくとも当分の間はエジプトとアラブ産油国との関係は悪化する筈で、この間のエジプト経済をどう支

えるか、が大きな問題だった筈です。ですからこの和平交渉の最後の段階でのもたつきは、アメリカから出来るだけ大きな協力と金を引き出すためにベギンとサダトが打った芝居だ、という見方も出来るようです。事実、和平直後、アラブ外相・経済相会議はエジプトとの政治・経済断交と石油供給禁止を打ち出しました。アメリカは一〇〇億ドルを超える大きな経済協力を約束したと言われていますし、アメリカからの圧力で日本と西ドイツからも、協力の手が差し伸べられることになっているそうです。サダトは和平成立後、早速ボンを訪問してこの話をして来ていますし、近々来日も予定されています。アメリカ政府から日本政府に対し既にこの種の圧力が掛かっているということを感じました。

日本や西独の場合、ただ単に金を貸すと言うのではなく、「国として長期のローンを認めて上げるから、その金で私の国から必要なものを買いなさい」という紐付きのものになります。日本の場合、いわゆる円クレレというのがこれで、この円クレレの枠の使用内容と言うか振り分け方法が決まれば、売る側は実質的には日本政府から支払いを受けるわ

けですから、金の回収を心配しないで商売が出来る訳で、色々な業種の企業がエジプトに出て行つては、自社の製品を買わせることで経済発展に協力しよう、と働きかけることになります。つまりエジプト側に、自国の経済発展のためのプロジェクトを組むに当つて、自社の製品を含ませて貰い、このプロジェクトがエジプトにとって必要であることを日本政府に申し入れさせると共に、日本側では色々な形で後押しをして円クレの枠取りに協力します。このプロジェクトが実施されることになれば、自動的に自社の製品が、金の取りっぱぐれの心配なしに売れる、という寸法です。

今度の修理船のケースも小さな金額ではありませんから、金の裏づけがなくてはとも引き受けられるものではありません。キャンプデービッドの劇的会談の後の動きを見ていると、この分なら相当大きな円クレの枠が出来そうだと、この見通しが出来ましたし、上手くするとこの修理のプロジェクトにも金が回ってくるかも知れない、という見方も出てきたわけで、これが私に重い腰を上げさせる一つの大きな力になりました。言ってみれば、今回の出張は円クレの蜜に群がる蟻の小さな一匹に行つた、と言つこと

になります。

## 二・歴史

私の知っているエジプトと言うのは、四大文明発祥の地、母なるナイル河、ピラミッド・スフィンクスを作ったファラオ達、クレオパトラのアレクサンドリア、その後はズット飛んでレセツプスのスエズ運河、現代へ来てアフリカの星ナセル位のものでした。出かけるに当って少し歴史を思い出してみると、この国の歴史は被侵略者の歴史と言うことが言えるようです。

紀元前三〇〇〇年とか四〇〇〇年に始まる古代エジプトの文明は大したもので、ピラミッドなんか、あの時代にどうやってあんなものを作ることが出来たのか、今もって謎が解けないそうです。遠くから見るときれいな三角形に見えますが、近付いてみると組み上げてある一つ一つの石は大きなもので、高さが背丈くらいもあります。クレーンもないのにあんな大きな石をどうやって切り出して、どうやって運んで、どんな方法であ

れだけ正確に組み上げたのか見当もつきません。実際、石の面はまっ平で、石の合わせ目なんかカミソリの刃も入らないほどピッチリ合っています。カイロのエジプト博物館へ行くと、有名なツタンカーメンを始めとするファラオ達の遺品が見られますが、金づくめの見事な細工で、装飾品なんかそのまま今の時代に持ってきて通用しそうです。これらは大英博物館にも同じようなものがあつたので（ギリシャへ行ったときも同じことを感じましたが、英国と言う国は良くもマアあれだけのものを奪って行ったものだ、と感心しました）目新しくはありませんでしたが、五〇〇〇年もの昔にあれだけのものを作り出す文明があつたなんて信じられない思いました。その昔の文明の見事さと現在の貧しさがどうしても結びつかないのですが、その後の歴史を見ると確かに侵略の連続で、古代エジプト人の血なんか何処かへ行つてしまっているみたいです。

ファラオの時代の後はアッシリアとかペルシャに征服されたり、取り返したりしていますが、紀元前三世紀ごろにはマケドニアからアレキサンダー大王が遠征して来ています。アレキサンドリアの町はこのとき作られました。歴史の本に出てくる有名なアレキ

サンドリアの大灯台は、今はもうないようですが、この歴史の街には一度行ってみてみたいと思っていました。私の泊まっていたポートサイドからは地図で見ると距離的には大したことではないのですが、ナイル川の三角洲には支流がやたらとあつて、直接行く道がなくて意外に遠いので今回はとても行く時間がありませんでした。アレキサンダーの残したプトレマイオス將軍が王様になつて、この王朝が三〇〇年ほど続いた後、キリストの生れる一寸前にローマからシーザーがやってきてプトレマイオス王朝が滅び、古代エジプトはこのとき消滅したと言われます。このときに女王だったクレオパトラがローマに連れて行かれ、最初はシーザーの、次いでアントニウスの妃となり、最後は毒蛇で自殺したくらいの話はこの地方の歴史に詳しくない我々も良く知っているとこです。

その後はイスラムが入ってきたり、アフリカ南部の蛮人に征服されたり、トルコが入つて来たりしています。十八世紀にナポレオンが侵略。この間にレセツプスがスエズ運河を作っています。今でこそ運河沿いの淡水運河のお蔭で少しは緑がありますが、百年前のその頃は砂又砂の砂漠だったに違いありません。まず、ナイル河の水を引いて淡水

の小型の運河を掘り飲料水と交通路を確保した上で本物の運河を掘って行ったのと。十年掛けて作られています、この種の計画に対するヨーロッパ人の計画の壮さと根気の良さには驚かされるのが沢山あります。何十年も何百年もかけて作られた教会は良い例です、最近のパリの新都心の計画の大きさについては何時だったか書きました。そういえば大英博物館にあるロゼッタ・ストーンを発見したのもナポレオンの軍隊だった筈です。

次いで英国によるエジプト支配。スエズ運河は一九五六年まで約七〇年間英国の支配下にありました。第一次大戦後のエジプト独立後も、英国の支配の下で王制が敷かれていましたが、ナセルが出てきてファルーク王を追い出し、共和制を敷いて現在に至っています。OPECが自分の持つ石油の力の強さを認識するまでは、エジプトはアラブのリーダーだったと言えるでしょう。ナイル河沿いを除いては砂漠ばかりの国で、人が住める土地は全国の五%くらいしかないと言われ、資源らしい資源もないエジプトがアラブの指導者たり得たのは、ナセルでありサダトの政治力とリーダーシップにあったと言

えるのではないでしょうか。

そのナセルとサダトの歴史はイスラエルとの戦争の歴史。この辺になると、我が故赤松要教授の総合弁証法の外部否定（だったと思いますが）が思い出されます。つまり外に大きな敵を作ることにより内を固める、と言う政治手法が意識的に取られていたのではないのでしょうか。カイロの街にもこの間の歴史を示す記念物が沢山あります。「十月六日通り」という通りがありますが、これは一九七三年、第四次中東戦争が始まった日でこれが戦勝記念日ということになっており、通りの名前になっています。「ラマダンの月の十日」と言う名前の新しい都市がカイロの郊外に建設されつつありますが、これも同じ一九七三年十月六日のこと。ラマダンというのは回教の断食の月のことで、この月の一ヶ月の間は陽のある間は食物はおろか水も口にしてはいけません。回教暦は月暦ですから年によってずれて来るわけですが、一九七三年はラマダン月の十日が西暦の十月六日に当たったのだそうです。一番嬉しかったのは、「七月二十六日」という名の橋と通りがあったことです。私の誕生日を祝ってくれている訳ではあるまい、と聞いて

みると、一九五六年の七月、ナセルがファルークを追い出した後、二十六日にスエズ運河を英国から取り戻したのだそうです。なお、橋は軍事機密地域ということで記念写真が撮れず残念でした。

イスラエルとの間に和平を結ぶに当って、サダトは、戦争がなくなれば国が豊かになる、と言う言い方で国民を引つ張つて来ているわけで、これがすぐに効果を現わさなかつた時、どう言う反応が出て来るか。およそ住居とは言えないようなひどいバラックに住み、それが一張羅の薄汚れたアラビア服を身にまとい、家畜と同じような生活をしている、砂にまみれた多くの貧しい人々を見て、これまでもつぱら外に向けられていた政治の力を如何に上手く内に向けられるか、この辺がエジプトの将来を決めるものになつて行くのではないか、と思つたことでした。

### 三・人々

こちらの人は貧しくても砂漠で生きて行くだけの生命力を持った人たちですから、汚

くてもいかにも強そうです。女の人は目鼻立ちがハッキリしてきてきれいですが、それより繁殖に必要な部分、つまり胸やお尻が実に立派でシッカリしていて、これなら何人子供を作っても壊れないな、という感じです。男は大きくて大抵馬鹿力の持ち主なんだそうで、機械類も加減して使うことを知らないので直ぐに壊してしまう、とのこと。それでも食糧事情、衛生事情が悪いので、平均寿命は短いのだそうです。この貧しい人たちには砂糖をお腹一杯食べるのが一生の夢とのこと、上流階級になっても、客に対して砂糖をタツプリ勧めるのが何よりもてなし、と考えている由。ですから客先で出されるコーヒーや紅茶の甘いこと。溶解度の限度一杯の砂糖が溶けている感じで、甘さで頭が痛くなる程です。最初の一杯でスッカリ懲りたので、次からはお茶を勧められたら、「シユワイア・スツカル（小さな砂糖）」と言うことにしました。コーヒーを砂糖抜きで飲む習慣のついている私は、砂糖は不要、と言わねばならず、すると「変な人」という顔をされます。余程貧乏に育って砂糖の美味しさを知らないのかしら、と思われているのかも知れませんが、少し良い暮らしをしている人たちは、大体例外なく肥満度の限界を超

えているように思われますが、これは砂糖の食べすぎではないかと思ひます。こちらの人はこれで命を縮め、貧しい人たちと同様に短命なのだそうです。

回教国ですから朝早くや夕方になると、町のそこそこにあるスピーカーからお祈りの声が朗々と流れ、回教国に来たんだな、ということを感じ出させてくれます。でもエジプトでの回教の戒律は大分ゆるやかなようで、酒は飲めるし（回教の人は飲まない筈ですが、ホテルにはチャンとバーがあつて、エジプト製ビールやワインが置いてあるし、酒屋もあります。サウジアラビアなんかへ行つたら旅行者でも酒が飲めないとか）女の人も黒いチャドを着ている人は少なく、大抵洋風の格好で街を歩いています。でも、やはり一生に一度はメッカへ行つて修業してハッジになるのが望みとの事です。ホテルで雇つた年寄りの運転手が、苦勞してハッジになつた人で、どこへ行つても「ハッジ・アリ」と呼ばれて尊敬されている様子が伺えました。

人件費が安いせいでしょう、何でも安いのです。こちらでも給料カットなんかで貧乏になつていたので、今回はオミヤゲなし、と宣言して出てきたのですが、店を冷やかす

といかにも安いので、ついつい手を出したくなります。言値で買っても安いのに、値切ればそれが半分位になるのですから。ラクダの皮のストールとか雪花石（アラバスタ）の花瓶とかアラベスク模様の飾り皿なんか買わされて来ました。

貧しい人が多いので「バクシーシ」には悩まされます。バクシーシと言つのは「喜捨」というような意味なんだそうですが、相当上流の人にあげる賄賂の類もバクシーシというようですから別に失礼なこともなく使えるようです。何をやってもバクシーシがついて回ります。ピラミッドを見物したとき（エジプトを離れる当日、昼の飛行機に乗るの

でホテルを朝早く出て、駆け足で見物したのですが）身体のかな案内人が、払ったバクシーシが少ない、と怒り出し、ピラミッドの中のお墓の出口のところに立ち塞がって出してくれないので、怖い思いをしました。もっともその時は出発直前で上手く金を使っていましたから（エジプトの通貨なんて持って出ても汚いばかりで紙屑同然ですから）財布がスツカラカンで追加を払おうにも金がない、と言つ事がかえって気が楽で、腕の下をかいくぐって逃げてきましたが……。

この国も長い間、植民地又は被征服地だったわけで、こうした国の人たちにはどこか共通した感覚があるように思えます。一面では保身術に長け、決して自分では責任を取らず、誰かに決定を委ねて責任から逃げよう逃げようとする態度。他方、その中で何かを掠め取ろうとするずるさとしたたかさ、といったものになるのでしょうか。その上、エジプト商人と言うのは、ユダヤ商人よりも上手なのがアラブ商人で、その上にエジプト商人が来る、といわれるほど商売上手と言うかタフな連中です。私があまり積極的に付き合いたくない気持ちになったのもお判り願えるでしょう。エジプトに商談に来ている他の日本人たちが巻き込まれている商談を見ると、日本人特有の短期決戦の構えで行くものですから相手に足許を見られ、有名なI・B・Mの呪文・・・即ち、I＝インシュアツラー（アラアの神の思し召すまま）、B＝ボクラ（明日、と言う意味ですが、実は何時になるか判らない）、M＝マレーシュ（仕方がないさ。気にしない。気にしない）・・・の餌食になって酷い目に遭っています。私の場合、別にその辺を意識した訳ではなかったのですが、こちらが中々腰を上げなかったことが、相手を焦らしていた結

果になつたらしく、幸いIBMの被害は一度も受けず、会いたい要人には会えるし、聞きたい話は聞けるし、で、ここでこんなに能率の良いスムーズな出張をした人は初めてだ、と現地の人に言われるほどでした。ツキもあつたのでしよう。

ツキと言えば、エジプトは大体暑い国で、私の行く一週間位前から本格的な夏になり、日中摂氏四十五度にもなつた、と威されたのですが、私の滞在した一週間は幸い左程暑くなく、夜なんか涼しいほどで、エアコンのないホテルでも大丈夫でした。暑くなると蚊がブンブン、蚤がピョンピョンと言うので、蚊取り線香やらフマキラーやらドツサリ用意して行つたのですが、こちらの方の厄介にもならないで済みました。

カイロ入りして二泊、ポートサイドに五泊、帰りに又カイロに一泊。この間電話が全く通じない不便さの中で、スエズ運河会社のあるイスマイリアというところまで、砂漠の中を一時間半以上も車を飛ばして往復する毎日でした。アポイントを取ることが出来ないのです、とにかく行ってみて会える人に会う、というおよそ能率の悪い話。水の出は悪く（勿論、水は飲めません）お湯なんかないので、砂にまみれた頭を水で洗う、など

居心地の悪い出張でしたが、今回は先ず先ずの成果でした。今回は調査の段階の出張です。腰を据えて敵のペースに嵌らぬようにやる積りではいますが「底なしの泥沼」に一步足を踏み込んだ感じで、これから当分苦しめられそうです。（完）

（昭和五十四年六月二十三日）

## 東欧の国々

### 東欧出張（ロンドン便り 十三）

初めて東欧のルーマニアとポーランドに出張した。一週間程の滞在で印象記もないもんだが、第一印象と言うのは強烈だし、当たっていることもあるので感じたままを書いてみることにした。

## 一・東欧の国々

東欧の国々、いわゆるソ連の傘の下でコメコンを形成している国々に対し、我々が持つている印象は何だろう。勿論、社会主義国、それも第二次大戦後のお仕着せの社会主義だから、国全体が圧迫されたような感じなのではないか。ソ連や中国みたいに国民全部が一つの方向に向けられ、これに反抗することは許されない。(特に、中国なんかで若い人たちが毛語録をかざし、建国の意気に燃えてハツラツとしているように見えるが、あの目を輝かしたような姿が、如何にも作られ、押し付けられた感じで、たまらなく嫌いだ)生活は、これも与えられた、限られた物資を分配するから、貧しいというより選択の余地のない統一された生活になるのではなからうか。また昔からの農業国とあれば、灰色じみた服を着て暗い空の下で黙々と働いている、というような地味な姿を想像してはいないだろうか。

少なくとも僕はそんな印象を持ち、どうにも行くのに気が進まなかった。ところが聞くを見るとでは大分違う。第一、いずれも大変な工業国である。チェコやユーゴはもっ

と進んでいるとのことだったが、ポーランドもルーマニアも大したもの。遅れているといわれるルーマニアは鉄、石炭、ウラニウム等、原料も豊富なことから得意の計画経済でドンドン伸びてくるだろう。貧しいのは仕方がない。物資が少なく、何か珍しいものや良いものが店頭に出ると行列が出来る。行列があつたら何だか判らなくても、とにかく並ぶのだそうだ。決して損はしない、と言う。でも、見て回つて、品種は少なくとも品物はある。選ぶ自由の範囲はずい分広い。日本の場合は一寸警沢になり過ぎていて、ものが多過ぎるので、選ぶ自由の範囲はこの位で充分ではないかと思う。服装だって、カーキ色の国民服なんてとんでもない。思い思い、色とりどりの毛や毛系の帽子をかぶり素敵な毛皮や毛のコートにパンタロン、ミニ、マキシ、それに洒落たブーツを履いたりした女性がサツソウと歩いている。男だつてシャンとしたもの。服装に関する限り、粗末な感じや暗い感じはしない。

確かに共産党の独裁政治だし、これに対する批判や反対は許されないが、押し付けられたと言う感じはしない。この辺は政府も弾力的に上手くやっているのではないか。力

さえあれば自分自身の家も持てるし（最近この種の私有が又認められつつあると言つ）、外国で稼いで来て車を買つたという人もあれば、ヨット・ハーバーには個人所有のヨットもある。ナイトクラブみたいなどころに来て楽しんでる人もいる。驚いたのは汽車に一等と二等の区別があつたこと。能力があつて真面目に働けば良い暮らしができると言つことなら自由世界と大して変わりはない。資本主義と社会主義の中間に何か理想の社会みたいなものがあつて、夫々の側からここへアプローチしているのが現在の姿なのではないか、と常々考えているが、東欧の国々が我々とは別の方向からのアプローチを試みているとすれば、この方が早いし、正解なのではないか、とすら思つたことだつた。

## 二．ポーランド

この国は土曜も働くので休みは日曜だけ（何でも月に一度党第一書記長の指定する休日があるとのことだが、これは売名行為臭い）。この日曜が一日挟まったので観光に当てることにした。バスに乗るのが一番手っ取り早い。乗ってガイドの酷い英語の説明を

聞いて驚いたのは、ナチスの悪口ばかり。確かに酷いことをしたらしい。特にワルシャワは、その存在を抹殺しようと言つ目的でコナゴナにされたと言つ。勿論大勢の人が犠牲になった。日本の場合のように爆弾による間接的な破壊と異なり、敵が入つて来て目の前で破壊するのだから残る恨みも大きいのではないかと思う。ここで誰がどんな殺され方をした、とか、ここはどう言つ具合に目茶苦茶に破壊されたとか、詳しいこと。そして破壊されたところは出来るだけ元通りに復元している。ワルシャワと言つ街は、だから、殆んど一〇〇%戦後に復興された街とは思えない。古い街の雰囲気そのまま残している。建物にしても石碑や銅像にしても元のまま。ドイツからの賠償金を元に一つ一つ恨みを込めて根気良く復元して行つたに違いない。この根気の良さには感心する。シヨパンやコペルニクスにゆかりの銅像や建物が復元されるのは良いとして、面白いのは、昔の王様の館が内部の美術品や家具、歴代の王様の肖像画や像とともに復元されている。ナポレオンに反抗した国民の英雄の將軍の像があるし、ロシアに反抗した靴屋上りの英雄の像がある。もっともこの人は帝政ロシアに反抗したのだから話は合つてい

るのかも知れない。

ソ連からのプレゼントと言う、とてつもなく大きな建物がある。三十階に展望台がある。威容、という言葉がピッタリするが一般の評判はあまり良くないらしい。デコレーション・ケーキと呼ぶそうである。コソコソとソ連の悪口を聞く。表面には見えなくてもやはり何だかんだと圧迫されているのだろう。

こつした復興が見事になされているのに比べ、住宅はここも大変らしい。国のアパートは面積四十五平米の二DK程度のものらしいが、これでも中々入れず、ガイドの例では十年以上も待つていると言う。結婚しても家がないので別居生活、と言うケースも多いとのこと。表に見える格好の良いところばかりに力を入れ、底辺の地味なところに手が廻らないのはどこの世界でも同じ政治の常で、正体見たり、という気がした。

(昭和五十年十一月二十二日)

## ウィーン（ロンドン便り 十八）

四月十六日から十九日まで、イースターの休日なのでオーストリアのウィーンまで行って来た。ウィーンという街、今でこそ何ということない街だが歴史を振り返ると大変な街。十三世紀頃から第一次大戦が終るまではハプスブルグ家の支配するオーストリアの首都としてパリに拮抗する大都会だった。オーストリアと言っても今は九州ほどの大きさで、人口も八〇〇万人足らずだが、当時は今のポーランド南部、チェコ、ハンガリー、ユーゴの北、イタリアのベニス、ミラノ、ナポリなどの都市国家、オランダ、ベルギーを領土とする大きな国だったのだから、その首都の賑わいもさぞやと思われる。その面影を残して街のたたずまいが何となく違う、静かできないな街である。例により立派な教会がある。一三七メートルの尖塔を持つステファン教会。宮殿も夏の宮殿と冬の宮殿があつて、夫々広い立派な庭を持っている。中を見ると調度品もさることながら建物自体の素晴らしさに圧倒される感じがする。ナポレオン戦争の後のウィーン会議会議は踊る、で有名になつた　　のあつたシェーンブルン宮殿はこの夏の宮殿だった。

フランス最後の王様のお妃でギロチンに掛けられたマリー・アントワネットもハプスブルグ家から出ているし、ナポレオンが皇帝になったときもウイーンに長いこと住んでいたと言う。こうしたヨーロッパの歴史の一面を支えてきたような街である。

今は音楽の町として観光客を招んでいる。天才モーツアルト、ハイドン、ベートーベン、ブラームス、シューベルトも長いことウイーンに住んでいたと言う。忘れてならないのがワルツのシュトラウス。少しでも雰囲気に浸ろう、とジプシー音楽に始まって、オペラ、オペレッタを見、ウイーン少年合唱団のコーラスを聞いた。特にオペラは良かった。言葉は全然判らないけど、声の芸術と言う印象が強かった。

思い出に、と少し無理をしてモーツアルトのシンフォニー全集とシュトラウスのワルツのレコードを買ってきた。

(昭和五十一年四月二十七日)

## 韓国

### 初めての韓国

ハウステンボスは年間四〇〇万人程度の人を集めて来ています。現状での損益分岐点が五〇〇万人ですから、本当はもつと欲しいのですが、今の実力では贅沢は言えません。こう言う施設で大切なのは、どれくらいの人が二度三度と足を運んで下さるか、と言うことです。現在、このリピーター率が十六、七%です。東京ディズニーランドでは、これが八〇%にも上がるそうです。三〇〇回も来た人がいるとか。これは施設の性格と後背地の力だと思えます。ハウステンボスの場合は僻地にありますし、施設の性格上、住人になってくれる人は別として、それ程のリピーター率は期待出来ません。日本の人口が一億二千万人、この内、旅行可能な人口を七割の八千万人としても、これから来ていただける人の数は知れています。とすると海外からの客を呼ぶということになりますが、欧米からの客が期待できるかどうか考えてみると、エコロギーを大切にしたい理想的な未

来都市、という観点から認知されていけば興味を持つ人もいるでしょうが、欧米から、態々日本に出来た欧州の街を見に来られるとはあまり考えられません。やはり東南アジアからのお客さんと呼ぶと言うのがまず第一の目標となりそうです。

将来は中国がターゲットになります。現在、中国の海外旅行はかなり制限されているそうですが、一九九七年に香港が中国に返還されると、事情が変わってくるだろう、との見方があります。中国の海外旅行が自由化されると、事情が変わってくるだろう、と十三億とも言われる人口の内、内陸に住む貧しい人たちを除き、北京、上海、広東を中心として沿海地区に三・五億の人口があると言います。この人たちがターゲットになるだろう、との見方です。昨年秋から台湾で少し動いてみたら、台湾では一種のハウステンボス・ブームになっていると言うことで、台湾からのお客が急増しています。この勢いを香港に移し、更に本土に移して行こう、と言うのが、これからの戦略になりそうです。台湾の人口が二一〇〇万人、この内、六十五万人が日本に来ていと言われます。将来はこの比率で行けば、中国本土からは七〇〇万から八〇〇万人の来日が期待出来そ

うです。代金の回収が一番の心配事ですが、もう一つのネックは日本の法務省。中国人の観光客受け入れにはかなり厳しい姿勢を示しています。ボート・ピープルがこれだけ発生している国ですから、観光の目的で入国して、そのまま不法入国のまま居座ると言うケースは充分考えられます。この辺をクリアしないと当分期待は出来なんでしょう。

その前に一番近い韓国。韓国の人口が四四〇〇万人、この内一〇〇万人が日本に来ています。この人たちに来て頂けないか、と言うことで、動き始めています。その一環として、七月四日から八日まで釜山とソウルへ行って来ました。私には韓国に対する偏見があつて好きになれないので、あまり気が進まなかつたけれど、仕事ですから仕方がありません。旅行需要喚起に一番影響力の強い旅行エージェントとマスコミの人に集まつて貰つて、説明会を開催してハウステンボスの紹介をし、パーティをやって、よろしく、とお願いをしよう、と言う訳です。今回こそ仕事ばかりの駆け足出張でしたが、思いつくままに、感じたことをご紹介します。

## 一・主目的のこと

まず、釜山に入りました。福岡から四〇分ですから、東京へ出るよりズツと近いのです。説明会については前々から計画し、会場の設営については、こちらからも人を派遣して準備しましたし、動員については、釜山の観光協会の責任者にお願いしてありました。この専務理事さんは何度かハウステンボスに来て頂いていて、私もこの短い間に何度か会っている人です。こちらの対応に満足してくれて、すっかりハウステンボス・ファンになってくれているので、実に良くやってくれました。旅行代理店や業界紙、行政の関係者など一〇〇名程度の動員を予定していたのですが、一三〇人近くの集まりで盛会でした。私が全体の説明を簡単にやった後、営業の担当者が営業的な説明をし、その後、パーティでご馳走し、最後の福引で賞品を振り撒いて、どうぞよろしく、ということ。成功と言って良いでしょう。翌日、ソウルに移動。こちらには社長にも来て貰って、四大紙と言われる新聞社の社長さん達を訪問。主な旅行代理店の社長さんにも会って貰ってハウステンボスの説明をして集客のお願い。昼間に観光セミナーと称して、プ

レス、テレビ、行政の関係者七〇人ほどを集めて講演会を開催しました。社長がコンセプトの説明をした後で、この事業のパートナーとも言える日本設計の前の会長の池田先生に環境問題の講演をして頂き、これは好評でした。夜は釜山と同じ業者説明会。

一五〇人も集まれば成功か、と思っていたのに二〇〇人を超える集まりで、大成功と言う結果でした。後はこれを契機にどう刈り取りをするか、これからが大変です。

## 二・ハングル語のこと

ハングル語は全く判らないのですが、文字の成り立ちとか発音なんかを聞いてみると、かなり理論的と言うより、人工的な言語だと言う気がしました。自然発生的に出来た言葉とは思えないのです。調べてみると、十五世紀の初頭に君臨した世祖大帝と言う名君が作ったものだそうです。五〇〇年位前に出来たエスペラントみたいな人工の言葉が、これだけの広がりになっていると言うことは、良い言葉が作られたという証拠なのでしょう。もっともハングル語が国語なんだから、漢字とか横文字は使うべきではない、全

部ハンゲルで表記すべきだ、と言うナシヨナリストの声が大きく、困った面も出て来ているようです。外国人の我々にしても、看板なんかは漢字や英語が混じっていれば、何とか感じが掴めるのに、ハンゲルだけでは何も判らず困ります。ハンゲルだけの名前を書いた名刺を貰って途方に暮れる場面が何度ありました。現在の首相の金泳三氏は、こうした動きに批判的な人とのことで、極端にその方向に進むということはないようですが、国粹主義者と言つのはどこにもいるものです。

### 三・北朝鮮問題

帰国の翌日、北朝鮮の金日成首席急逝の報が入ってビックリしたのですが、この事態になる前の現地の感じを銀行の関係者に聞いてみました。核査察問題を契機とした北朝鮮の緊張は、現地でもかなり深刻に受け止められていたらしく、総ての銀行関係者の家族は、その時点で帰国したとのこと。カーター元大統領の訪韓で一転、雪解けどころかサミットと言うところまで行ってしまっていますが、これも両陣営とも本心で

仲良くしようとしているのではなくて、いずれも経済援助を当て込んで、アメリカの顔を立てるためにやっていることだ、との見方が強いようで、家族を呼び戻すのもそれから、と言うことになっていたようです。金日成の急逝でどう言うことになりますか。もっとも現地の人は左程の緊張を感じていないようで、日本の駐在員達は日本からの情報の逆輸入の結果、バタバタしているのが真相ではないか、と言うのが結論でした。

#### 四・バブル経済

韓国の人口が四四〇〇万人、この内二十五%を越える一二〇〇万人がソウルに住んでいます。二番目が釜山で四〇〇〇万人だそうです。この二つの都市に人口が集中していると言うことです。いずれの空港も都心から三〇キロ以内のところにあるのですが、人口が集中しすぎている所為か、車が多くて、渋滞が尋常ではありません。釜山ではホテル差し向けの車がオーバードライブしてしまい、押して路肩に避難させるなんてことまでやらされて、一時間半以上かかりました。三菱重工に入社早々、まだ高速道路もモノレー

ルも出来ていなかった頃、良くお客の出迎えに羽田空港に通ったものですが、当時の混雑を思い出しました。気温三十七度以上、湿度九〇%と言つ殺人的な環境の中ですから、着いた途端から大変な目に遭わされました。高速道路の建設は進んでいるようですから、追々良くなると思います。韓国は今でも経済成長率七%を維持していて、不況知らず、と言われていますが、こうしたインフラ整備に金が使われているので、一般の庶民は景気の好調を感じていないのではないかと、言っていました。話を聞きながら方々歩いている中で、ソウルの近郊で少なくとも四つの開発計画があることを聞きました。それも四〇〇万坪とか、一五〇万坪とか、ハウステンボスの規模以上の計画があるのです。日本の四・五年前のバブルの時期に当たっているのだろうか、と思いました。

## 五・統制の話

何事によらずまだ相当、政府の統制が残っているようです。驚いたのは海外旅行に対する規制。つい先頃の八九年まで、海外旅行に年令の制限があつたのだそうです。あま

り若くして海外を見ると、外国の感化を受けて、国内の統治に良くない結果を生むから禁止する、と言つのが理由だそうで、これは全くの思想コントロール。自由主義社会にもこんな統制が可能なのかと驚きました。テレビの放映時間も朝十時から夕方の六時まででは禁止されているそうです。広告も厳しく制限されているそうで、例えば、タバコの広告は禁止されているとか。そう言えば空港に降り立って広告が少ないな、と思つたし、町の中でもケバケバしい広告は見られません。広告嫌いの私にとっては誠に良いことで、こんな統制はしても良いのではないかと都合の良い自由主義者です。テレビに広告を入れるのにも国の機関のチェックが厳しいとのことでしたが、こんな規制は袖の下の温床になる可能性があるのではないかと、これは下司の勘ぐり。(平成六年八月一日)

## 長いわらじ

紀行文編の最後は、昭和五十六年の六十五日間世界

一周旅行で締めることにする。昭和五十六年と言う年は、私にとって一番大変な年だった。先の家内を亡くす、父を亡くす、横浜の工場に転勤する、と忙しい年だったが、この中で、六十五日間かけて、世界中を回った。この時の記録である。

七月十三日東京発、ロンドン、ゼノア、ナポリ経由、今日はモンテカルロに来ています。

私の商売は世界中の外国が相手ですから、何かコトがあつたら、すぐにもどこへでも飛んでいけるような体制を作っておかねばならない立場にあるのですが、家内が病気で入・退院を繰り返し、亡くなる直前は三週間も病院に泊り込んだりしていたので、このところ日本を離れることが出来ませんでした。最後の海外出張が昨年一月の中国本土、香港行きでしたから、それから一年半は誰に彼に頼んで、代わりに行って貰っていま

た。まどろっこしくもあつたし、カツコ良く言えば、会社にも大分迷惑をかけたということになります。

仕事の方も、この一年位は割りと好調だったのですが、この秋以降の仕事の見通しが思わしくないので、何とかせねば、と言つことになりました。この辺で陣頭に立て、との上からのお達し。法事を幾つか準備中でした。七月十二日がワイフの百か日と親父の三十五日で、これは東京。七月二十五日に長崎で親父の四十九日。それに八月には長崎で二人の初盆。でもそうそう我俣は言つてはいられません。最初の方だけ済ませて、後の分は諦めることにしました。周りの人たちは盛んに同情してくれて、中止か繰り延べかの運動を起こしてやろうか、という声もあつたのですが、こちらにも意地があるし、長いこと迷惑をかけた、という負い目もあります。少々長いわらじをはくことになりませんが、決行するにしました。

お蔭様で、七月十二日には母も上京するほどの元気で、当日は暑い中、無事法事を済ませました。後の分は子供達だけを長崎にやることにしました。子供達が、折角の夏休

みの間淋しいのではないか、と可哀な気もしましたが、どうせ日本にいても満足な付き合いは出来ません。長崎で十日ほど過ごした後、神戸で馬場兄が暫く預かってくれることになりました。あとは何時ものリズムでやってくれたら良いのです。誰か来て貰おうかと思つたら、むしろ他の人が入って来るより自分達だけの方が気楽で良い、位のことですから外から心配するほどのことはないのかも知れません。病氣と怪我が怖い、と散々注意したら、逆にパパのほうこそ無理するな、気をつける、とやられる始末。

七月十二日の法事を済ませ、翌日の成田発でロンドンへ飛んだ、と言う訳です。

・仕事探しの行脚です。あちらに一日、こちらに二日。一日に客を四・五軒回り、話をしたり話を聞いたり。毎日の指示とレポート作り、短時間の移動旅行は疲れます。やはりロンドンが一番ホツとするので、出来るだけロンドンを根城にし、週末ロンドンに戻って一休みして又出かけるような予定を作っています。

来週はグラスゴー、エジンバラなどスコットランド地方。次の週はギリシャ。次が大

陸のフランス、オランダ。予定が出来ているのはこの辺までで、あとは臨機、と云うことにしています。どうやら帰国は九月に入ってからということになりそう。この寄稿も、もう一度、外からすることになるでしょう。

(24<sup>th</sup> July, 1981. Beach Plaza Hotel, Monte Carlo)

## 一・ロイヤル・ウエディング

何から書こう、って、やはりトピックが最初でしょう。珊瑚の愛読者にはオトギ話の好きな奥さま方もいらっしゃるでしょうから。

七月二十九日は英国にとってはかなり大変な日でした。チャールズ皇太子とダイアナ・スペンサー嬢との結婚式。世界的に皇室がなくなりつつある現在、こんな大規模な皇室結婚式 (Royal Wedding) は、もう今後ないのではないか、と言われていました。

チャールズ皇太子は英国の人たちには中々人気があります。日本の皇太子とは扱いも

大分違うみたいです。空軍でパイロットの資格を持っているし、スポーツではポロの名手。結婚式の三、四日前にも、英国代表として試合をしていました。ポロというのは馬を使った比較的危険なゲーム。大事な日の直前にこんな危険なことをするなんて、日本の皇室では考えられないことでしょう。乗馬は勿論、スキー、ヨット、潜水等スポーツは万能のようです。気さくで冗談好き（この冗談が高貴な方にしては少々下品なのだそう）、もう少し上品に、という声があるのだそうです）、笑顔が人懐っこくて魅力的なのは人柄を表しているのですが、外見上大変得をしているように思います。

一方、ダイアナ嬢は一応平民の出、とは言うものの、スペンサー伯爵家の次女。先祖をたどると、「何とか何世」とかの王様に辿り着くと言いますから、勿論その辺の馬の骨とは大違いです。芳紀十九歳であまたの王妃候補の中からこの金的を射止めました。大柄ですが目が大きくていわゆる可愛い感じのお嬢さん。何でも英国人の中から王妃が選ばれたのは久しぶりのことなのだそう、それだけでも英国の人たちのお気に入りの方でした。もう直ぐ二十才とは言え、これだけ騒がれては精神的にも参るのでしょう。

例の皇太子のポロの試合を応援に来ていましたが、カメラの放列に耐え切れず、途中でベソをかいて逃げ出したとか、こんなことが大きく新聞で騒がれていました。それでも前日、皇太子と二人でテレビのインタビュアーにに応じていたのが中々立派でした。堅苦しい雰囲気はまるでありません。皇太子もダイアナ嬢もゆったりと椅子にかけ、女性のインタビュアーも足を組んで話しているような感じ。二人は答えるのに際して目で相談しあったり、手を握ったり、暖かい雰囲気微笑ましい感じでした。

私がロンドン入りした七月十四日の頃は、もう街はお祭り気分。道には飾り付けがしてあるし、オミヤゲ品は Royal Wedding 一色。地方や近くの国々から観光客が集まって来る気配がうかがえました。かく言う私も偶々英国国内にいる予定が作れたし、この日は全国休日で、どこにいても仕事にならないので、前日にグラスゴーからロンドンに戻って来ました。

その前の日曜日はリハーサルとやら。事務所が式のあるセントポール寺院の直ぐ近くなので、日曜出勤のついでに一寸覗いて見ましたが、既に大変な人で当日の混雑が伺え

ました。岸恵子が人込みの中でテレビカメラに向かって話しているのに出くわしました。「世紀の結婚式が、三日後にここで挙行されます」なんてことを言っていたようでした。

前日は花火。ハイドパークで盛大に打ち上げられる、と言つので仲間と見に行きました。今の時期のロンドンは日が長くて、十時近くにならないと暗くなりません。打ち上げが十時と言つので、食事をしてからホテルに車を置いて歩いて行きましたが、これまた大変な人。それでも公園が広いので芝生に座ったり、寝転がったり。仕掛花火でも見ようとしたら大変な人込みに揉まれねばなりません。打ち上げを見る分にはユックリ見られます。こちらの公園は木が多くて良いのですが、こんな時は大きな木が邪魔で枝葉の切れ目を探すのが苦勞でした。打ち上げている時間は小一時間。種類や規模は日本とさして変わらず、むしろ日本辺りから持ってきたのではないか、と思つたほどでした。

当日、現場に見に行きたい、と話すと、誰も彼もが、大変な人で見られやしないから止せ、と言います。ホテルでテレビで見ているのが一番だ、と言われましたが、折角現地にいるのにテレビもないものだ、と思つて出て行くことにしました。混雑は覚悟の上。

見えなくても人込みと雰囲気を味わえれば良い、と思いましたがから……。何でも、良い場所で見ようと思つたら前の日から席取りをせねばならぬ、とのこと。パレードの通り道のビルの窓はずい分前から、相当高値で予約されていたようでした。式場の前には現に若い人たちが寝袋を持って前日から泊り込んでいました。英国人はこう言った点、実に気が長く我慢強いのでセツカチな日本人は敵いません。

八時過ぎにホテルを出て地下鉄で式場のセントポール寺院前へ。この日は地下鉄、バスどちらに何回乗つても良いと言う記念切符が売り出されていたので、記念に、と思い、二ポンド出して買いました。地下鉄で来る招待客もかなりいて、シルクハットにタキシードと言う人をずい分見ました。

駅を出てペリスコープという潜望鏡を買つて人込みの中に入つて行きました。ニューヨークからこの日を目指して、スリのグループが入つて来ているとかで、フトコロにはご用心。ロンドンには古い教会が二つあります。セントポールとウエストミンスター。式場をどちらにするか、で何か争いがあつたみたいですが、結局セントポールになりま

した。私がノコノコ出かけて行ったのはこの教会の前なので、一〇列は後ろになります。背丈に劣る私などには人の背中しか見えません。ペリスコープを使うと様子が判りますが、前の人たちもこれを使い出しますから前の方からペリスコープの林になります。その林の間からチラチラ様子を覗く、という有様でしたが、雰囲気は十分に楽しめました。

九時になるとロールス・ロイスが続々と着きます。各国の代表達なのでしょう。黒い人たちが見えました。日本からは皇太子ご夫妻が来られると聞いていましたが、見過ごしました。

群集が退屈して、最初の頃はお巡りさんが前を歩いたりすると、イエーイ、なんてからかっています。お客が着いたり、ビーフ・イーター達に乗せたバスが来たり、騎馬隊が通ったりするようになると段々本式の騒ぎになりました。ヤング・ロイヤルズ(皇室の子供達)が着いたりすると声が一段と大きくなります。クイーンは馬車。天気が良いのでオープン・カーでした。ブルーの帽子にワンピース。クイーン・マザーは緑色で

整え、もう八十歳を過ぎた筈なのに元気そう。マーガレット王女はピンク系でした。クインが馬車を降りて教会の階段を登り、登り切ったところで半分位振り向いて、一寸右手を上げて群集に挨拶した仕草が何とも言えず優雅でした。続いてチャールズ王子の馬車が着くと、もう大騒ぎ。これは軍服姿。良い大人が興奮してしまって、後ろの方で何も見えないものですから、前の人に、どうしたの、何をしているの、何て聞きながらそれでも、「イエーイ」なんて大声で叫んでいました。最後にスペンサー嬢が現れると正にクライマックスです。純白のウェディングドレスに長いケープ。階段をずい分引きずっていましたから一〇メートル位あったのではないのでしょうか。新婦は流石に群集に挨拶する余裕はなかったようで、ケープを風になびかせて教会の長い階段を駆け上がるように式場に消えていきました。丁度シンデレラが踊りの会場に入っていくような、そんな感じでした。

皆が式場に入ってしまったところで私は大急ぎでホテルに戻りました。今度はテレビで中を見ようというわけ。私は見ませんでした、日本の皇太子がテレビに映ったそう

で、礼儀正しくて中々評判が良かったようでした。

大変に豪華で盛大な結婚式。流石に女王の表情もキツイ感じでしたが、新郎が若い新婦を暖かくいたわっているのが良く判りました。教会の中の別室でレジスターを済ませると式の終わり。出て来られたときは新郎新婦の緊張も解けて、笑顔からも固さが取れていました。

帰りは馬車のパレード。新郎新婦が先頭。女王とスペンサー伯の車が続きます。スペンサー伯には離婚暦があるとの事ですが、前の夫人、即ちダイアナ嬢の本当のお母さんと言う人が良い待遇をされているのが奇異な感じでした。

馬車のパレード。これは英国、それもロンドンならではの、と思います。レンガと石で出来た古い街並みを、赤い制服、黒いズボン、銀色の帽子の近衛兵が騎馬で護衛する中を、四頭立ての馬車が走ります。セントポール寺院からの道のりは特にピツタリのように思えました。トラファルガー・スクエアを抜け、アドミラルティ・アーチをくぐってザ・メルを真っ直ぐにバッキンガム宮殿。この辺になるともう一幅の絵としか言いよう

がありません。新婦が一寸はにかんで、一寸ぎこちなく手を上げて群衆に心えていました。愛らしい笑顔が初々しい印象でした。

翌々日、朝食を取りながらテレビを点けたら、偶然この続きをやっていました。丁度、サザンプトンに二人を乗せたロールス・ロイスが着くところ。オシノビ旅行ですから、誰もどこへ行くのか知りません。双発のプロペラ機に乗り込むとチャールズ王子はパイロット席に座り、自分で機を離陸させました。途中はどうか判りませんが、離着陸は自分でやるとのこと。この辺も日本とは大違いです。操縦席の窓から手を振る王子の飛行服姿が如何にも凜々しく見えました。

結局、プロペラ機で七時間ほど飛んでジブラルタルに着いたようです。ここで待つている皇室ヨットに乗って、ゆっくりハネムーンとのこと。その後直ぐギリシャに行きましたら、イサカと言う島のギリシャの大船主を訪れたとか、新聞に出ていましたから地中海を流しまわっていたのでしょうか。

ギリシャで、馬鹿な事をするものだ、という人がいました。皇室の存在と言うのは今

やあつてもなくても良いもの。昔から続いている、と言つことで大衆がそのまま受け入れてゐるのに、殊更騒ぎ立てて、自分がここにいる、と存在を誇示しなくても良いではないか、と言つのです。只でさえ英国はインフレ、失業に苦しんでいます。キラビやかなパレード、豪華ヨットによるハネムーン、これが皆税金で賄われている、と民衆が感じ始めたらどうなるのか。(もつとも英国の王室は英国有数の金持ちなのだそうで、地代収入だけでも大したものなのだそうですが・・)ギリシャの王制が倒れたのも、こうした大行事がキツカケだったとのことです。大衆の不満がこうした機会に少しづつ嵩じて来て、やがて皇室不要論が出て来るのだ、と言つのです。今の時代は、良い暮らしをしている人は静かに目立たないようにしているべきだ、と言つのがそのギリシャ人の議論でした。

歴史の趨勢はその辺にあるのかも知れません。だから多くの人が、こんな行事は今後はもうないだろう、言っているのです。でも好運にもその場に居合わせた私にとっては誠に良い見もので、英国王室の力を充分に見せて貰い、楽しませて貰いました。

(28<sup>th</sup> August, 1981 於 Stockholm)

## 二・仕事のつと

とにかく長い旅でした。七月十三日出発から九月十六日帰着まで、六十六日間に十三カ国、三十三の都市を巡り、一四一社の客を訪問して二二二人の人と会いました。この間ホテルの移動が二十九回。行く先々に駐在員や商社、代理店の人がいますが、それらの人たちが張り切って、私の滞在期間を出来るだけ有効に使わせようと考え、ガツチリ予定を組んでくれるのは有り難いのですが、こちらは一人。次から次へのスケジュール攻めに参りました。

客を訪問すれば、どうしてもこちらがメイン・スピーカーになります。話し易い人もいれば、取っ付き難い人もいます。良く来た、と歓迎してくれる客もあるし、何しに来た、と言わんばかりの対応をする客もいます。話の持つて行き方もワン・パターンではなく、相手に合わせて入って行って、聞きたい情報を仕入れて来る。中々芯の疲れる旅

です。これから会おうとする客の予習は必要ですし、会った後は、まとめのレポート作り、テレックスの発信。レポートは帰国してからやったのではとても時間がないので、旅行中に仕上げることにしました。日中、時間刻みで四・五社回った後、出先との付き合いもあるし、客との食事もあり、客の家に招かれたり、で夜の部も大抵予定が詰まります。早めに終った時は、少々アルコールの入った状態でレポート作りをしますが、さもなくば、翌朝早起きして書き物をしたり、日曜日を丸々つぶしたり。幸い今回は、前に行ったことのあるところが殆んどでしたので、観光の方に時間を取られることがなく、その分楽でした。

折角日曜日にパリにいなから、一日中ホテルに籠ってレポート書きをしたり、興が乗って朝の四時ごろまで仕事をして、翌日眠い思いをしたりしましたが、ロサンジェルスの最終日、夜の部を早く切り上げて貰って総仕上げが出来、一応形を整えました。

行く先々で、大変だろう、疲れるだろう、と同情されましたが、ヨーロッパの根城をロンドンにしたのが成功で、外から見るほど大変な思いはしませんでした。ロンドンに

帰れば昔の住処ですから、気分的にはホツとします。大きな荷物はロンドンのホテルに預け、洗濯物もここをセンターにしておいて歩き回れました。少ない荷物を効率的に使う旅の要領を心得ていたのも強味でした。

### 三・息抜き

ゴルフはロンドンで三回、アメリカで二回、ギリシャ、オスロ、スエーデン、デンマークで各一回づつ、合計九回。週末はもっぱら移動日になりましたが、土・日いずれかがゴルフになることが多くてこんな回数になりました。成績は今ひとつパツとせず、スエーデンで出した九二が最高で、一番酷かったのがギリシャの炎天下でやったときの

――。後は一〇〇内外でした。三週間欧州各地を回って、ヘトヘトでロンドンに帰ったついでその足でゴルフ場に直行し、午後からワンラウンド、なんて馬鹿なこともやりましたが、旅の疲れと運動の疲れは性質が違うことが良く判り、格好の息抜きでした。疲れが溜まって来ると、いくら一生懸命やっても集中力に欠け、不本意なゲームが多くな

りました。

ロンドンではシエークスピア劇「ベニスの商人」を観ました。前に観た「コメディ・オブ・エロス」は現代化されたものでしたが、これはオーソドックスなもの。言葉が難しかったのですが、これ位なら筋も判っているので充分楽しめました。

アメリカではワシントンを観光しました。ワシントンは初めてでしたが、見事な建物の多いきれいな街です。これが世界の政治の中心になっている街なのかしら、と思ったことでした。国会議事堂が一番素敵で写真も沢山撮りました。ホワイト・ハウス、最高裁、リンカーンやジェファソン記念堂ときれいな建物が多いし、それはそれで立派なのですが、考えてみると、この街が出来てせいぜい二〇〇年。何か無理して古さを銜い、重みをつけよう、としているみたいだな、そんな感じを受けました。

ニューヨークでは前回行き損なつたヤンキー・スタジアムへ行き、本場の野球を観てきました。日本と違いテクニクとか小細工でなく、力と力がぶつかり合う、という感じの野球です。カ一杯投げる球を力任せに打つ。凄いスピードの打球を動物的な勘を持

つ野手が追う、といった調子。スピード感があるので、選手の名前なんか知らなくても見ているだけで楽しいゲームでした。

#### 四・久し振りの英国

久し振りのロンドンには心なしかイラついているように感じました。

空港からのモーターウェイ。タクシーの運転手のお行儀の悪いこと。追い越し、割り込み、レーンの変更。私のいた五・六年前は殆んどタクシーのお行儀が良かったように思います。こちらの人は、タクシーの運転は酷い、乱暴だ、と言いますが、日本のタクシーに比べれば大人しいもの。私には良いお手本にすら見えたことでした。マナーの良さ、運転の正確さ。細い道から広い道に出ようとして車の切れ目を待っている時、譲って道を開けてくれるのは大抵タクシーでした。それが今回は何かギスギスしているのです。タクシーの運転手にも経済の波が感じられるのではないのでしょうか。

そう言えば物価もずいぶん高くなっています。ホテル代やゴルフ代、駐在員の家賃な

どは一種の贅沢品ですから高くなつても仕方がないでしょう。私がいた頃は、インフレ、インフレと言つても生活必需品は安いと思ひました。肉、野菜、牛乳、卵などは安いのです。贅沢品は上がつても生きるため最小限に必要なものはさして上がらないので、いわゆる庶民、底辺はさして困らないのではないかと思ひましたが、今度は一寸様子が違つて来たいです。サッチャーさんの強気の経済政策の破綻がこの辺にも現れてきています。どうでしょうか。

各地で頻繁に起こっている暴動が良い例でしょう。人種差別が原因みたいに言われているようですが、最初は失業者の不満が爆発したものだと事です。最初の暴動で捕まったり、不当な扱いを受けたりしたのが有色の外国人だった、と言つので騒ぎが更に大きくなつたらしいのです。もっとも最初の暴動でも外国人、特に黒人の参加が多かつたとのことですから、比率から言つてもその連中が沢山捕まつても当たり前だつたのかも知れませんが、黒人を多く捕まえた、とか、警察での扱いが不公平だつた、とかで人種差別の騒ぎに発展しています。大体英国、特にロンドンというところは外国人が住み易

いところだと思えます。人種差別がなく誰でも受け入れてくれるという雰囲気がありました。昔から色んな植民地からの人が集まってきたという歴史がそうさせるのでしょうか。誰も外国人ではないのです。隣にインド人が住もうがユダヤ人が住もうが全く意に介しない。東洋人の私が外を歩いていて、白人に道を聞かれたことが何度あったことか。誰でも彼でもこの社会の中に包み込んでしまうのが英国でしたのに、今になって人種差別なんて騒いでいるのは何かオカシイ気がします。タメにしている人が裏にいるのではないのか。それとも英国が本当に変わってイライラした状態にあるのか。

街をザワツかせていたもう一つの原因はチャールズ皇太子とダイアナ嬢の結婚で、こちらは目出度い方。英国人と皇室の関係は一寸特別なものがあるように思います。とにかく労働党も皇室の存在を肯定するお国柄なのですから。皇室の皆さんも女王を始め一家総出で英国のために良く働いています。あのハネツ返りといわれるアン王女ですら「これが生活の糧なのよ」とか言いながら、あちらへ行ったりこちらへ顔を出したり。どうも皇室を一つの職業と考えている節すら感じられます。チャールズ王子が「歴史上

最も古い職業に従事している我々・・・」という冗談を言つて大ウケにウケたとか。歴史上最も古い職業といつたら、ある種のご婦人の職業であることはご存知の通りです。そのチャールズ王子も中々評判がよく、大部分の国民は、英国人のダイアナ嬢をお妃に選んだ彼を評価し祝福しているようです。ですから街中が飾りで一杯、前夜には花火をするとか、当日は何十万人の人が出るとか、全世界では五億人の人がテレビを見るとか、とにかく大変な騒ぎでした。

お仕事の方はパツとしません。とにかく歴史のある英国の船会社に元気がありません。かつて七つの海を征服し、我が物顔に横行していたあの勢いはどこへ行ったのか。五・六年前もその兆候は感じていましたが、今度歩き回つてみて、改めてその凋落振りを見て、淋しい思いをしました。東インド会社の昔から活躍していた Peninsular and Oriental 社（通称ピー・アンド・オー）がドンドン船の数を減らし、人減らしをして何とか生き残ろうとしています。クイーン・エリザベス号やクイーン・メリー号などの豪華客船で有名なキューナードも今や不動産会社に乗つ取られ、キューナード・ビルと言

う重々しくて立派な建物は人手に渡り、今の事務所は場末の借りビル。ファネス・ウィジーと言う、これも十九世紀からの老舗大船主も香港の中国船主に乗っ取られる始末。

その他にも小さいながらも歴史のある船主が数々ありますが、いずれも持ち船を減らしたり、支え切れずに潰れて行ったりしています。こんな調子ですから私の商売もパツとしません。世界的な不景気で荷動きが減っている上に、特に日本経済の減速で日本の貿易量が伸びず、日本に来る外国船の数が減っています。私の商売は生きている船を捕まえることですから、良い魚がこの辺を泳ぎまわってくれないことには、商売上がったまりになります。全世界的にも船会社は大変な時なのですが、英国の船会社については特に明るいものを感じることが出来ませんでした。

(昭和五十六年十月十日)

(紀行文編 了)

## 中締め

母や祖母の話によれば、幼少の頃の私はむしろ虚弱体質で、何度も死に掛けたそうですが、長ずるに従って丈夫になり、特に中学の頃、柔道を始めてからは大病もせず、元氣印を売り物にして来ました。今もって虫歯はないし、眼もつい先ごろまで一・五から二・〇だったし、良い身体を貰ったものと両親には感謝しています。

平成十七年の五月に何の予兆もないまま胆管ガンと診断され、生まれて初めての大手術を経験しました。胆管・胆囊・肝臓の一部の悪いものは全部摘出したとのことで、一応心配のない状態になっています。良い医者に巡り会い、病院では看護婦さんに大事にされ、多くの皆さんにご心配を頂き、激励して頂きながら、手術後のどん底から這い上がって来て、命を頂いたな、と言う気持ちになっています。生まれて初めての経験を経て感じるころがあり、自分史を作ってみることにしました。これまで半生の間、自分の置かれた場で、自分なりに一生懸命に生きて来た、と言う自負があるので、今後、何時何が起こっても後悔はしない積りですが、これからの人生を「貰った命」と考えて大

切に生きて行きたいと考えています。

この自分史は、私の半生記と考え、ここまでを「中締め」と位置づけて、今後の半生記は補遺編として書き続けて行きたいと思っております。

(平成十七年十二月)

佐世保市ハウステンボス町四 三十六

ハウステンボスヒルズ 一 四〇三

長島 達明

電話 / FAX 〇九五六 五八 七六五〇

携帯電話 〇九〇 三一九六 三三二七

メールアドレス [vzd06705@nifty.com](mailto:vzd06705@nifty.com)